米原町埋蔵文化財調査報告書ＸⅣ

# 入江内湖西野遺跡発掘調査報告書

― 町道彦根・米原線建設に伴う発掘調査 ―

1991・3
滋賀県坂田郡
米 原 町 教 育 委 員 会

# 序

有りし日の入江内湖は、琵琶湖でも２番目の大きさをもつ内湖でしたが、長年の干拓事業によって、その姿を広大な田園風景に変えてしまいました。その際に、多量の遺物が内湖全域にわたって露呈していることが判明し、入江内湖には、古代遺跡が眠っていることが周知されるに至ったのです。

今回、教育委員会では、町道彦根・米原線建設に先だって、入江内湖の西野地区において発掘調査を実施しました。その結果、古墳時代前期の多量の土器を伴う集落跡が確認されました。

こうした調査成果が、米原町の歴史の解明に少しでも役立ち、町民の皆様方がふるさと米原に、より一層の愛着を感じていただけたら幸いです。

文末になりましたが、調査関係者の方々に深く感謝の意を表します。

平成３年３月

米原町教育委員会

教育長　杉　村　　馨

# 例　言

1．本書は滋賀県坂田郡米原町大字磯字西野に所在する入江内湖西野遺跡について、平成２年度に実施した発掘調査の報告書である。

2．本調査は、町道彦根・米原線建設に伴って、米原町教育委員会が主体となって調査を実施した。

3．本調査は発掘調査を平成２年５月７日～９月７日の間に実施し、発掘調査終了後に整理作業および報告書作成に着手して、平成３年３月 20 日までこれをおこなった。

4．調査の体制は下記のとおりである。

| | | |
|---|---|---|
| 調査主体 | 米原町教育委員会 | 教育長　杉村　　馨 |
| 調査事務局 | 〃 | 課　　長　前川　章太郎 |
| | 〃 | 課長補佐　山本　一幸 |
| 調査担当 | 〃 | 主任技師　中井　　均 |
| | 〃 | 技　　師　土井　一行 |
| 調査補助員 | 青山　大輔、三輪　晃三、丹下　昌之、田口　信行、相宗　孝文 | |
| | 的場　一彦、橋本　善明、柴田　さゆり、中村　真寿美 | |
| 調査作業員 | 古沢　　進、山口　文子、戸田　千代子、金子　キワエ、西川　志登 | |
| | 川合　喜久子、田中　千恵子、川井　喜久子、山川　千鶴子 | |
| | 富田　京子、筧　す満 | |

5．出土遺物の整理作業は主に調査補助員と調査作業員がおこない、遺物の実測、図面の浄書は土井がおこなった。

6．遺物の写真撮影については寿福　滋氏の手を煩わした。

7．本調査に関する図面や写真等の記録および出土遺物は全て米原町教育委員会で保管している。

8．本書の執筆、編集は土井　一行がおこなった。

# 目　　次

序　　文

例　　言

第１章　調査の経過 …… 1

第２章　遺跡の立地と歴史的環境

１．遺跡の立地 …… 3

２．歴史的環境 …… 3

第３章　調査の結果

１．層位と遺構 …… 6

２．出土遺物 …… 24

第４章　調査のまとめ …… 52

# 挿 図 目 次


第１図　調査区位置図 …… 1
第２図　調査地地区割図 …… 2
第３図　調査地周辺図 …… 5
第４図　調査Ⅰ区南壁土層断面図 …… 6
第５図　Ⅰ区・Ⅱ区・Ⅴ区遺構全体図 …… 7
第６図　SD01 平・断面図 …… 10
第７図　SD02 平・断面図 …… 10
第８図　SD03 平・断面図 …… 11
第９図　SD04 平・断面図 …… 11
第 10 図　SD05、06 平・断面図 …… 11
第 11 図　SD16、17 平・断面図 …… 12
第 12 図　SD18 平・断面図 …… 13
第 13 図　SD19 平・断面図 …… 13
第 14 図　SK01 平・断面図 …… 13
第 15 図　SK02 平・断面図 …… 14
第 16 図　SK06 平・断面図 …… 14
第 17 図　SK08 平・断面図 …… 15
第 18 図　SK09 平・断面図 …… 15
第 19 図　SK10 平・断面図 …… 15
第 20 図　SK11 平・断面図 …… 16
第 21 図　SK12 平・断面図 …… 16
第 22 図　SK13 平・断面図 …… 17
第 23 図　SK14 平・断面図 …… 17
第 24 図　SK15 平・断面図 …… 18
第 25 図　SK16 平・断面図 …… 18
第 26 図　SK17 平・断面図 …… 18
第 27 図　SK18 平・断面図 …… 19

第28図　SB01平・断面図 …… 19
第29図　SB02平・断面図 …… 19
第30図　SB03平・断面図 …… 20
第31図　SB04、05平・断面図 …… 21
第32図　SB06、07平・断面図 …… 22
第33図　SA01平・断面図 …… 23
第34図　SD01出土土器 …… 25
第35図　SD02出土土器 …… 26
第36図　SD05出土土器 …… 27
第37図　その他の遺構出土土器－１ …… 28
第38図　SD19出土土器 …… 28
第39図　その他の遺構出土土器－２ …… 29
第40図　その他の遺構出土土器－３ …… 30
第41図　その他の遺構出土土器－４ …… 31
第42図　その他の遺構出土土器－５ …… 32
第43図　SK06出土土器 …… 34
第44図　SK07出土土器 …… 35
第45図　SK13出土土器－１ …… 37
第46図　SK13出土土器－２ …… 38
第47図　SK13出土土器－３ …… 39
第48図　SK13出土土器－４ …… 40
第49図　包含層出土土器－１ …… 41
第50図　包含層出土土器－２ …… 42
第51図　包含層出土土器－３ …… 43
第52図　包含層出土土器－４ …… 44
第53図　包含層出土土器－５ …… 46
第54図　包含層出土土器－６ …… 47
第55図　Ⅴ区スクモ層内出土須恵器 …… 48
第56図　古墳時代以降の土器 …… 48

第57図　土　　錘　…… 49
第58図　石　製　品－１　…… 50
第59図　石　製　品－２　…… 51

# 図　版　目　次

図版１　（１）SD01・02 検出状況
（２）SD01 完掘状況
図版２　（１）SD01 土層断面
（２）SD02 土層断面
図版３　（１）区土層断面
（２）Ⅰ区遺構検出状況
図版４　（１）Ⅰ区遺構完掘状況（西より）
（２）Ⅰ区遺構完掘状況（東より）
図版５　（１）Ⅰ区調査作業風景
（２）SK06 遺物出土状況
図版６　（１）SA01、SB02、溝状遺構群
（２）SD05・06、SK10～13、SB03
図版７　（１）SB01、SD16・17、SK06
（２）SK13 土層断面
図版８　（１）SK13 遺物出土状況
（２）SK13 自然木出土状況
図版９　（１）Ⅱ区遺構完掘状況（西より）
（２）Ⅱ区遺構完掘状況（東より）
図版 10　（１）柱穴半截状況
（２）柱穴半截状況
図版 11　（１）Ⅲ区完掘状況（東より）
（２）Ⅳ区調査作業風景

図版 12　（1）Ⅳ区完掘状況（東より）

（2）Ⅳ区土層断面

図版 13　（1）Ⅴ区遺構完掘状況（西より）

（2）Ⅴ区遺構完掘状況（東より）

図版 14　（1）Ⅴ区スクモ層内須恵器出土状況

（2）調査地より入江干拓地を望む

図版 15　（1）SD01 出土土器

（2）SD02 出土土器

図版 16　遺構出土土器　20：SD02、29：SD05、105：SK07

89：SK19、40：SD19

図版 17　（1）SK06 出土土器

（2）SK06 出土土器

図版 18　遺構および包含層出土土器　93・99・102：SK06、その他：包含層

図版 19　（1）SK01 出土土器

（2）23～28：SD05、69・106・108～110：SK07 出土土器

図版 20　（1）SK10 出土土器

（2）74：SK07、82：SK16、146・153・156・その他：包含層出土須恵器

図版 21　（1）包含層出土須恵器

（2）21・22：SD02、50：IP5、その他：包含層出土須恵器

図版 22　（1）SK13 出土土器

（2）SK13 出土土器・土錘

図版 23　（1）SK13 出土土器

（2）SK13 出土土器

図版 24　SK13 出土土器

図版 25　SK13 出土土器

図版 26　（1）遺構出土土器　35・36：SD17、42：VP11、44：IP63、45：VP8

49：VP18、81:SK16、86～88：SK18、90：SK19

（2）遺構出土土器　31：SD15、33：SD17、46：VP14

47：IP19、78：SK11、107：SK07

図版27　（1）遺構出土土器　30：SD17、38・39：SD10
48：IP43、83～85:SK07
176：包含層
（2）遺構出土土器　32：SD15、34・37：SD13
41：IP39、43：IP53
61：IP62、68：SK07
75：SK08

図版28　（1）縄文式土器　51：IP5、52：IP29、53：IP50
54：IP54、57:SD08、58：SD19
その他：包含層
（2）縄文式土器　55：SK07、56：SK16、59：SD01
60：SD02、その他：包含層

図版29　（1）包含層出土土器
（2）包含層出土土器

図版30　（1）150：包含層出土須恵器
（2）227～231：Ⅴ区スクモ層内出土須恵器

図版31　（1）土錘
（2）古墳時代以降の土器

図版32　（1）石製品
（2）石製品

図版33　（1）植物種子
（2）木製品

図版34　（1）残存柱穴
（2）残存柱穴

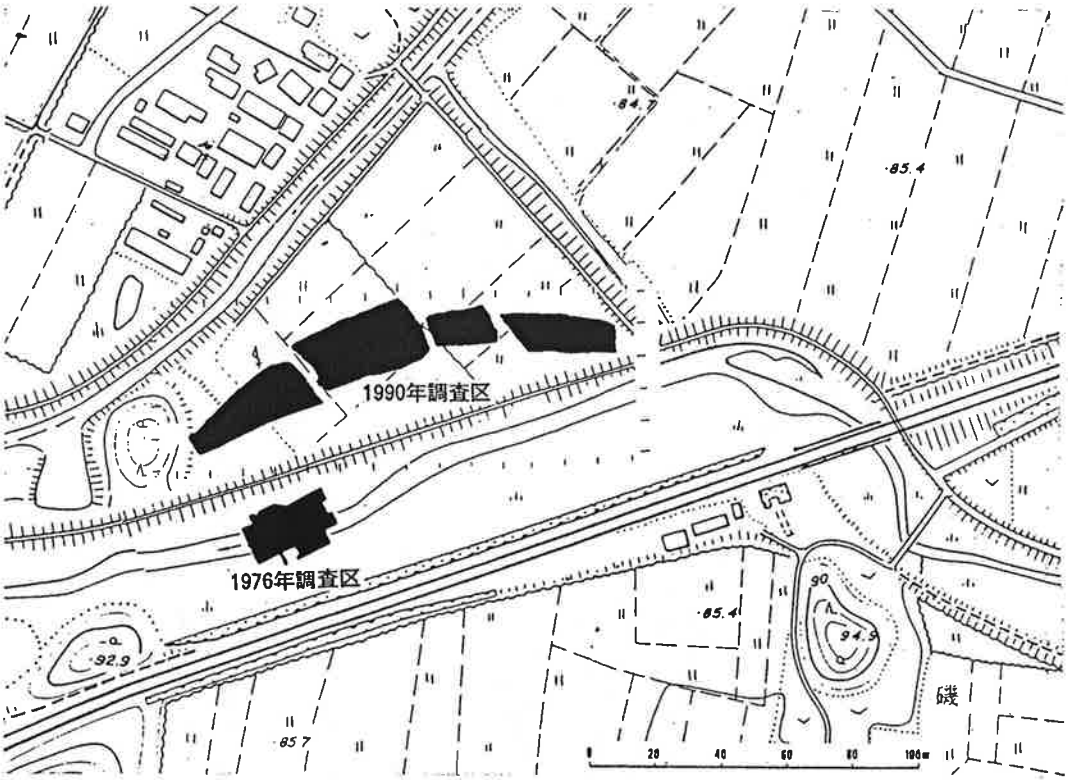
# 第１章　調査の経過

長年の懸案事項であった町道彦根米原線が、いよいよ本格着工される運びとなった。そこで路線上の文化財の有無を確認したところ、路線が周知の遺跡である入江内湖西野遺跡上を通ることが判明した。そのためルート変更を含めた保存協議を行ったが、路線変更及び現状保存は無理であり、発掘調査を実施し、記録保存をはかることとなった。

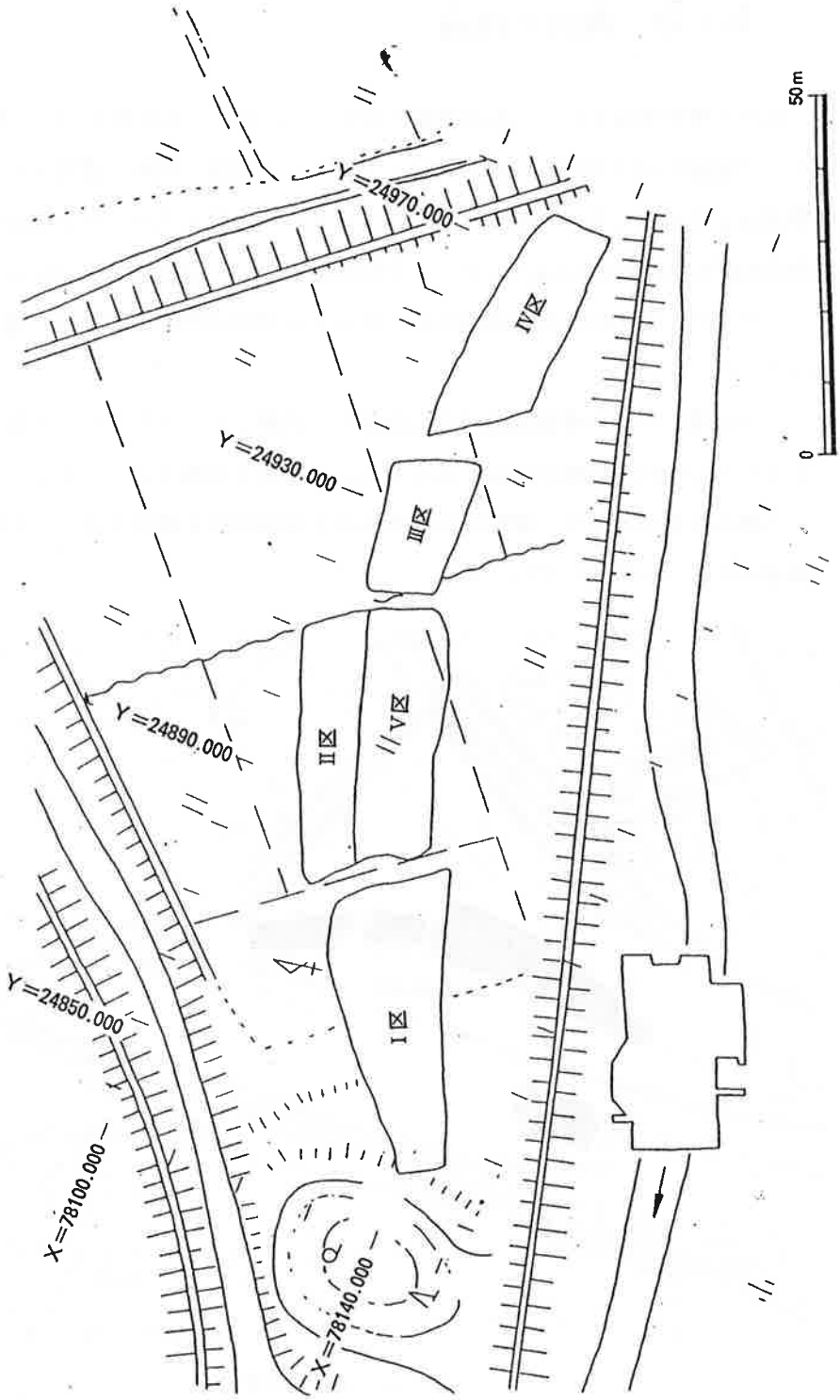
このため、昭和62年度に調査範囲を確定する目的で路線予定地内に試掘トレンチを設定した。

その結果、今回の発掘調査区内に設定した試掘トレンチ内より、土器・石器・木製品等を含む遺物包含層が確認されたため、本調査を実施することとなった。

本調査を進める上で、掘削土の置き場所を現場付近で確保することが困難なため、調査区を５つに区分して行った。




第１図　調査区位置図


Y=24970.000
Y=24930.000
Y=24890.000
Y=24850.000
X=78100.000
X=78140.000
IV区
III区
II区
V区
I区
50m
0

第2図　調査地地区割図

# 第２章　遺跡の立地と歴史的環境

## 1. 遺跡の立地

今回の調査地は、米原町大字磯字西野に所在する。調査地の北側には、干拓によってその姿を没した、旧入江内湖が広がっている。また、南側には佐和山丘陵がせまっている。現在はＪＲ東海道本線と矢倉川によって分断されているが、本遺跡はもともと、この丘陵が北方へ張り出した一支丘の末端微高地上に立地している。今回の調査地では、この微高地が旧入江内湖と接する汀線の部分が確認できた。当時の地理的環境を復原する上においても、良好な資料となり得るであろう。

## 2. 歴史的環境

入江内湖は東西 2km、南北 2.6km、周囲 8km におよぶ、琵琶湖第 2 の水面面積を誇る内湖であった。しかし戦中から戦後にかけて干拓事業が実施され、入江内湖は水田として生まれ変わったのである。この干拓の際、内湖底一面に、縄文時代～平安時代にわたる無数の遺物が散らばっているのが発見された。これを町内在住の磯崎文五郎氏（現米原町文化財専門委員）が地道に採集され、入江内湖全域が一大複合遺跡である事が確認された。

採集された遺物には、縄文時代の土器、石棒、凹石、磨石、骨角製銛、弥生時代の鹿角戈、鹿角又鍬、古墳時代の勾玉、管玉、金環、石釧などをはじめ、多量の古式土師器や須恵器などがある。奈良時代以降のものとしては、墨書土器、灰釉陶器、和同開珎、神功開宝などがあげられる。

しかしその後、入江内湖西野遺跡の考古学的調査は、昭和 51 年の矢倉川河川改修に伴う発掘調査[①]を待たなければならなかった。

この昭和 51 年の調査によって、内湖周辺に立地する遺跡の一端が明らかになったのである。旧陸地部にあたる所では、古墳時代前～中期頃と考えられる掘立柱建物３棟や、溝、貯蔵穴、ピット群などの遺構が検出されている。出土遺物の大半は土師器であったが、弥生土器や須恵器も出土している。土器類の他には、石斧、石鏃、石錘などの石器類や、銅鏃、管玉、小玉などが見受けられる。

木製品に関しては、たも網、弓などが出土しているが、農耕具に該当するものが

見あたらない。この点は注意しておかなくてはならないであろう。

周辺の遺跡に目を向けると、内湖の南西端には縄文時代早期～晩期に至る磯山城遺跡があり、押型文土器や条痕文時が見つかっている。またここからは早期末の屈葬人骨も出土している[②]。

内湖の北方には、縄文時代早期の条痕文土器と中期の船元式土器が出土した、筑摩佃遺跡[③]をはじめ、弥生時代前～後期の立花遺跡[④]が存在している。中でも立花遺跡から弥生時代中期の玉造り関係遺跡が発見された事は、特筆すべき点であろう。

古墳時代には、磯山一帯に後期古墳群が造営されている。石室の形態と立地の面から、渡来系氏族との関わりや湖上交通を掌握していた海人との関連が指摘されている。[⑤]

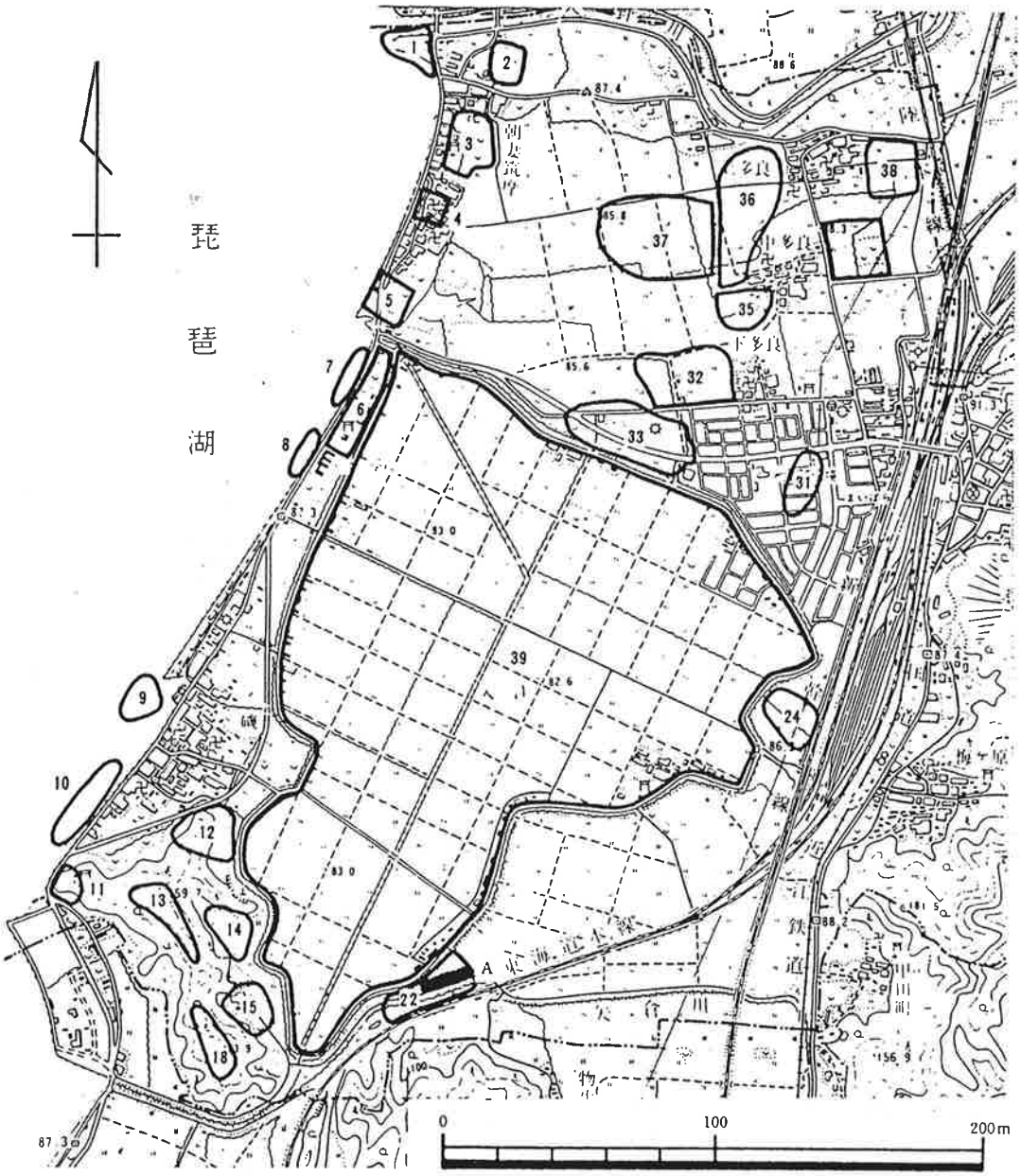
古墳時代の集落跡としては、入江内湖西野遺跡を始めとして下定使遺跡[③]、中多良遺跡[⑥]等があげられる。

歴史時代で特に目を引くのが、白鳳時代寺院跡と考えられる堂谷遺跡[⑦]と、平安時代の筑摩御厨跡と推定されている筑摩湖岸遺跡[⑧]である。筑摩湖岸遺跡からは、墨書土器、風字硯、緑釉陶器、斎串などの特殊な遺物が出土しており、遺跡の性格を裏付けているといえよう。

以上、入江内湖西野遺跡周辺の遺跡の様相を概観してみた。これらの事からもわかるように、入江内湖周辺には古く縄文時代より人々が生活を営んでいたようである。そして彼らの生活の拠り所として、入江内湖は極めて大きな位置を占めていたと考えられる。

注


① 田中勝弘『矢倉川中小河川改修に伴う入江内湖西野遺跡発掘調査報告書』
滋賀県教育委員会 (財)滋賀県文化財保護協会 1977
② 中井均他『米原町埋蔵文化財調査報告書Ⅳ 磯山城遺跡－琵琶湖辺縄文早期～晩期遺跡の調査』
米原町教育委員会 1986
③ 中井均『一般国道8号（米原バイパス）関連遺跡試掘調査報告書』米原町教育委員会 1989
④ 中井均『立花遺跡発掘調査報告書～県営ほ場整備およびかんがい排水路に伴う発掘調査～』
米原町教育委員会 1988
⑤ 滋賀県坂田郡教育会『改訂近江國坂田郡志』1941 小島正夫他「矢倉・磯崎両遺跡について」
『近江郷土史研究』第1巻第3号 1973
⑥ 中井均『中多良遺跡発掘調査報告書－県営かんがい排水路事業に伴う発掘調査－』
米原町教育委員会 1989
⑦ 猪熊兼勝他『日本古代の鴟尾』奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 1980
⑧ 中井均『米原町埋蔵文化財調査報告書Ⅴ 筑摩湖岸遺跡発掘調査報告書』
米原町教育委員会 1986




A．今回調査地
1．朝妻港遺跡跡
2．朝妻遺跡
3．朝妻城跡
4．法善寺遺跡
5．今江寺遺跡
6．筑摩御厨跡遺跡
7．筑摩湖岸遺跡
8．入江小学校前湖岸遺跡
9．磯湖底遺跡
10．磯湖岸遺跡
11．磯崎古墳群
12．磯山城遺跡
13．磯山城跡
14．堂谷遺跡
15．柚塚遺跡
18．虎ヶ城跡
22．入江内湖西野遺跡
24．米原駅西遺跡
31．米原駅前遺跡
32．下定使遺跡
33．中多良入江内湖周辺遺跡
35．蘭華寺遺跡
36．立花遺跡
37．筑摩佃遺跡
38．本願寺遺跡
39．入江内湖遺跡

（遺跡番号は米原町教育委員会発行『米原町内遺跡分布調査報告書』1988と一致する。）

第３図　調査地周辺図

# 第３章　調査の結果

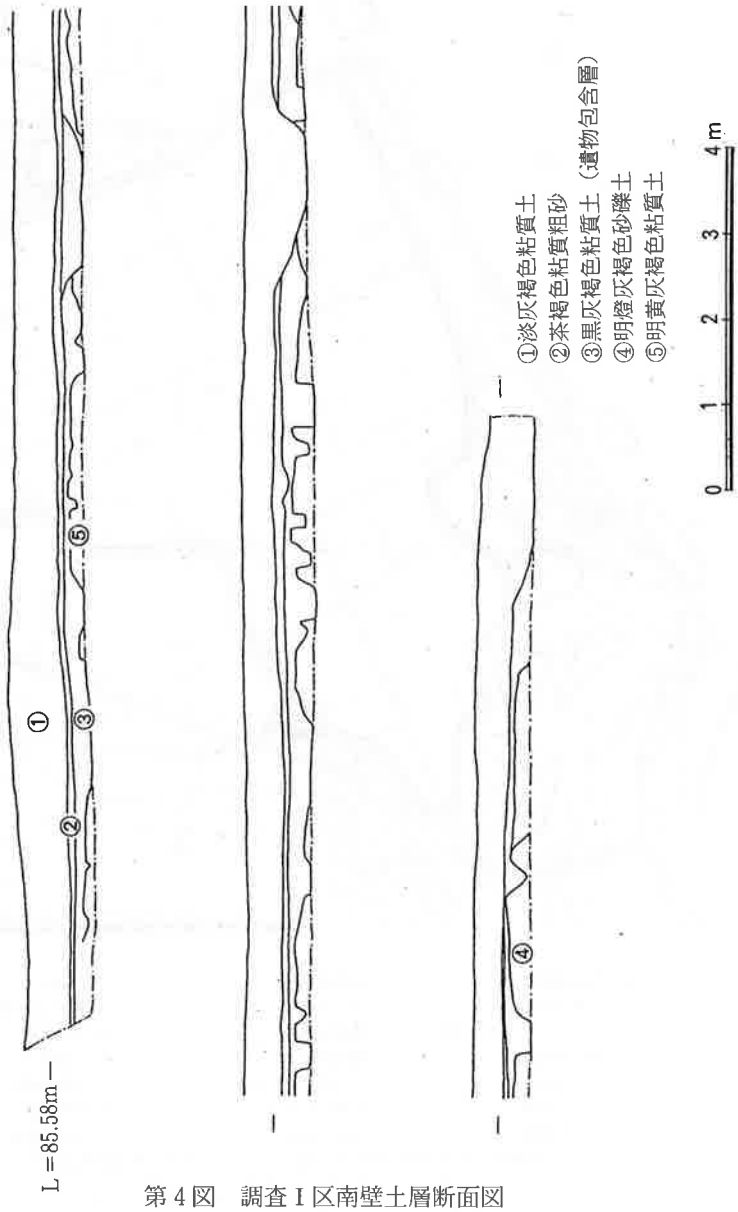
## １．層位と遺構

今回の調査では、遺構面が海抜 85.3m 前後で検出されている。これが海抜 85.00 m 付近を境にして遺構が途だえてしまうのは、そのあたりが内湖と陸部分との境であったからにほかならない。

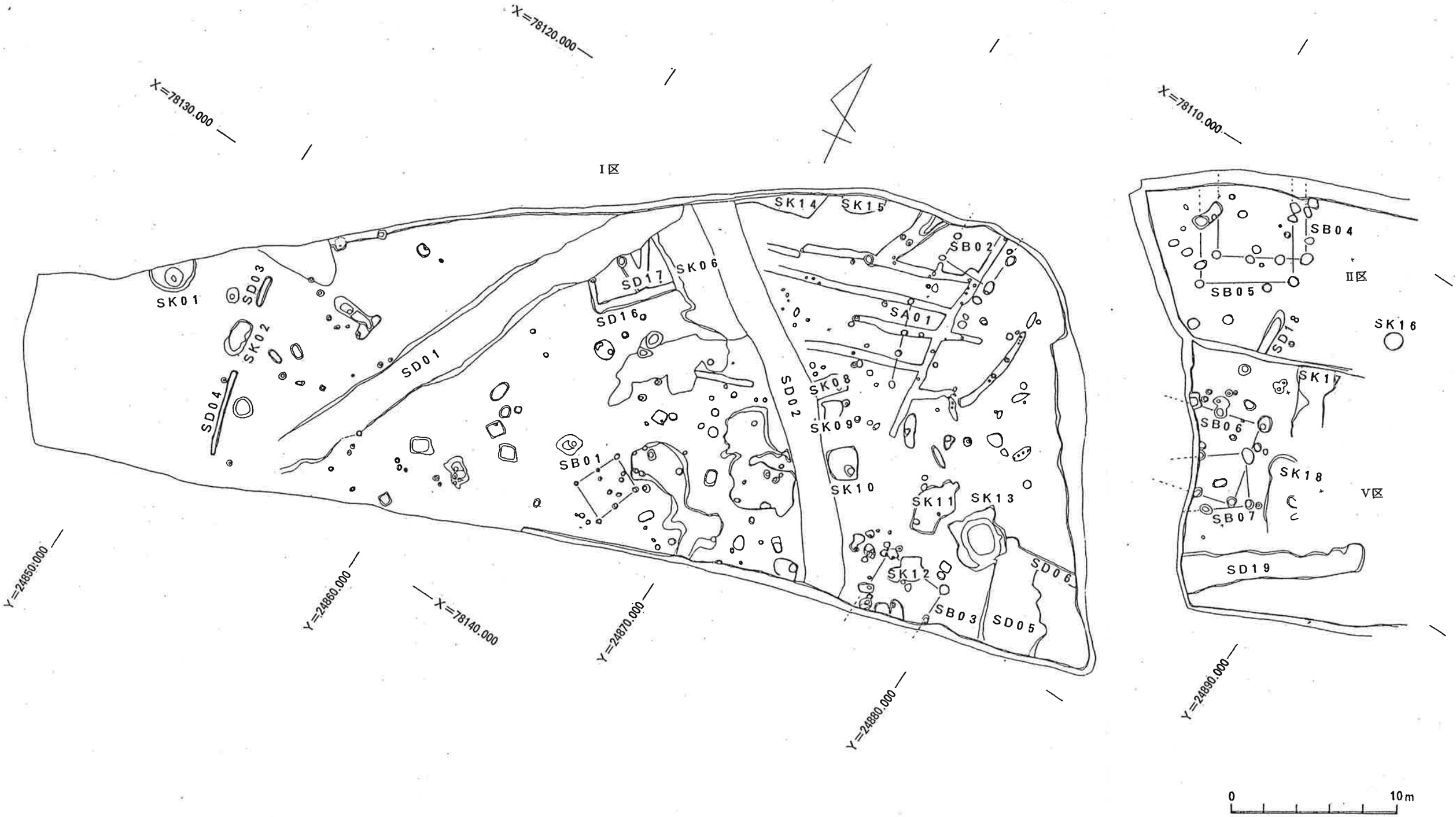
そのことを示す状況証拠として、スクモ層の存在があげられよう。このスクモ層とは、植物等の有機質遺体が腐蝕して土壌化した結果生成される、自然堆積土層のことを意味する。

この層は遺跡の途だえてしまう所から、旧入江内湖に向っては厚く堆積しているが、陸地部分へ向けては全く見られない。

本遺跡の基本層序は、最上層に現在の水田の




第４図　調査Ｉ区南壁土層断面図




第5図　Ⅰ区・Ⅱ区・Ⅴ区遺構全体図

耕土があり、その直下に水田の庄土が存在する。それらを除去すると黒褐色の遺物包含層が現れ、さらにこれを除去すると遺構面（地山面）が顔を出すといった様相である。

これが、旧内湖部分においては、遺物包含層のかわりに前述したスクモ層が堆積している。

このスクモ層の中には木製品が何点か含まれていた。ただし、陸地部分から離れるにしたがって、数量的には減少傾向を示す。これは土器や石器も同様である。いちばん内湖側の調査区（Ⅳ区）では一点の遺物も認められなかった。

次に検出された遺構としては、溝状遺構、土壙、柱穴、掘立柱建物跡などがある。柱穴の一部には柱材が遺存していたものもある。柱穴はどれも小規模で、大きさもふぞろいである。掘立柱建物とした中には、柱間の不均等なものもかなり含まれているため、規格性のある建物は存在していなかったようである。

溝状遺構の中には、集落の内と外を区画していたと考えられるものも存在する。

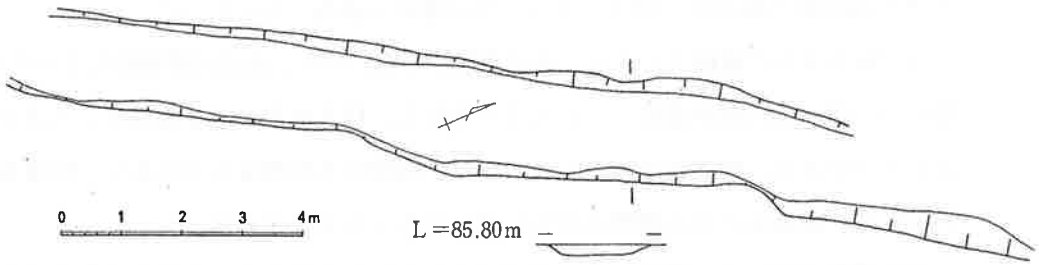
なお土壙としたものの中には、平面プランが不整形で土壙内の凹凸が激しいものがあり、それらは自然地形のくぼみやたわみの類とも考えられる。

以下、各々の遺構について概観していくことにする。

## 溝状遺構

### ＳＤ０１

幅約２m、深さ22㎝前後を測る溝である。溝の底部はフラットである。埋土の大半は白色粘土である。この溝の詳細な時期は不明であるが、古墳時代の遺物包含層の上面より掘り込まれており、古墳時代遺構のものであることは確実である。埋土内より青磁片（中世以降か）が一片だけ出土しており、おそらくその時期の溝であろう。

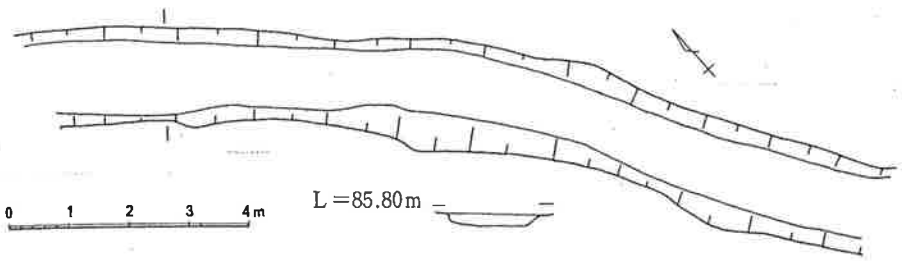



第６図　ＳＤ０１平・断面図

### ＳＤ０２

幅約２ｍ、深さ20㎝を測る溝である。ＳＤ０１同様、埋土には多量の白色粘土が詰まっていた。ＳＤ０１と同時期のものと考えられる。

隣接する矢倉川河川改修に伴う調査で検出された、粘土溝と同様のものであろう。

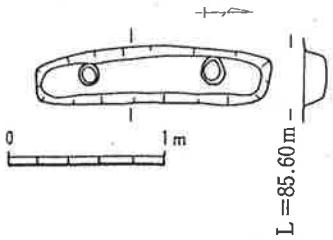



第７図　ＳＤ０２平・断面図

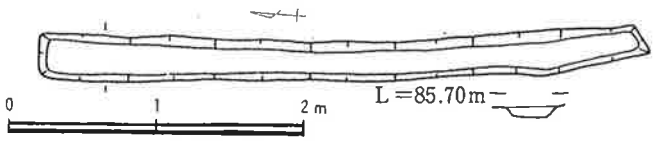
### ＳＤ１３・０４

幅60～70㎝、深さ約12㎝を測る。この溝状遺構はおそらく、集落の周りを囲っていた溝か、あるいは調査では追求できなかったが、布掘りの溝に杭を立て並べて柵とした溝状柵列の可能性が高い。

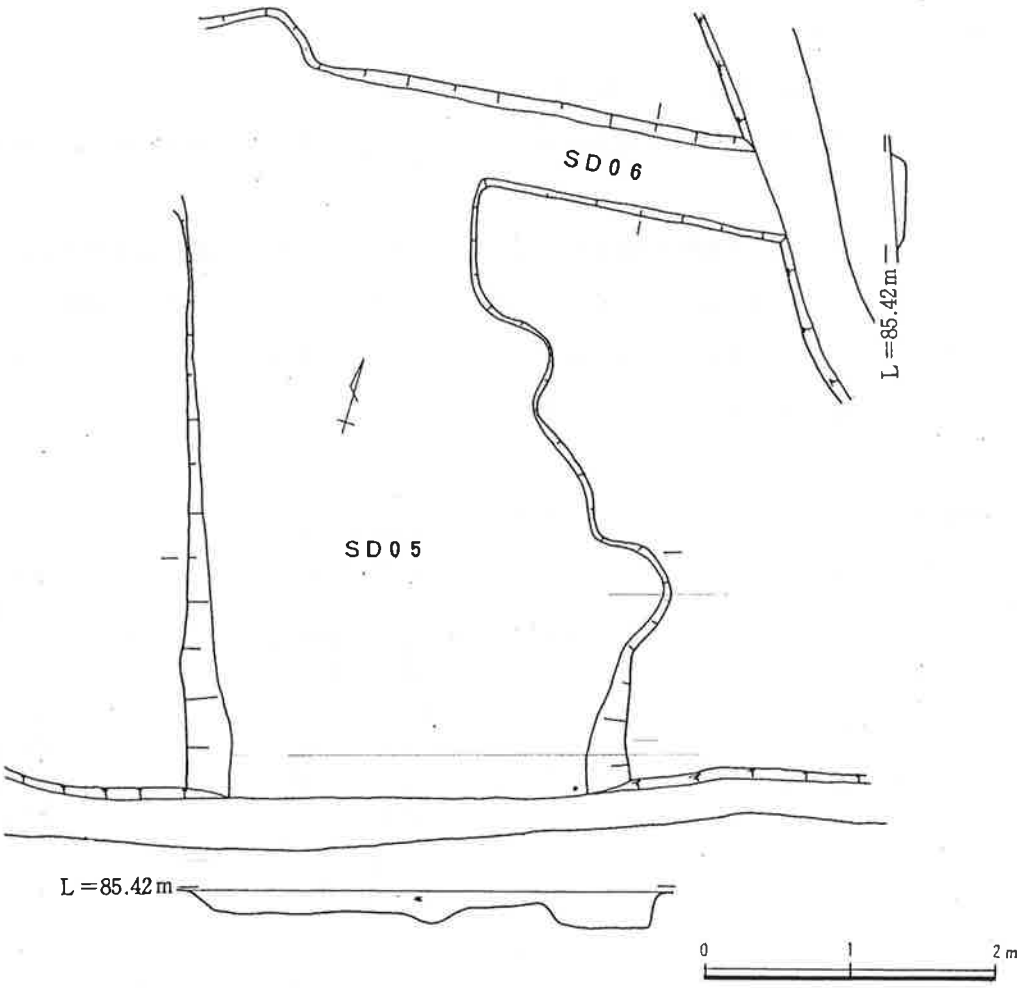
この遺構を境に遺構の密度が極端に稀薄になるのは偶然ではなかろう。




第8図　ＳＤ０３平・断面図




第9図　ＳＤ０４平・断面図




第10図　ＳＤ０５、０６平・断面図

### ＳＤ０５

幅２ｍ～2m50㎝の溝である。ほぼ南北方向の向きを示す。底面はフラットで、溝肩部の立ち上がりも直立に近い。

出土遺物から、おおよそ古墳時代前期に位置付けられる遺構である。

### ＳＤ０６

幅約50㎝のほぼ東西方向の溝である。ＳＤ０５とほぼ直交する。ＳＤ０５、ＳＫ１３との切り合いは認められず、同時併存していた可能性が高い。

### ＳＤ０７～１７

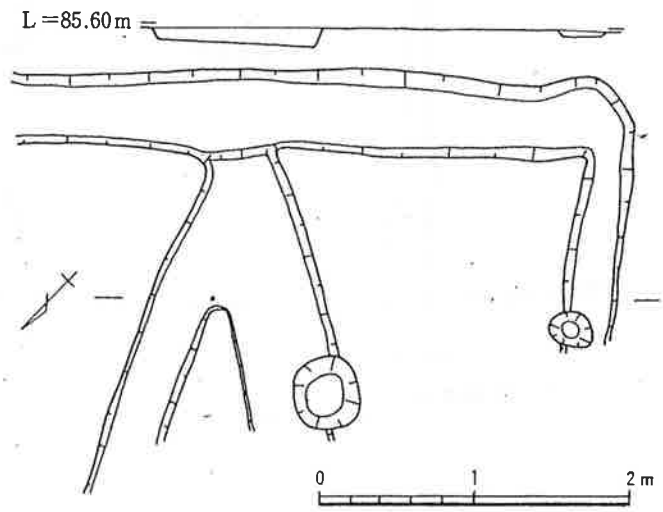
幅約20～30㎝、深さ約７～10㎝を測る溝状遺構群である。ある程度の規則性を持っており、それぞれの溝と溝の間がせまいことから、耕作に伴う鋤溝の痕跡の可能性もある。

いずれの溝も出土遺物が細片かつ少量であるため、詳細な時期決定は困難である。しかしながら、溝の底からいくつかの柱穴が検出されていることから、周辺の柱穴群と一連のものと考えられる。切り合い関係からみて溝状遺構群の方が、柱穴群よりもやや後出するものと間がえられる。

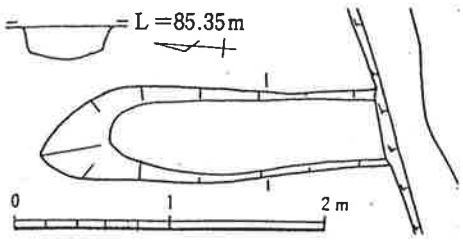
### ＳＤ１８

幅約44㎝、深さ約10㎝を測る。溝というよりは土壙と呼んだ方が妥当なものかもしれない。

時期は古墳時代前期に該当するものである。




第11図　ＳＤ１６、１７平・断面図



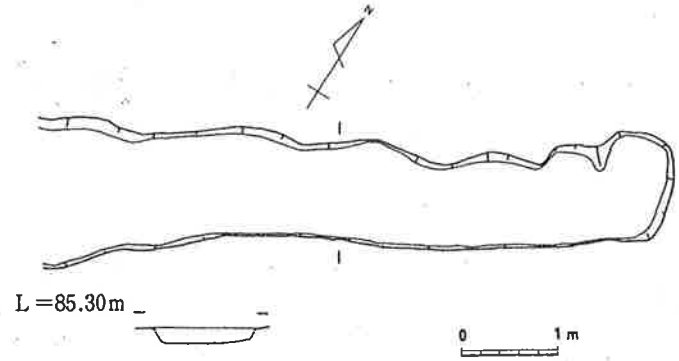

第12図　ＳＤ１８平・断面図

### ＳＤ19

幅１ｍ～１ｍ60㎝、深さは深いところでは約15㎝、浅いところでは約４㎝を測る。Ｉ区で検出されたＳＤ１５・０６と関連性があると思われる。

この溝の東端は、内湖に向って開放しておらず、取水・排水等の通水施設としての機能は薄いと思われる。むしろ、何らかの施設を区画する性格を有していたと考える方が妥当であろう。

出土遺物には古式土師器が見られ、この中にＳＫ16出土遺物との接合資料が存在する事から、２つの遺構は同時併存していた可能性が高い。

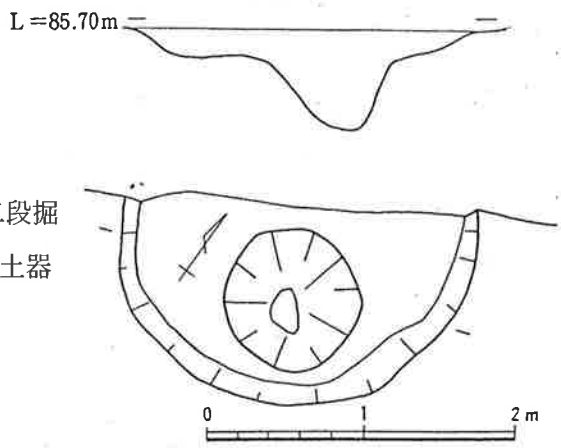



第13図　ＳＤ１９平・断面図

## 土　　壙

### ＳＫ０１

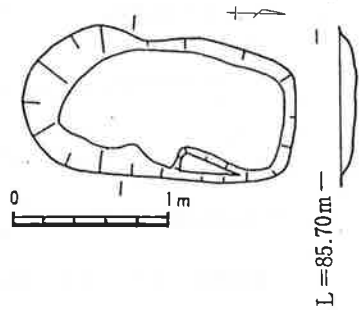
直径約90㎝、深さ約35㎝を測る二段掘りの土壙である。出土遺物には弥生土器や土師器、若干の須恵器片を含む。




第14図　ＳＫ０１平・断面図

## ＳＫ０２

深さ約５～６㎝の非常に浅い土壙である。集落の区画溝と考えられるＳＤ03・04が、この土壙を挟んで途切れていることは偶然ではなかろう。あるいはこの場所が、集落の出入口の１つとも考えられる。




第15図　ＳＫ０２平・断面図

## ＳＫ０３

調査当初、土壙としてとらえていたが、底の方より遺存柱痕が見つかったため、柱穴の一種である可能性も考えられる。

## ＳＫ０４

極めて不整形なものであるため、おそらく自然地形か古い段階での攪乱と考えられる。

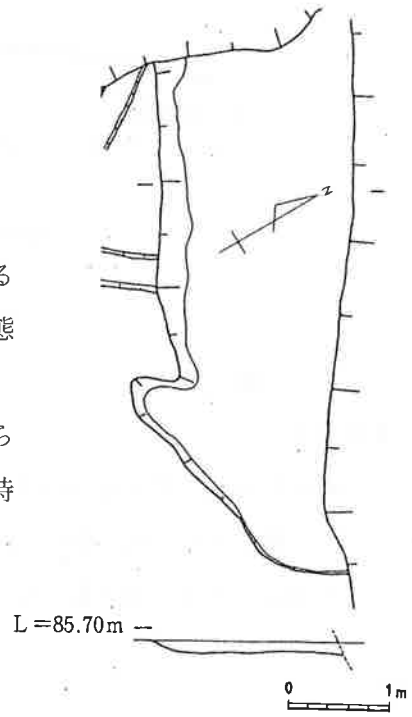
## ＳＫ０５

ＳＫ０４と同様のものである。

## ＳＫ０６

ＳＤ０２によって遺構の東側が削平を受けているため、正確な規模については明らかではない。形態は隅丸長方形になると思われる。

出土遺物には、甕・壷・鉢・高坏・器台等が見られる。中でも、ほぼ完形を保っていた長頸壷は、時期決定に際しての良好な資料である。




第16図　ＳＫ０６平・断面図

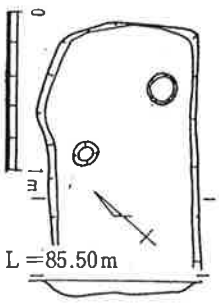
## ＳＫ０７

ＳＫ０４・０５と同様の性格を有していると考えられる。

## ＳＫ０８

約80㎝×１ｍ20㎝以上の長方形を呈する土壙である。当初は掘立柱建物の柱穴とも考えたが、底が浅く、柱痕に類するものが検出されなかったことから、ここでは土壙として扱った。

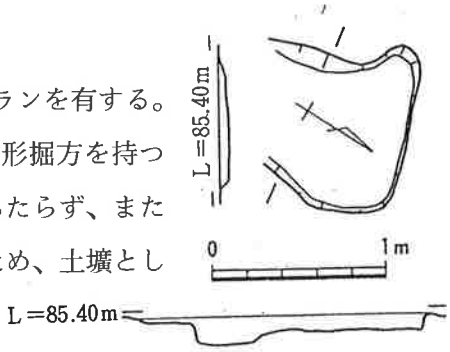
また、土壙内部で検出された柱穴は、切り合い関係から見て、この土壙よりも古いものである。




第17図　ＳＫ０８平・断面図

## ＳＫ０９

約60㎝×60㎝以上のほぼ正方形に近い平面プランを有する。この土壙もＳＫ０８同様、検出した当初は、方形掘方を持つ柱穴と考えたが、関連しそうな柱穴が周辺に見あたらず、また遺構内においても柱材等が遺存していなかったため、土壙としておく。



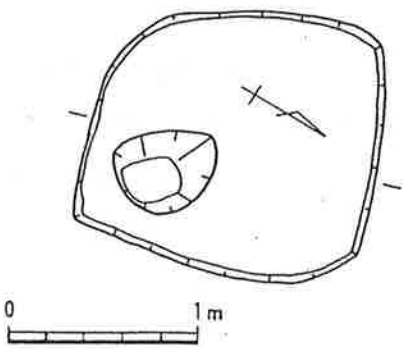

第18図　ＳＫ０９平・断面図

## ＳＫ１０

約１ｍ10㎝四方のほぼ正方形に近い平面プランを持つ。深さ４㎝程度の非常に浅いものであった。

この土壙とＳＫ０８・０９は、ほぼ並列している事から、相互関係があるように思われる。

出土遺物が乏しいことから、時間的差異の有無を確認することはできなかった。

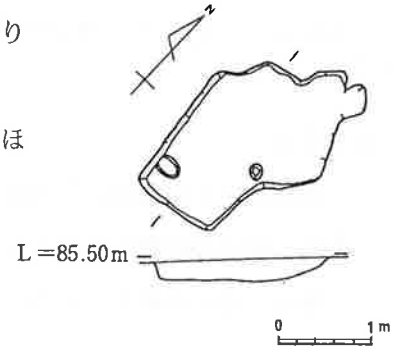



第19図　ＳＫ１０平・断面図

ＳＫ１１

平面プランから単一の遺構とは考えにくいが、切り合い関係からは追求できなかった。

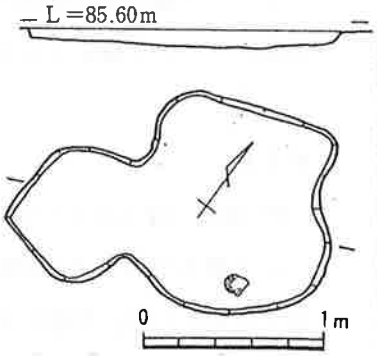
土壙内部は、フラットな状況をなす。出土遺物はほとんどない。




第20図　ＳＫ１１平・断面図

ＳＫ１２

非常に浅い土壙である。ＳＫ11と同様に遺物も微量で、性格については不明である。




第21図　ＳＫ１２平・断面図

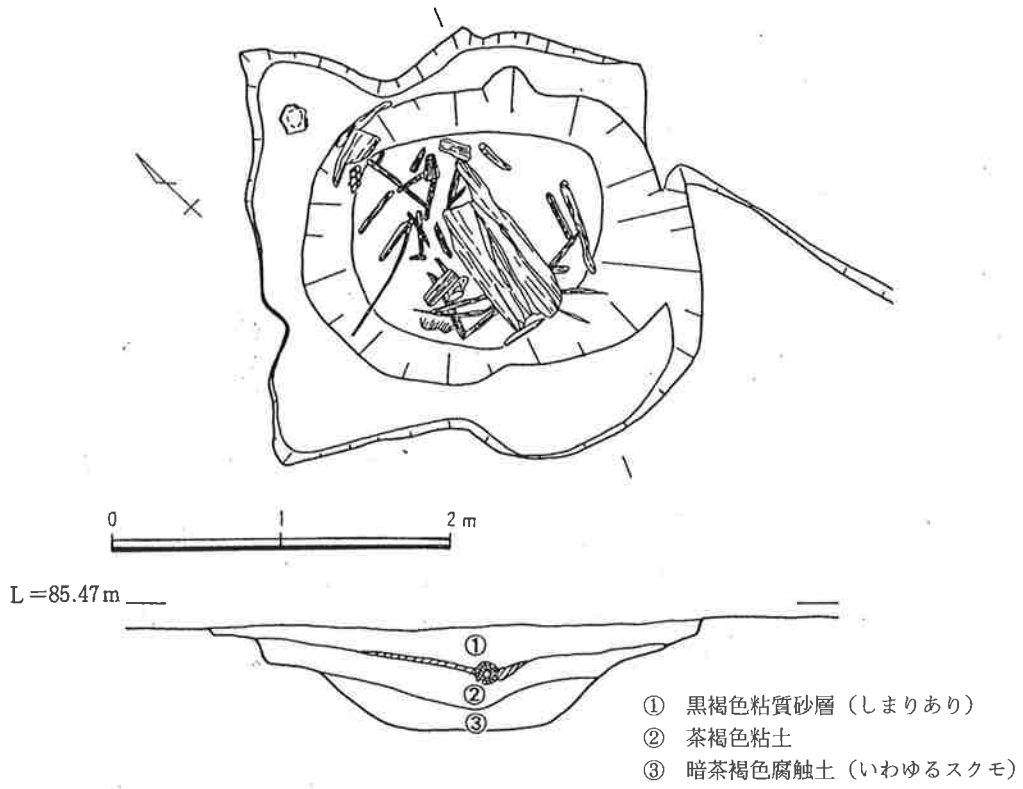
ＳＫ１３

二段掘りされた土壙である。一段目の平面プランは、いびつながら約２ｍ×２ｍの方形を意識しており、二段目は直径約１ｍ40㎝の円形を呈する。

この土壙からは多量の古式土師器が出土しているが、上層から検出されたものばかりである。したがってこれらの遺物は、直接的には遺構の掘削時期を示さない。

また土壙の中層位からは、自然木や半ば土壌化した木の樹皮などが多く見られたが、完・未完を問わず、木製品は１点も見あたらなかった。無雑作に放り込まれた状況であり、そこに何らかの特別な意図を読み取ることはできない。

この土壌の底からは涌水があり、素掘りの井戸の可能性も残されているが、ここでは一応土壙として報告しておく。

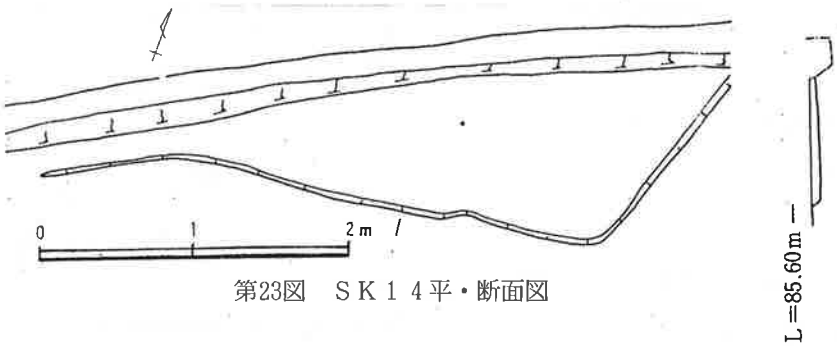



第22図　ＳＫ１３平・断面図

## ＳＫ１４

調査当初、平面プランより竪穴式住居の一画と思われたが、主柱穴・壁溝・炉・カマド等は一切検出されなかった。遺構が調査区外へ続くため、正確な規模や形態は不明である。

出土遺物から古墳時代初頭の遺構と思われる。

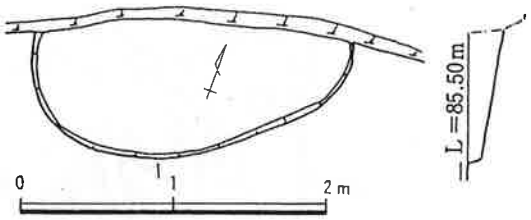



第23図　ＳＫ１４平・断面図

## ＳＫ１５

長径１m60cmを測る楕円形の土壙になると思われる。この土壙も非常に底が浅い

ため、一般的な廃棄土壙であるか否かは不明である。当遺跡が古い段階で、全面的な削平を受けていた可能性もある。



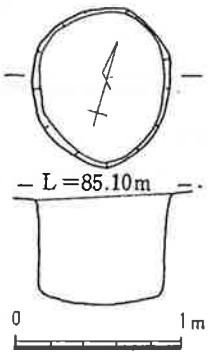

第24図　ＳＫ１５平・断面図

## ＳＫ１６

長径約80cm、短径約70cmの楕円形を呈する。深さは約50cmを測る。この土壙内からは、破片であるが接合可能な古式土師器が一括で出土している。

遺構の場所が汀線ライン（推定）よりも、やや内湖側に単独で位置している事から、陸地部分に存在する遺構群とは性格を異にしているように思われる。

出土遺物の中には他の遺構（ＳＤ１９）との接合資料がいくつか存在していることから、両遺構は同時期に併存していたと思われる。



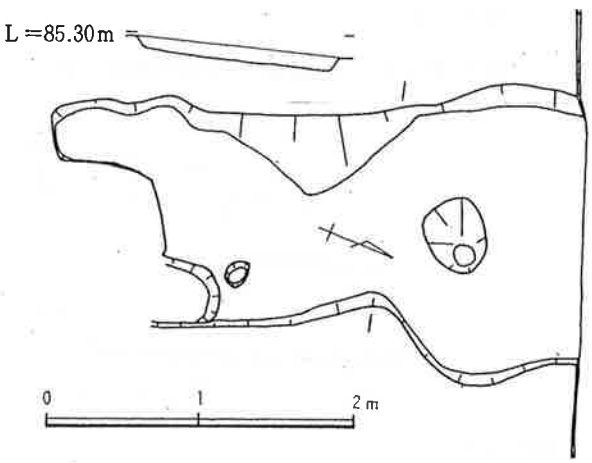

第25図　ＳＫ１６平・断面図

## ＳＫ１７

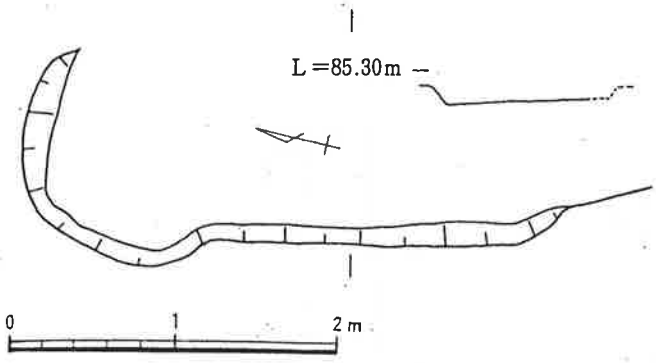
Ｖ区で検出された不整形土壙である。汀線ライン上に位置しており、この土壙を挟んで東側にはほとんど遺構・遺物ともに存在していない。

土壙内に柱穴を２ヶ所有していたが、機能については不明である。

出土遺物も皆無に近く、遺構の時期や性格を考える上での積極的材料に欠ける。




第26図　ＳＫ１７平・断面図




第27図　ＳＫ１８平・断面図

### ＳＫ１８

この土壙もＳＫ１７同様、旧内湖の汀線付近に位置している。旧内湖側の立ちあがりが無いため、本来の規模は不明である。

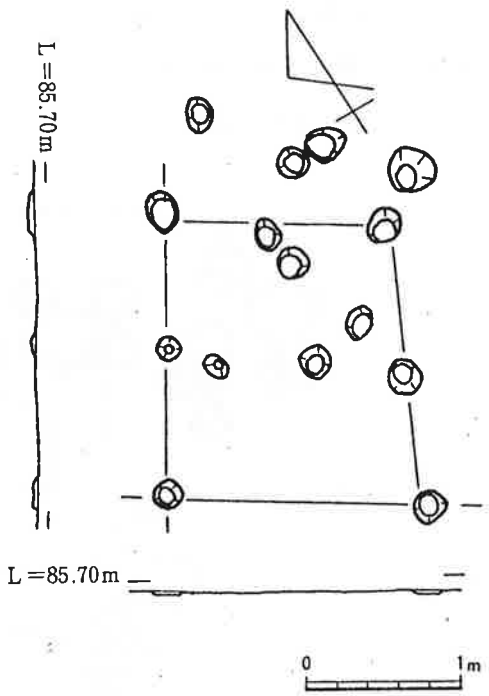
## 掘立柱建物

### ＳＢ０１

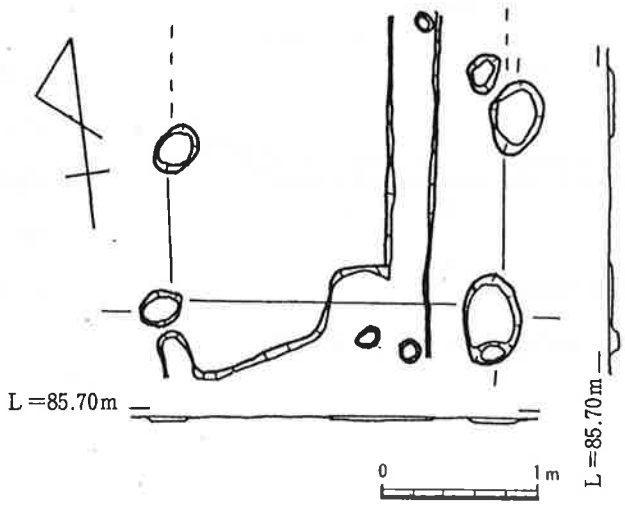
２間×１間の非常に小規模な建物である。柱間の距離は１ｍ～１ｍ60㎝である。恒常的な居住施設とは考えにくい。倉庫か作業小屋的なものと考えられる。

### ＳＢ０２

ほぼ磁北の方位を示す建物跡である。規模は１間×１間以上とされる。柱間の距離は南北約１ｍ、東西役２ｍを測る。ＳＢ０１同様、居住施設とは考えにくい。




第28図　ＳＢ０１平・断面図

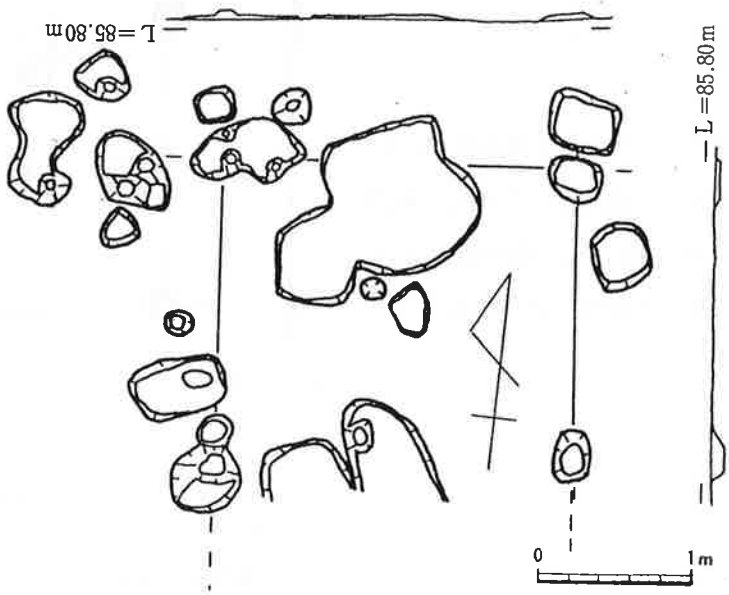



第29図　ＳＢ０２平・断面図

ＳＢ０３

建物の主軸方向は、ほぼ磁北を示している。規模は１間×１間以上と推定される。柱間の距離は東西２m50cm、東北２m40cmを測る。

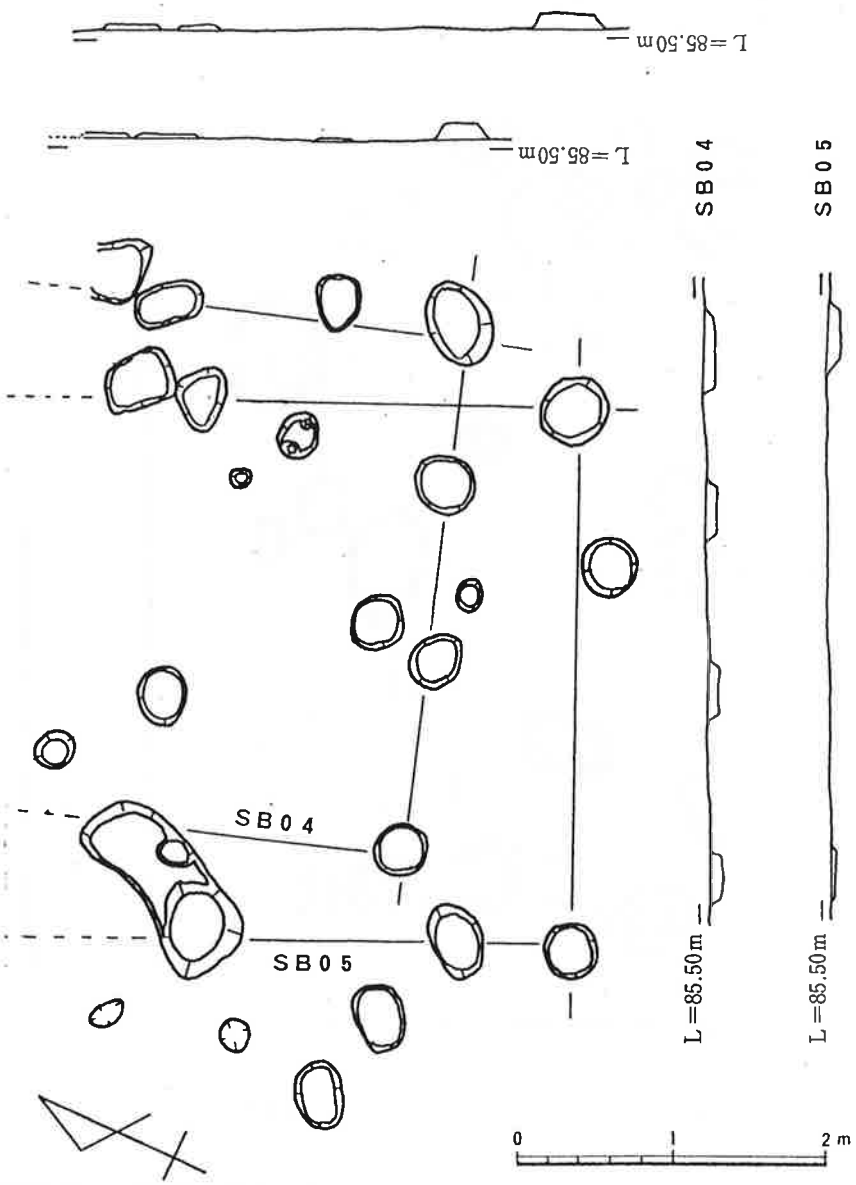
この建物も居住施設とは考えられない。




第30図　ＳＢ０３平・断面図

## ＳＢ０４

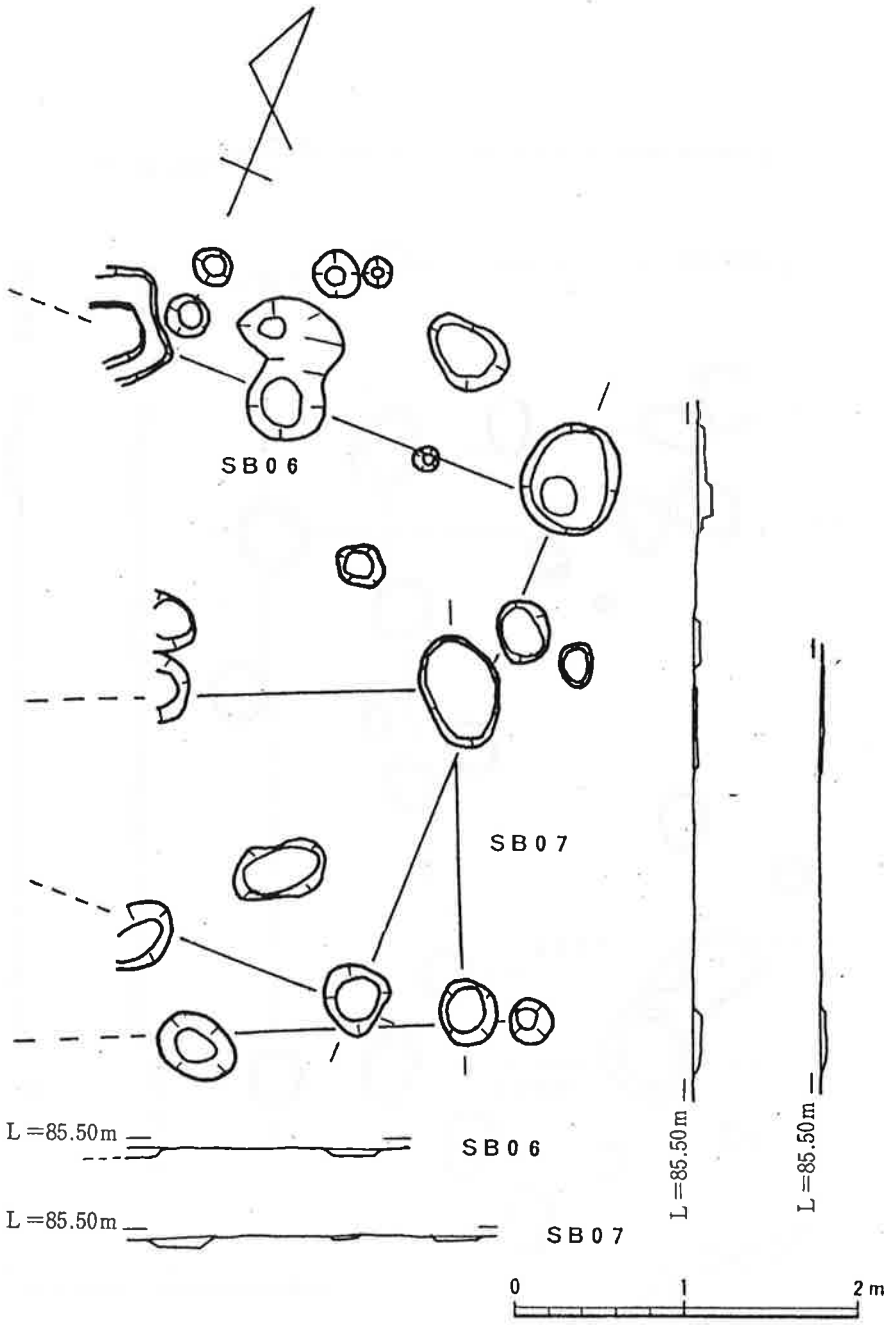
ＳＢ０１～０３に比べて柱穴も大きく、しっかりとしている。規模は３間×１間以上と推定される。柱間の距離は東西約１m20㎝、南北約２ｍである。




第31図　ＳＢ０４、０５平・断面図

ＳＢ０５

ＳＢ０４と同規模の建物になると思われる。１間×１間以上と推定され、柱間距離は東西約３ｍ50㎝、南北約２ｍ50㎝を測る。




第32図　ＳＢ０６、０７平・断面図

### ＳＢ０６

ほぼ東西方向の主軸を有する建物である。２間×１間以上と推定され、柱間距離は東西１m30cm～１m80cmで南北１m50cm～１m80cmである。

### ＳＢ０７

ＳＢ０６と切り合い、１間×１間以上と推定され、東西約１m50cm、南北約１m80cmの柱間距離を測る。

今回の調査で掘立柱建物跡と考えられるものは計７棟分であった。いずれの建物も柱穴深度が浅く、大型の建物にはならない様である。柱間距離も不ぞろいで、相互の建物どうしも規格性の有る配列を見せない。

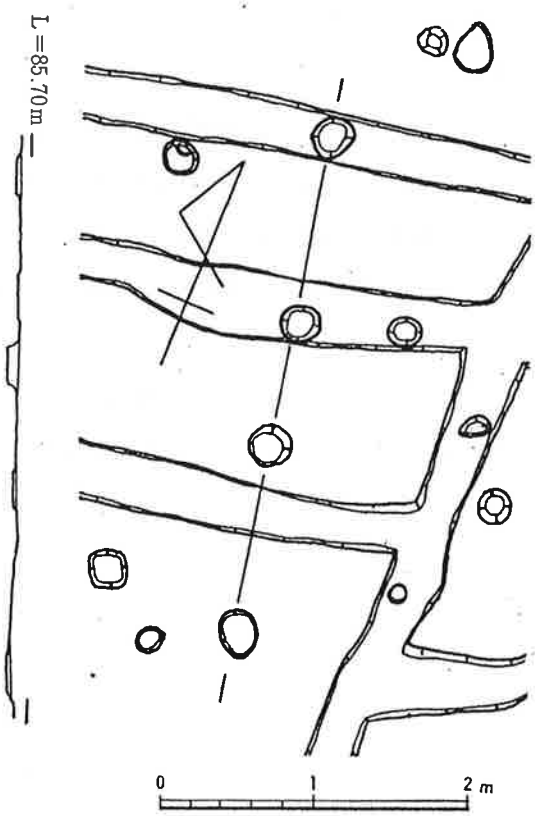
このような状況からみても、今回の調査地は、いわゆるムラの中心部から外れている場所と考えられる。

## 柵　　列

### ＳＡ０１

ほぼ磁北に近い向きを持つ柵列と考えられる。柱間距離は約80cm～１m40cmを測り、一定ではない。

出土遺物も皆無のため、時期・機能とも定かではないが、ＳＢ０６の主軸方向とほぼ同じ方位を示していることから、両遺構は同時期のものであると思われる。




第33図　ＳＡ０１平・断面図

## 2．出土遺物

今回の調査で出土した遺物には、土器・石器・木製品・自然遺物などがあった。

時代は縄文時代・弥生時代・古墳時代・古墳時代以降と多岐にわたっているが、大半は古墳時代前期に集中していた。

ただ遺物の多くが包含層から出土したもので、遺構に伴う一括遺物にはあまりめぐまれなかった。

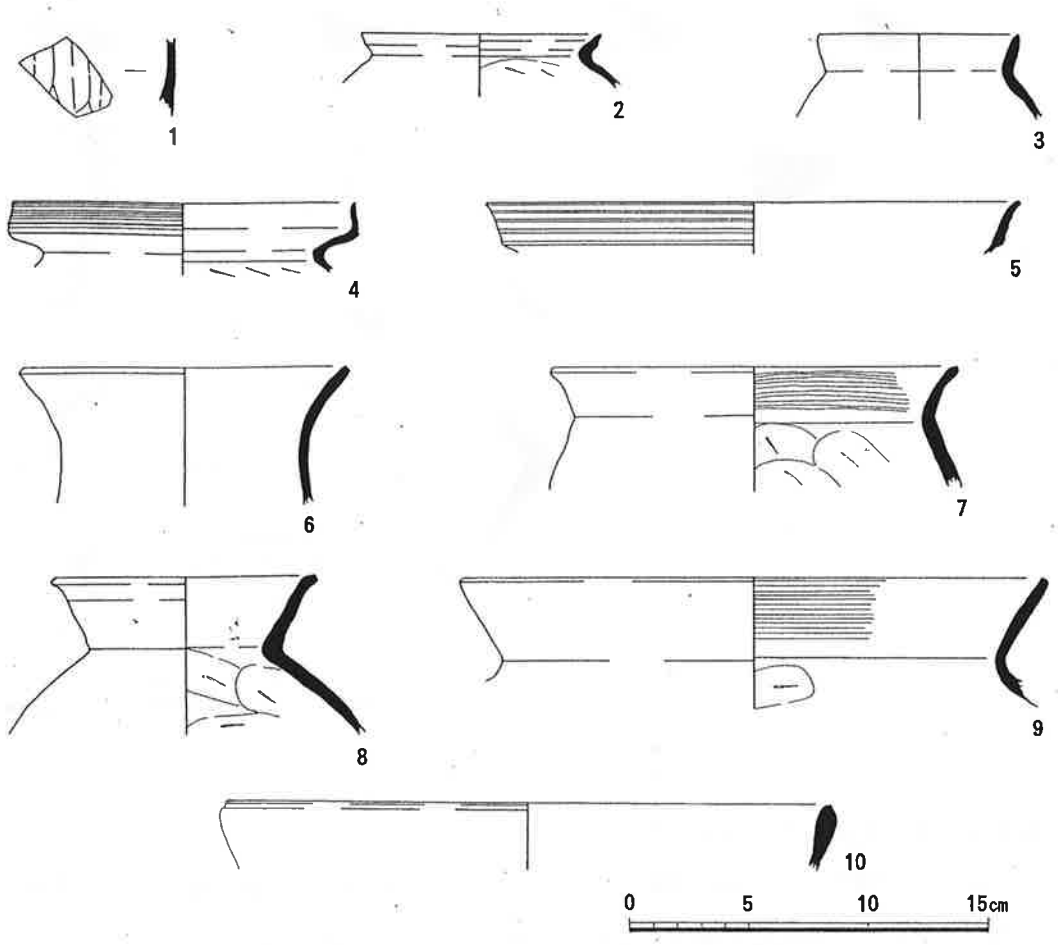
本書では、遺構から出土した遺物を中心に掲載している。

### 1）土　　器

**ＳＤ０１出土土器**（第34図・図版15）

図示した遺物は遺構掘削時に遺構内に露頭していたものを、精査時に取り上げたものが大半である。遺物包含層の遺物と考えてさしつかえないであろう。ただし、1点だけ青磁碗の破片が出土しており、おそらくこの溝の年代を示す唯一の資料と考えられる。

1がこれにあたる。外面に鎬蓮弁を配している。2は小型甕で受口状を呈する口縁部を持つ。3はなだらかな肩部とやや外反ぎみに立ち上がる口縁からなる。4は甕の口縁部で外側に櫛描沈線を施す。おそらく吉備地方にその出自が求められるものである。5も甕の口縁部で、外面に凝凹線を有する。これも4と同様外来系の土器で、北陸系のものと考えられる。6は長頸壷の口縁から頸部にかけてのものであろう。7と9は甕である。口縁内面にハケ調整、胴部内面にヘラケズリ調整を行っている。8は内面にヘラケズリ調整を施した壷である。10は口縁部に一条の沈線を持つ。

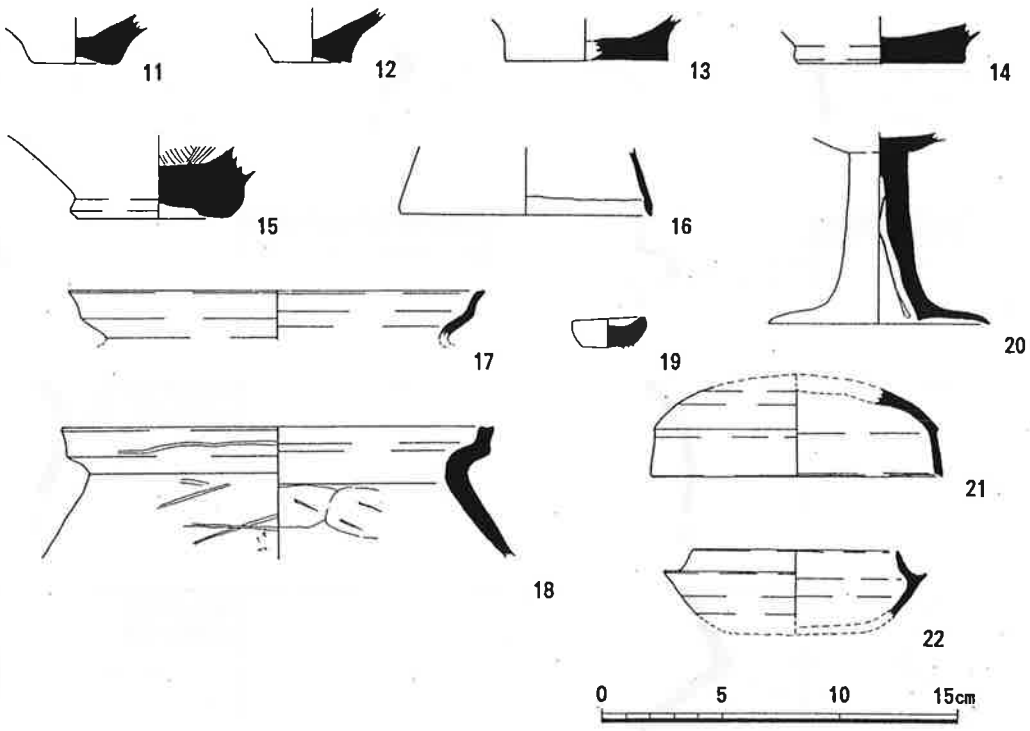



第34図　ＳＤ０１出土土器

**ＳＤ０２出土土器**（第35図・図版15. 16. 21）

11・12は甕の底部である。13～15は壷の底部であろう。16は台付甕の脚部で内面にハケ調整を施す。17・18はオーソドックスな受口状口縁を持つ、在地系の甕である。19は焼成の甘い軟質の須恵器である。蓋のつまみであろう。20は高坏の脚部で内面に、成形時のしぼり痕がみられる。21は須恵器の坏蓋で、22が坏身である。おおよそ６世紀初頭のものであろう。

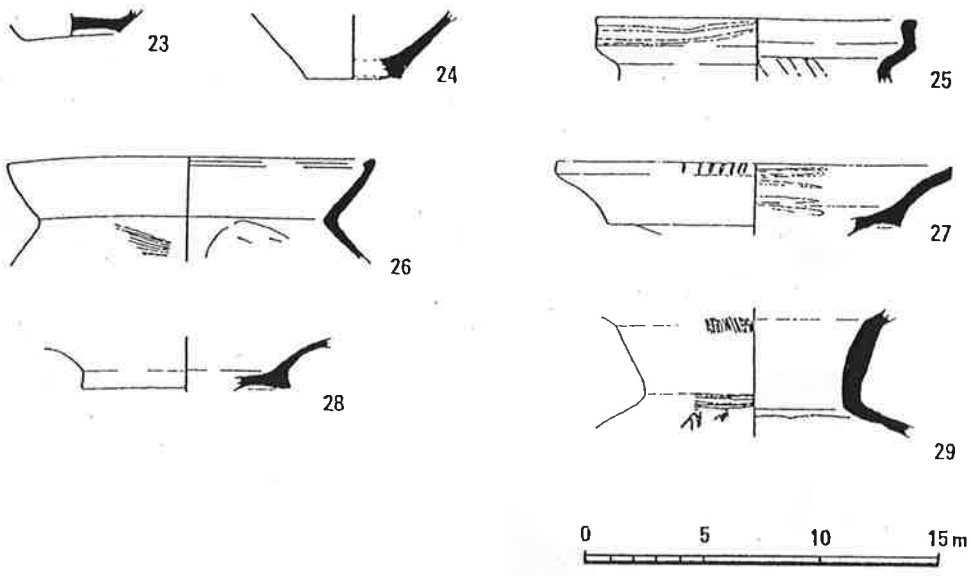
これらの遺物はＳＤ０１同様、遺構内に露頭していたものばかりである。したがってこれらは遺物包含層の遺物と考えてさしつかえないであろう。




第35図　ＳＤ０２出土土器

**ＳＤ０５出土土器**（第36図・図版16.19）

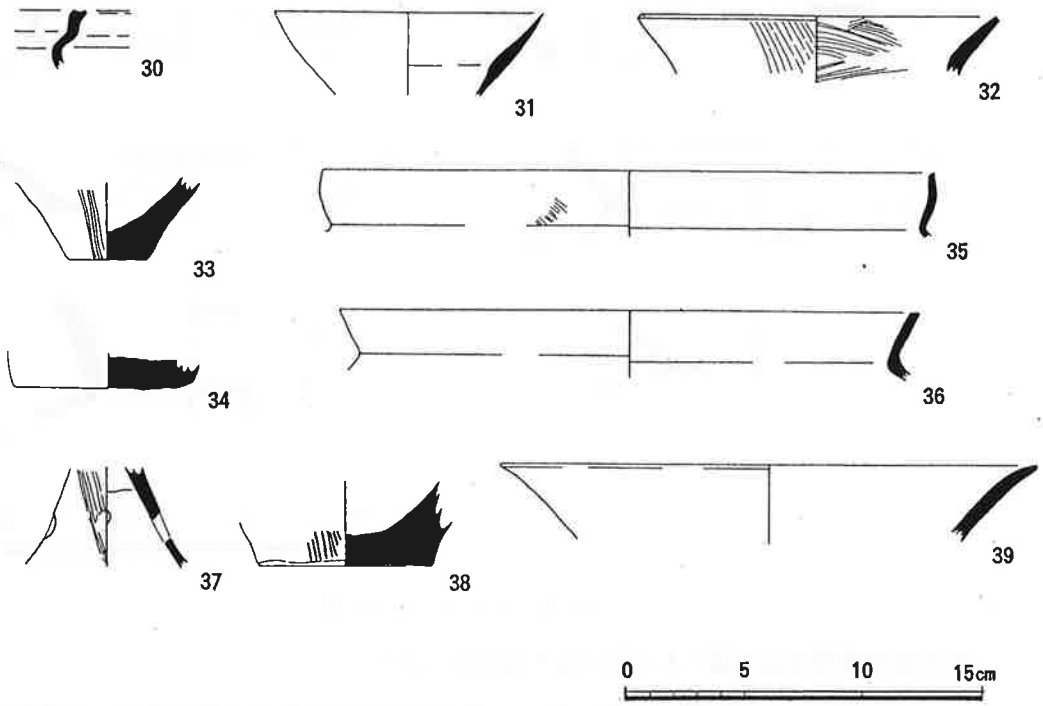
23・24は甕もしくは壷の底部である。24は非常に精製された胎土を持つ。25は外面に二条のヘラ描沈線を施す、受口状口縁の甕である。26は布留式の甕である。27は二重口縁の壷である。内面にはヘラミガキを施し、端部外面に列点文を有する。28は凝口縁を持つ高坏の受部であろう。29は壷の頸部～肩部にあたる部分と思われる。外面に櫛描直線文と波状文が施されているが、加飾性には乏しく、遺物の所属時期は庄内式期まではさかのぼらないと思われる。




第36図　ＳＤ０５出土土器

**その他の遺構出土土器－1**（第37図・図版26. 27）

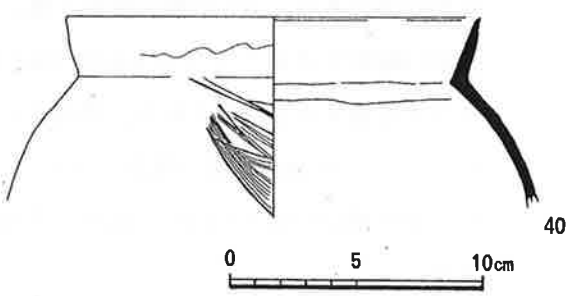
30は受口状口縁の甕である。31は小型丸底壷と思われる土器である。器表面の荒れが著しく、内外面の調整は不明である。32は内外面にハケ調整を施した壷である。33は甕もしくは壷の底部と思われる。2㎜大の砂粒を多く含み、焼成も甘い。34は壷の底部である。32と同様に磨耗が激しく、内外面の調整は不明である。35と36は甕の口縁部である。どちらも口径20㎝を越える大型製品である。37は外面にヘラミガキを施す小型器台である。精選された胎土を使用しており、非常に丁寧に作られている。38は甕か壷の底部であろう。胎土のきめは粗く、大粒の砂粒を多く含む。39は精良な胎土を持つ、高坏の受部と考えられるもので、色調は明燈褐色を呈する。




第37図　その他の遺構出土土器－1

**ＳＤ19 出土土器**（第38図・図版16）

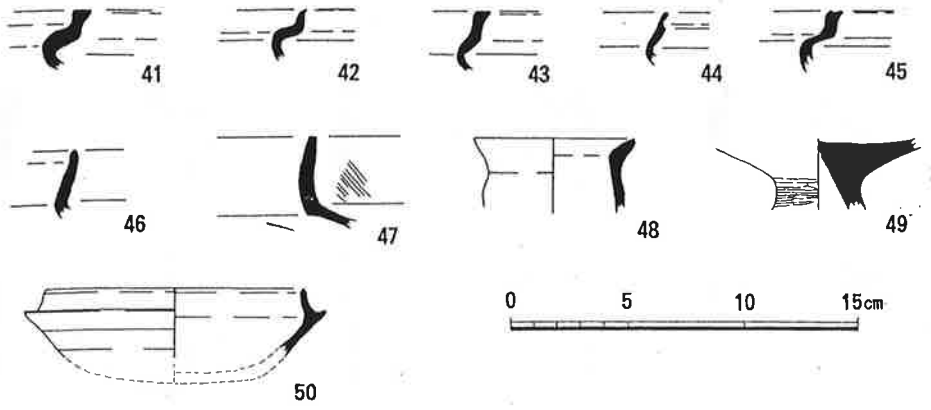
40は口径約15㎝の小型甕である。外面にはハケ調整を施す。肩部はあまり張らず、垂れぎみである。体部の一部に、成形時の粘土紐の巻き上げ痕が認められる。




第38図　ＳＤ１９出土土器

**その他の遺構出土土器－2**（第39図・図版 21. 26. 27）

41～43、45は受口状口縁を持つ在地系の甕である。44は東海地方からの搬入品と思われる。47は直口壷の口縁部であろう。48はミニチュアの壷である。49は外面にヘラミガキを蜜に施した高坏の脚部片である。50は須恵器の坏身で、５世紀末葉～６世紀初頭に位置付けられるものである。

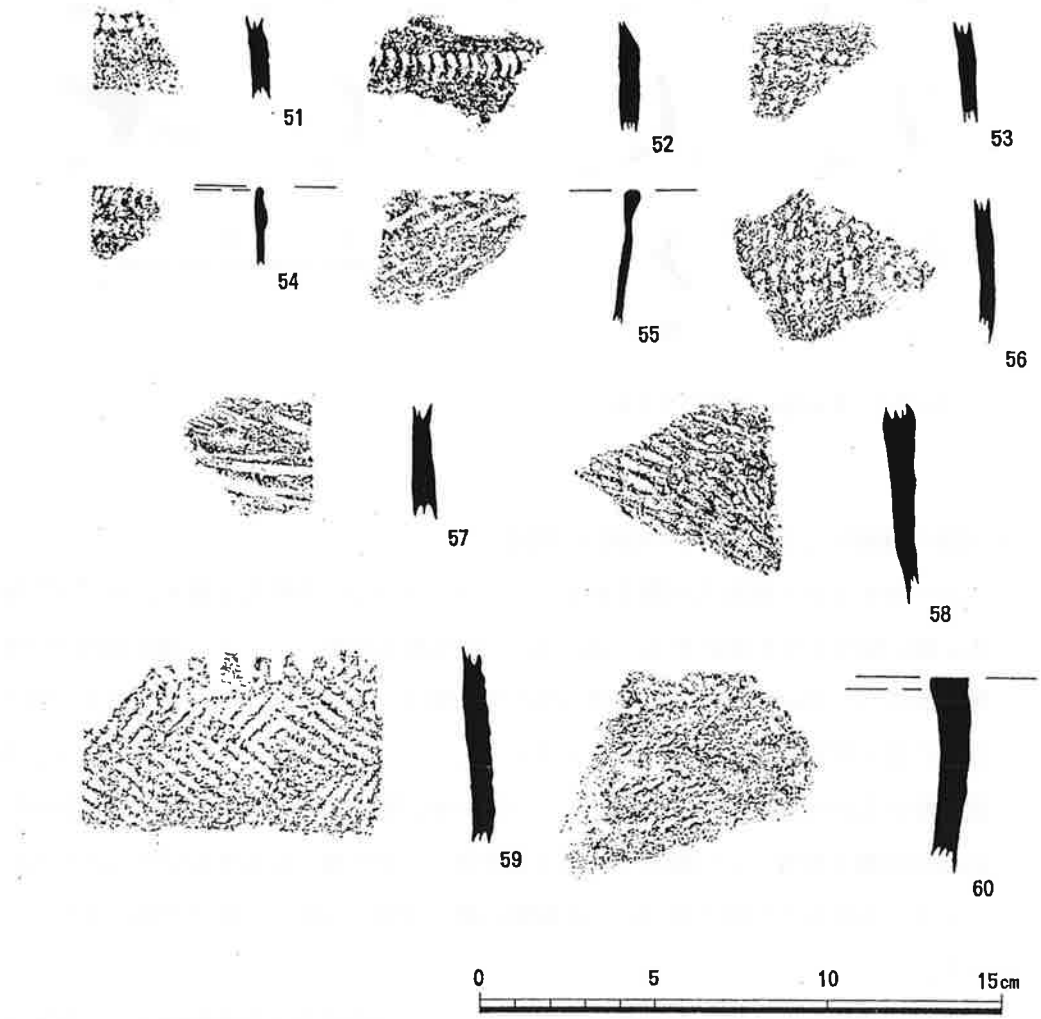



第39図　その他の遺構出土土器－2

その他の遺構出土土器－3（第40図・図版28）

51～60まで全て縄文式土器である。51、53、56はD字爪形文を施す。北白川下層Ⅰa式に相当すると思われる。52、54はC字爪形文を施している。54は深鉢の口縁部であろう。55は口縁直下に2列の爪形文を施す、非常に薄手の深鉢である。56はD字に近い爪形文を不規則に施したもので、「3」字状になっていることから、羽島下層Ⅱ式並行期に位置付けられよう。57、58は条痕文を施す深鉢の胴部片である。59は羽状縄文を有し、口縁直下に粘土帯を張りつけた後に長方形の切りこみを入れている。60は右あがりの方向に一定間隔の縄文を施した後、一部ナデ消しを行っている。

これら遺構内から出土した縄文式土器は全て、早期末葉～前期初頭という限定された時期のものである。

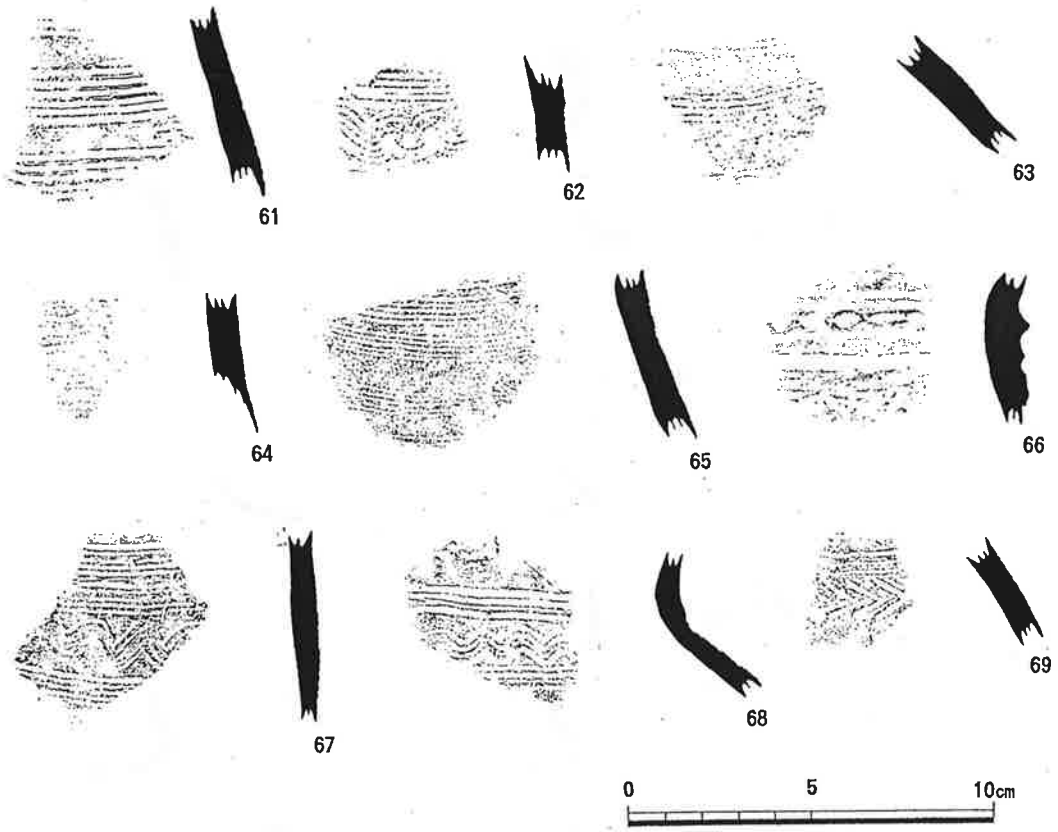



第40図　その他の遺構出土土器－3

**その他の遺構出土土器－4**（第41図・図版 19. 20. 27）

61、63、65は胴部に櫛描沈線を持つ壷である。62、64、67、68は櫛描直線文と波状文を交互に配する壷の胴部である。66は長頸壷の頸部である。二条の削り出し凸帯を配し、一方には刻み目を入れている。69は櫛描直線文と矢羽根状のヘラ描沈線を肩部に施す壷である。

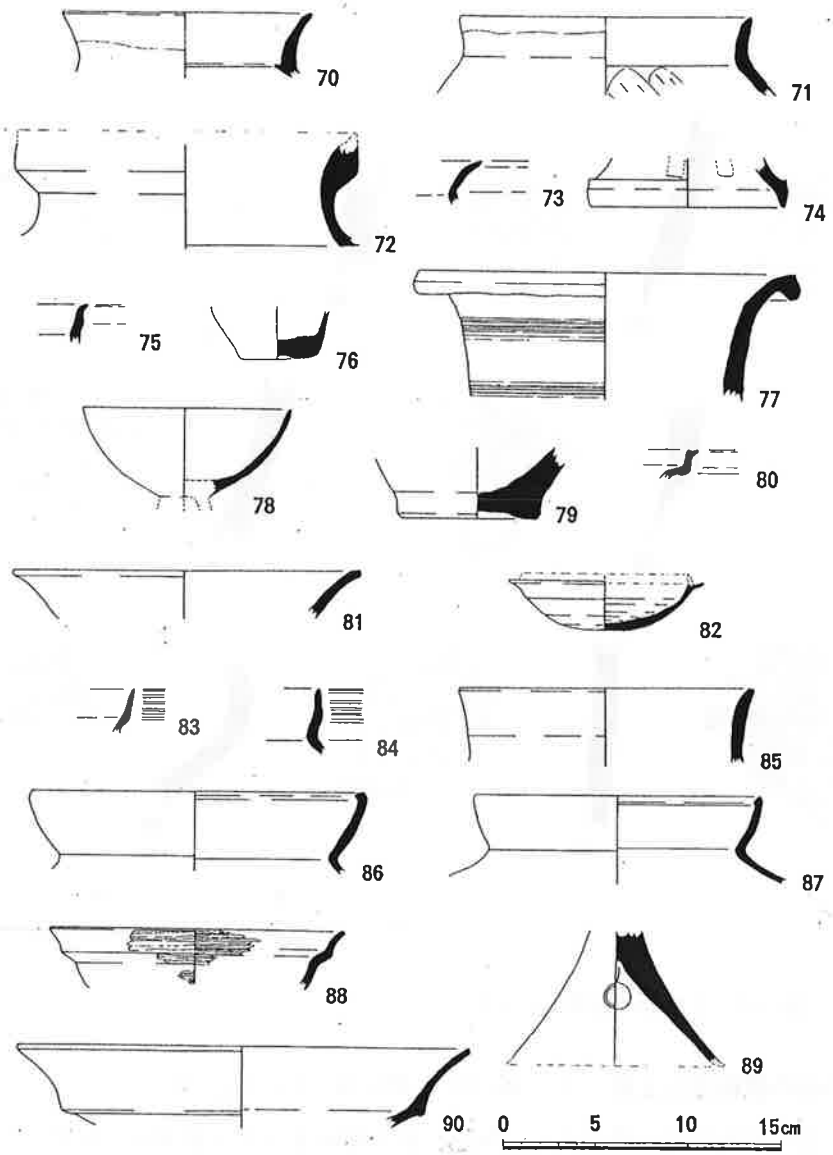
これらの施文を有する土器は、弥生時代中期の範疇におさまるものと考えられる。




第41図　その他の遺構出土土器－4

**その他の遺構出土土器－5**（第42図・図版19．20．26．27）

70は単純口縁の甕である。外面に粘土紐の巻き上げ痕がみられる。71も70と同様の甕である。内面にヘラケズリ痕が見受けられる。肩部のあまり張らない卵形の形態になると思われる。72は口径18.6cmの壷である。胎土は暗茶褐色の色調を呈す。他の土器の大半が明黄茶褐色の系統であるにも関わらず、この土器は全く異った色調である事から、在地系の土器とは考えにくい。73は小型壷の口縁部であろう。小片である為、口径は不明である。74は須恵器の高坏脚部片である。透し孔を有しているが、方形か三角形かは定かではない。75は受口上口縁の甕である。あまり強い屈曲部を持たない口縁を呈している。76は甕の底部と思われる。接地面はフラットではなく、中心部分に正方形の窪みを有する。弥生時代後期のものであろう。77は




70～72：ＳＫ０１、73：ＳＫ０５、74：ＳＫ０７、75：ＳＫ０８
76・77：ＳＫ１０、78：ＳＫ１１、79：ＳＫ１２、80～82：ＳＫ１６
83～85：ＳＫ１７、86～88：ＳＫ１８、89・90：ＳＫ１７

第42図　その他の遺構出土土器－5

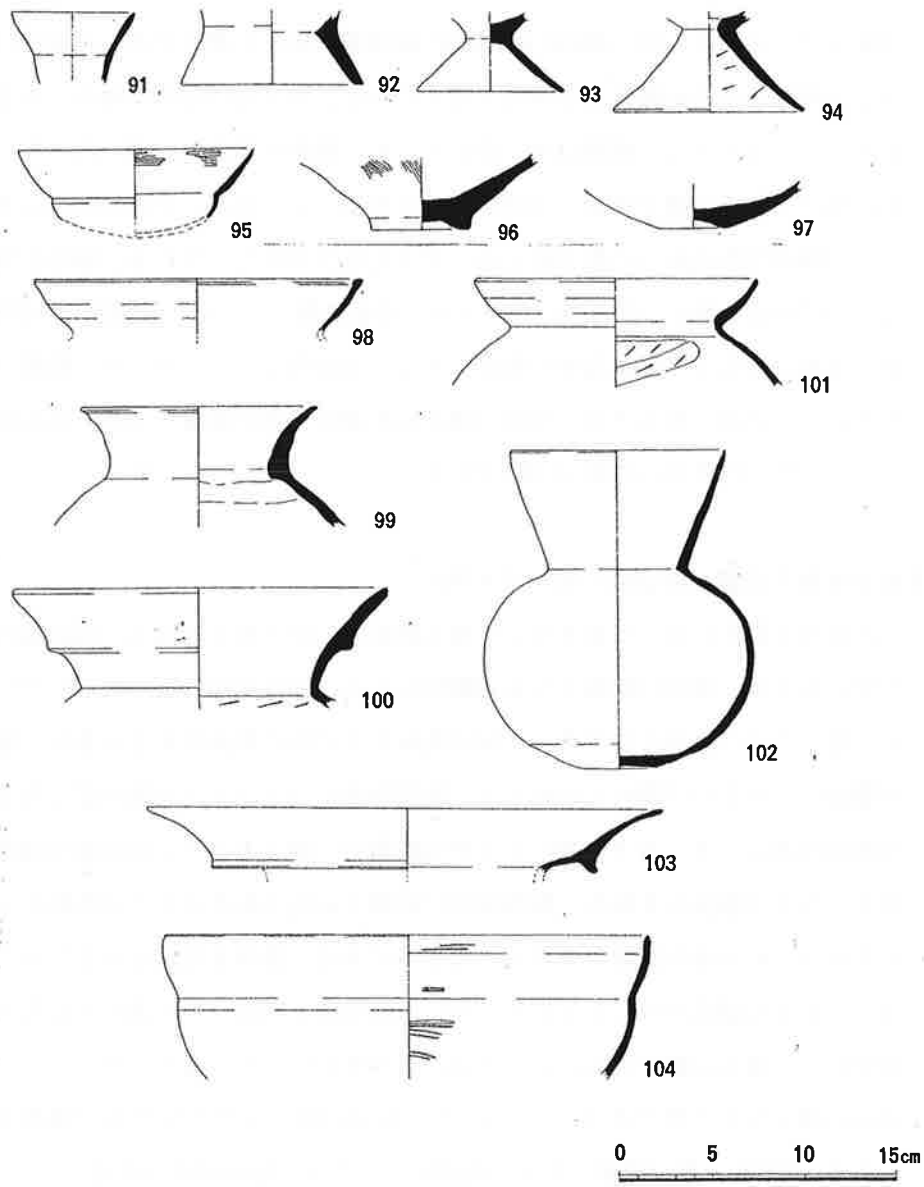
八条の櫛描沈線を施す長頸壷である。口縁部はＬ字状に屈曲させ、下方に垂下させている。かなりの大型製品になるものと見られる。弥生時代中期に所属すると思われる。78は高坏の受部である。全体的に内湾ぎみのプロポーションを有する。79は、肉厚の壷の底部である。側面に一条の強いナデを施している。80は受口状口縁を有する甕である。81は高坏の受部であろう。82は須恵器の坏身である。受部の立ちあがりは欠損している。口径は10cm未満で、やや小ぶりの形態である。時期は６

世紀後半であろう。83、84は口縁外面に凝凹線を施した甕である。口縁部の特徴から、北陸地方からの搬入品であると考えられる。85は直口壷の口縁部である。内外面ナデ仕上げである。端部は丸く収めている。時期は須恵器出現以降と思われる。86、87は布留式の甕である。頸部から下が欠損している為、全体の形状は不明である。口縁端部の内面への折り返しは、やや尖りぎみになっている。88は小型鉢である。口径16cmを測る。内外面にヘラミガキを密に施している。茶褐色の色調を示し、胎土も精良である。89は高坏の脚部である。直線的な広がりを示す。脚部の上部蓋付近に円形の透しを有する。90は口径25cmを測る二重口縁壷である。器表面が荒れているため、内外面の調整は不明である。

**ＳＫ０６出土土器**（第43図・図版17・18）

91は多少形がいびつであるが、小型丸底壷の一種と考えられる。92は器台の脚部と思われるが、壷の口縁部となる可能性もある。93は受部の底が貫通していないので一応ここでは高坏としておく。94は高坏とよく似た形状をしているが、受部底部が貫通しているので器台とみなした。脚部内面にはヘラケズリ痕が認られる。95は口縁部内面にヘラミガキを施した小型丸底壷の一種であろう。96は壷の底部と思われる。かなり胴張りを持ち、胴部最大径が器高の約⅓あたりにくる形態を示すものであろう。97は壷の底部と考えられるものである。器体を安定させるため、底部を浅く窪ませて凝高台状にしている。98は口縁端部を内面に折り返して肥大させた、典型的な布留式の甕である。99は外面にやや稜を持っているが、オーソドックスな単純口縁を呈する甕である。100はなだらかな肩部とやや外反する口縁部を持つ壷である。101は二重口縁壷である。内面にヘラケズリ痕が認められる。

102はほぼ完形に近い形で出土した長頸壷である。この土壙の年代を決定する上で良好な資料となり得よう。103はかなり大型の口径を呈する二重口縁壷である。102と違い、かなり垂下する凝口縁を持つ。104は内面にハケ調整を施した大型鉢である。

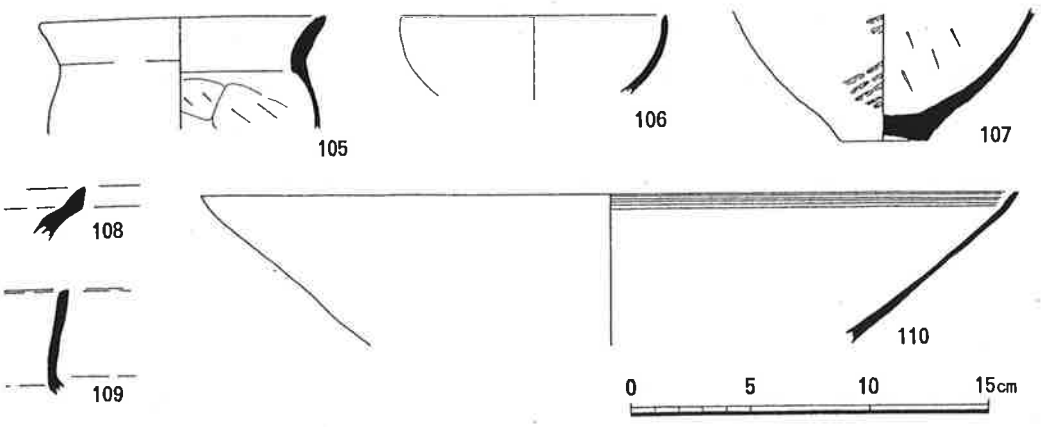



第43図　ＳＫ０６出土土器

**ＳＫ０７出土土器**（第44図・図版19．26）

105は小型の甕で短く外反する口縁部を持つ。106は高坏の受部であろう。107は内面ヘラケズリ、外面平行タタキの甕の底部である。焼成は堅緻で、明燈褐色の色調を呈している。搬入品の可能性が高い。108は緩やかに外反し端部を上方につまみあげた口縁を持つ壷である。109は肩部からほぼ直立した口縁を有する壷である。110は高坏の受部と思われる。直線的に開く受部内面には凝凹線を施している。

これらの土器は、おおよそ弥生時代後期後半の範疇のものと考えられる。




第44図　ＳＫ０７出土土器

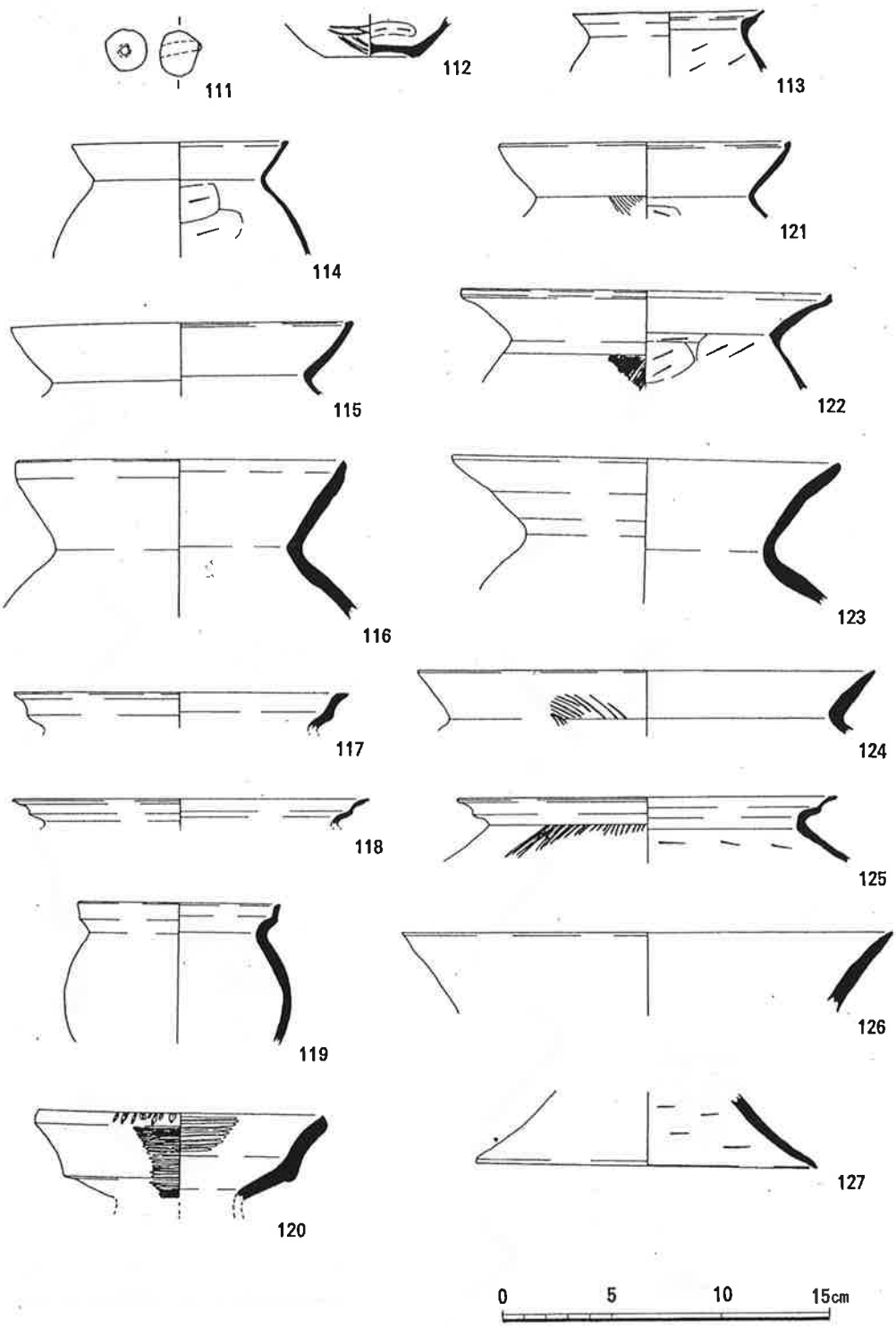
**ＳＫ１３出土土器**（第45～48図・図版22～25）

111は球状土錘である。淡黄灰白色の色調を呈し、胎土は大変精良である。112は小型甕の底部で、内面にヘラケズリ、外面にハケ調整を施す。113はミニチュアの甕である。口縁部は受口状を呈し、肩部は直線的に垂下する形状を成す。外面の調整は不明であるが、内面はヘラケズリ調整である。114は口径10cm程の小型の布留式の甕である。器壁の厚みが2～3mmと非常に薄い。胎土には細かく精選したものを使用している。115は布留式の甕の口縁部と思われるが、内面への折り返しは明瞭ではない。116は壷と思われる。幅広い口縁帯を有しており、頸部から直線的な立ちあがりを見せる。口縁端部は上方につまみ上げている。内外面はナデ仕上げである。117は在地系の受口状口縁の甕である。118は東海地方からの搬入品と思われる甕の口縁部である。119は口径9.6cmのミニチュアの甕である。淡黄灰白色の色調を成す。口縁部は、ほぼ垂直の立ちあがりを示す受口状口縁である。胴部はほぼ球形になると思われる。120は二重口縁の壷である。内外面にヘラミガキを密に施し、口縁端部に刻み目を持つ。121は器壁の非常に薄い布留式の甕である。外面に若干のハケ目が見受けられる。122は庄内系の甕であろう。口縁端部を上方につまみあげている。頸部には一条の強いナデを施す。内面にはヘラケズリ調整、外面には細かいタタキ目を有する。123は口径約18cmの広口壷である。肩部は余り張らずに垂れぎみである。口縁端部を丸く収めている。124は尖りぎみの口縁端部を有する甕である。外面に荒いハケ目を持つ。125は東海系の甕と考えられる。外面にハケ調

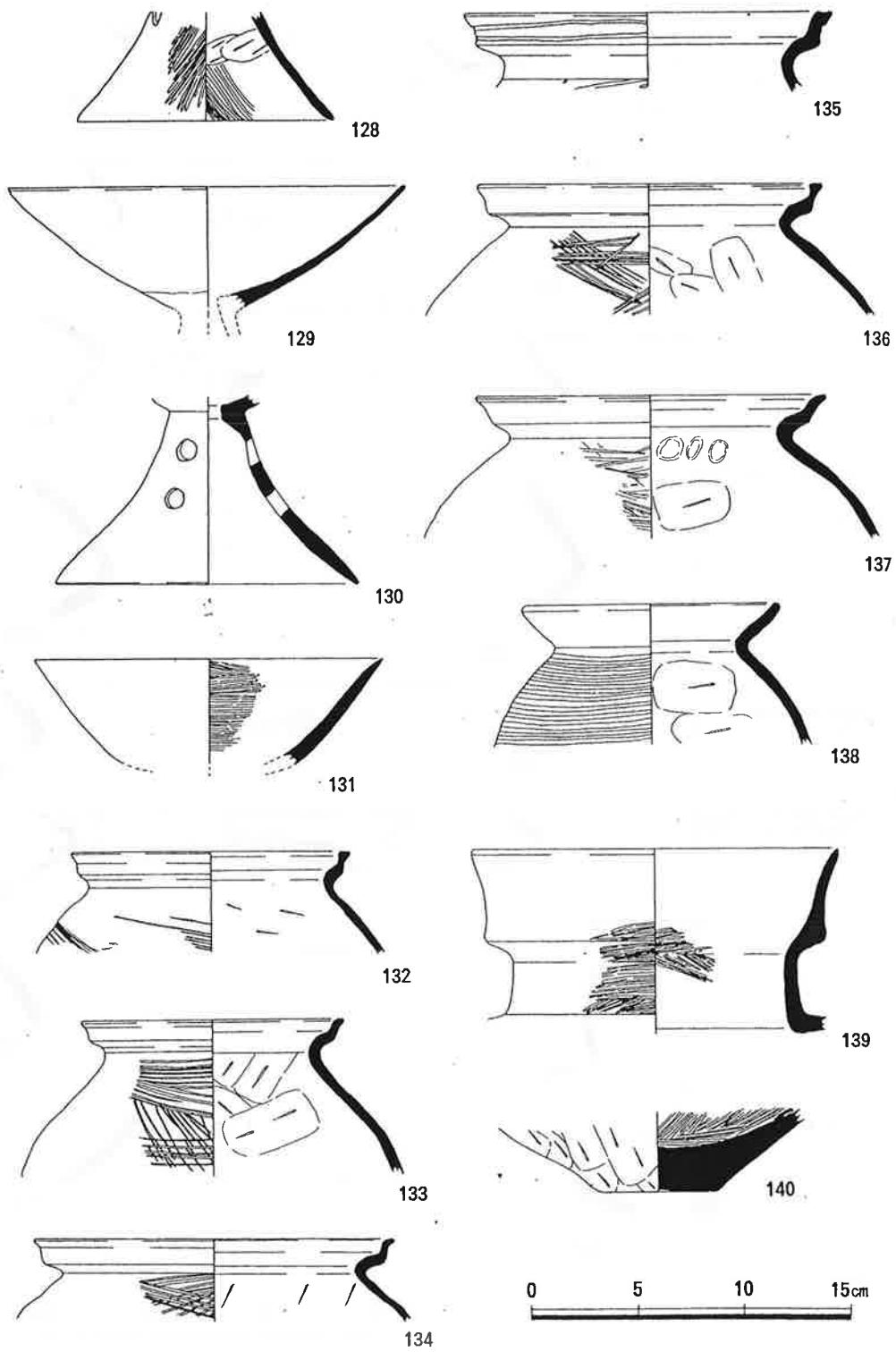
整、内面にヘラケズリ調整を施す。126は高坏の受部と思われる。127は高坏の脚部片である。端部にわずかな稜を持つ。内面にはヘラケズリ痕が認められる。128は高坏の脚部片で、円形透かしを有する。外面はヘラミガキ調整で、内面はヘラケズリの後ハケ目を施す。129・130は同一個体になると思われる高坏である。受部は直線的に開く。脚部には上下二段の透し孔を有する。色調は明燈褐色である。131は高坏の受部で、内面にはヘラミガキを密に施している。端部は尖りぎみに仕上げている。132～137は在地系の受口状口縁の甕である。いずれも外面は粗いハケ目、内面はヘラケズリ調整で仕上げている。135だけは口縁外面に二条のハケ目を有する。139は二重口縁の壷である。内外面にヘラミガキ調整を施す。色調は暗黄茶色を呈する。140は壷の底部であろう。外面にヘラケズリ、内面にはハケ目調整を有する。141は布留傾向の甕である。体部は球形化を指向しているようであるが、丸底にはならないと思われる。胴部外面には煮沸時における煤が顕著に認められる。肩部外面に集中的にハケ目調整を施している。142は受口状口縁の甕である。ＳＫ１３の出土遺物の中で、唯一全体の形状がわかるものである。内面はヘラケズリ調整で、外面には不整方向の粗いハケ目調整を施す。器体を安定させるため、底部を浅く窪ませている。器表面は平滑ではなく、凹凸が激しい。143は壷の胴部下半部から底部にかけてのものであろう。外面と底部内面にハケ目調整を施す。また底部側面に指頭圧痕が見られる。

ＳＫ13より出土したこれらの土器は、出土状況から一括性を有していると考えられ、個々の土器の諸特徴から、庄内併行期のものと、それよりやや後出の感がある布留式傾向のものとが混在している状況である。

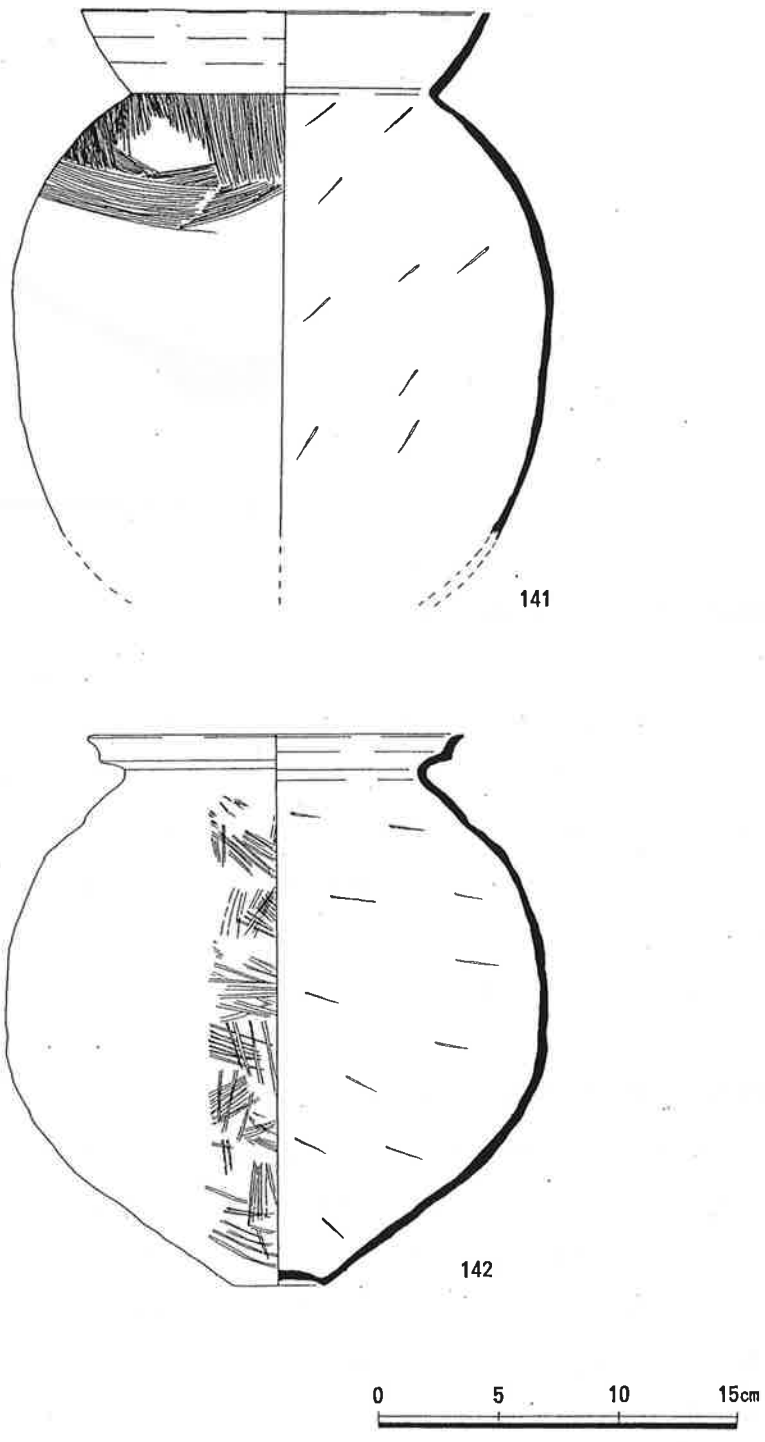
以上の点からこれらの土器の所属時期は、庄内式期～布留式期への過渡期に該当するものと考えたい。



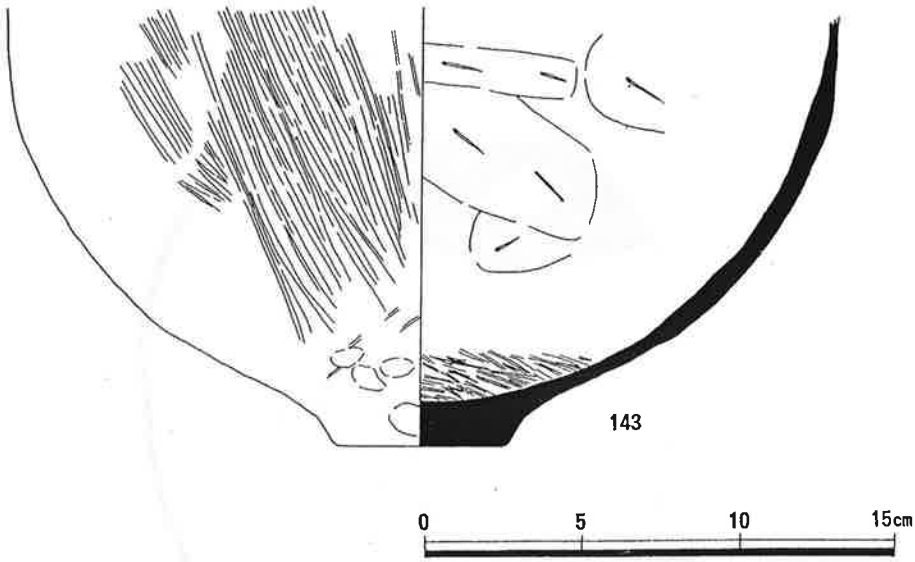

第45図　ＳＫ１３出土土器－1




第46図　ＳＫ１３出土土器－2




第47図　ＳＫ１３出土土器－3



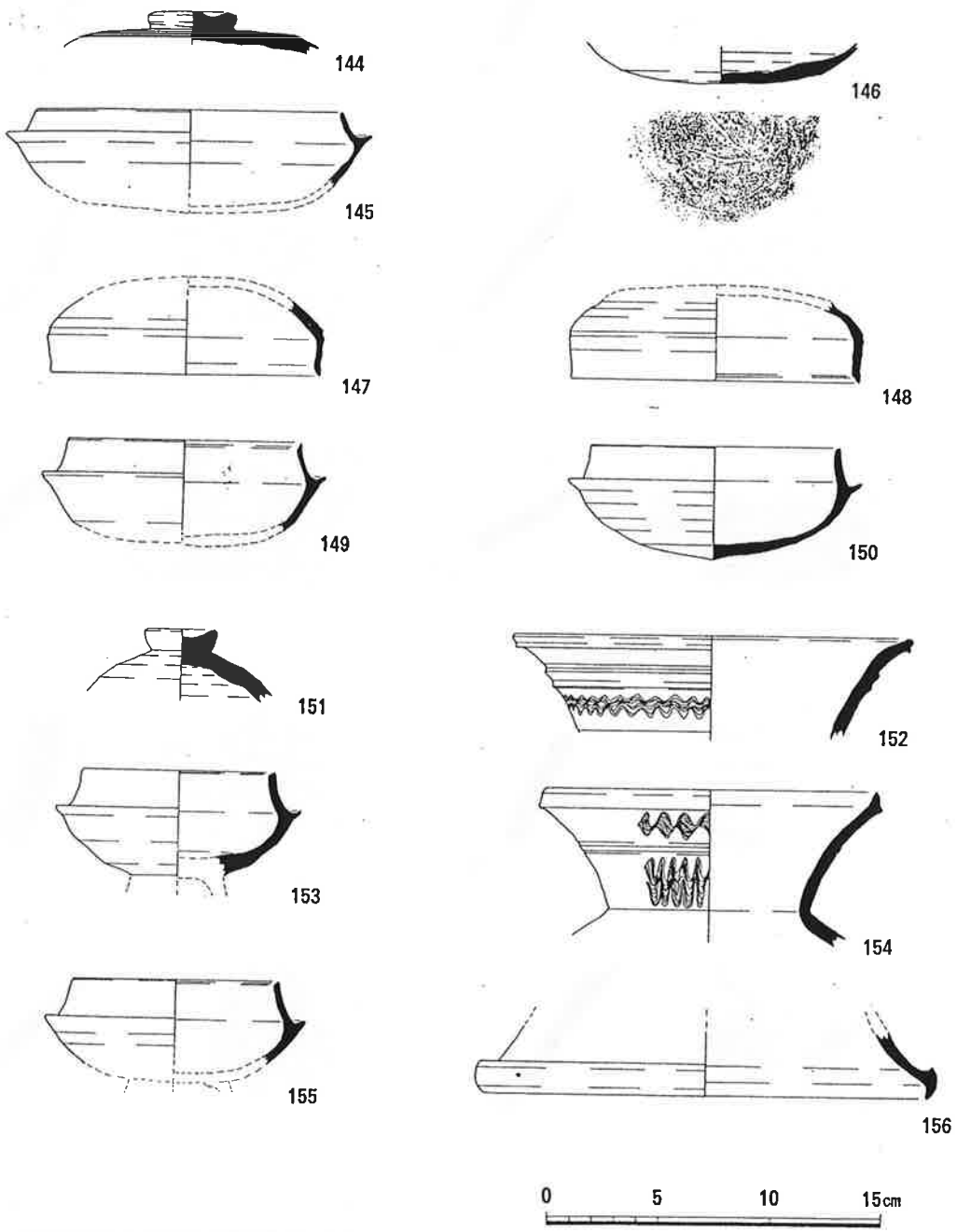

第48図　ＳＫ１３出土土器－4

**包含層出土土器－1**（第49図・図版21．30）

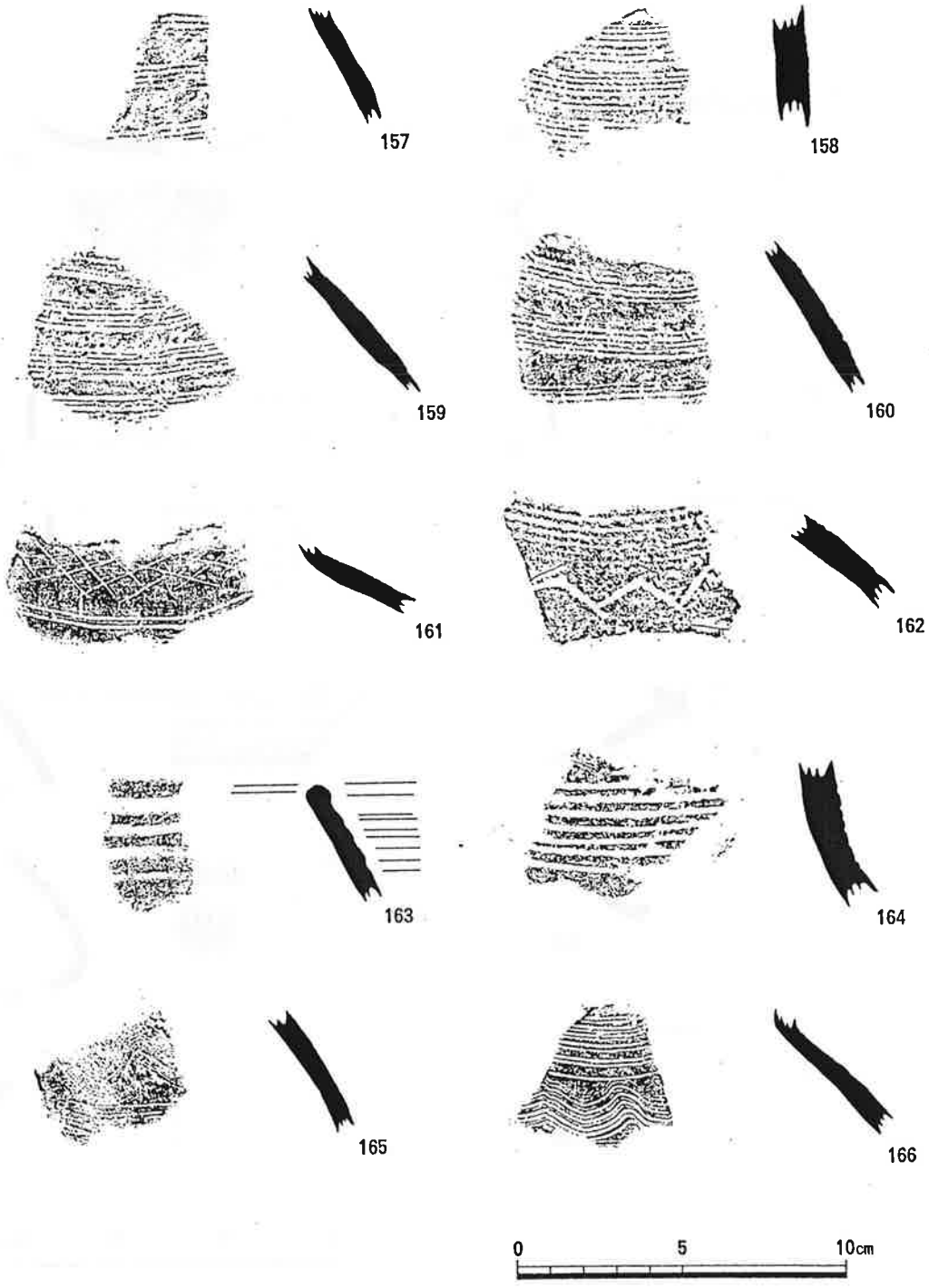
ここに図示したものは全て須恵器である。144・151は有蓋高坏の蓋と思われる。144の天井部にはカキ目が見られる。145・146・149・150は坏身であろう。受口の立ち上がりは、垂直に近いものや、内傾しているものと様々である。また146の底部外面には、松葉状のヘラ記号が認められる。147・148は坏身である。口径の大きさから、149・150とセットになる可能性もある。152・154は、外面に櫛描波状文を施した壷と考えられる。153・155は高坏になると思われ、151との組み合わせも考えられる。156は器台の裾部に該当するものであろう。

**包含層出土土器－2**（第50～52図・図版27．29）

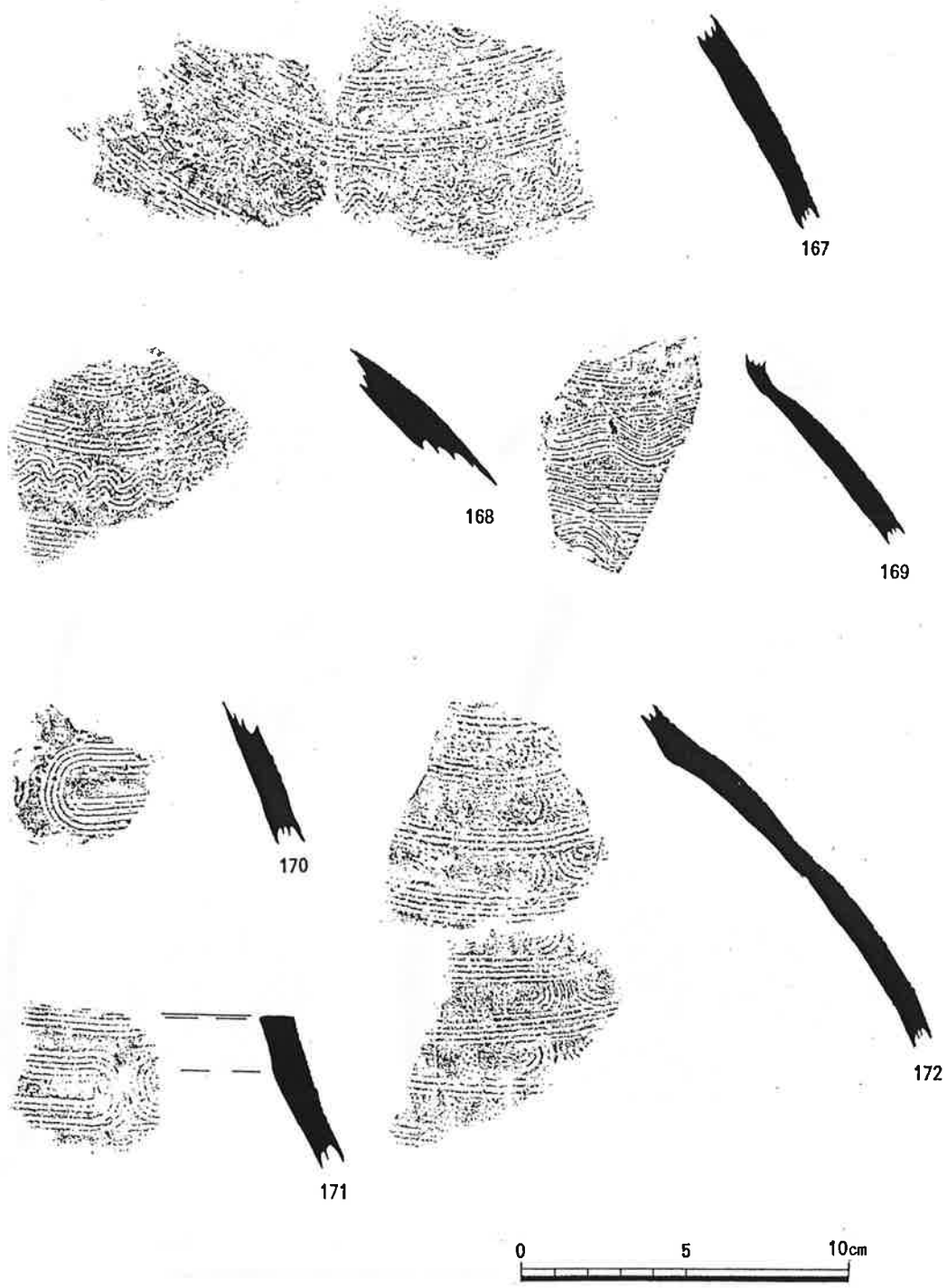
157～160は外面に櫛描直線文を施した壷と思われるものである。おそらく弥生時代中期のものであろう。161は壷の肩部と思われる破片である。外面に斜格子状の細い沈線文と、半載竹管状工具の押し引きによる二筋の平行沈線文が見られる。162は櫛描直線文と、ヘラ状工具による連続山形文を配した、壷の肩部である。163は無頸壷の一種であろう。口縁部外面に凹線文をめぐらせる。164は長頸壷の肩部から頸部への変換点付近のものと思われる。163と同様に外面に凹線文をめぐらせている。165～169は壷の肩部～胴部にあたるもので、外面に細い櫛描直線文と波状




第49図　包含層出土土器－1

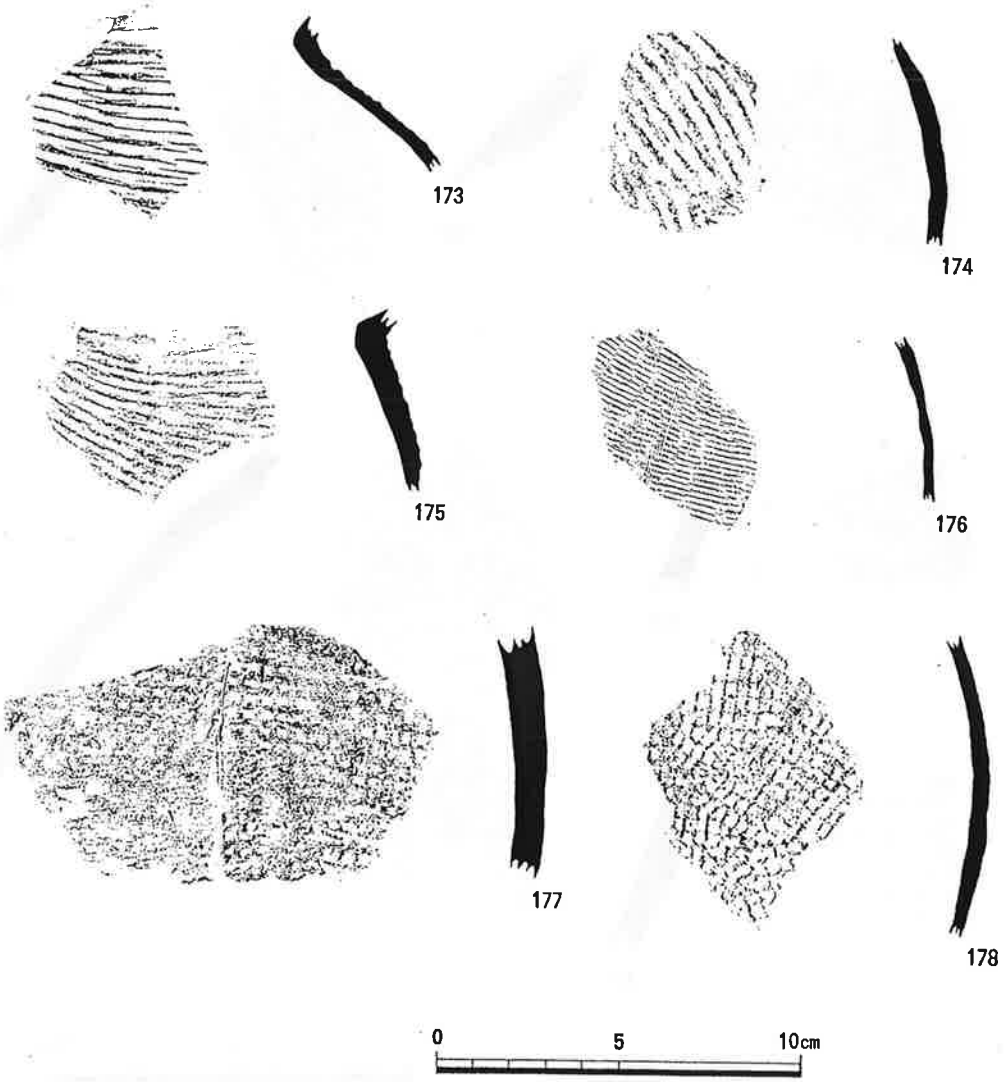



第50図　包含層出土土器－２




第51図　包含層出土土器－３

文を描く。170～172は、櫛描直線文と流水文あるいは凝流水文を施した壷である。171は無頸壷の口縁にあたるものである。173～176は外面に平行タタキ、内面にヘラケズリ調整を施した甕である。173・176は胎土の色調がチョコレート色を示すことから、生駒西麓産のものと思われる。174・175は前者に比べて明燈茶色の明るい色調を示し、両者の産地は明らかに違っている。177は格子状のタタキ目を有する甕と思われる。内面はナデ仕上げである。色調は淡灰茶色であり、一見すると土師




第52図　包含層出土土器－4

器のように見えるが、大変硬質である。おそらく焼成不良の須恵器の一種であろう。178は外面に3㎜四方の格子目タタキの痕跡を残す。内外面に煮沸痕が認められることから、甕の一部と思われる。また、胎土中にシャモットを多く含有している。器壁の厚さは3～5㎜と薄手である。この土器片は、今回の調査で出土した遺物の中に類例もなく、極めて異色の存在である。軟質で、外面に格子目タタキを残すという特徴から、韓式系土器の可能性も有りうる。

**包含層出土土器－3**（第53．54図・図版28）

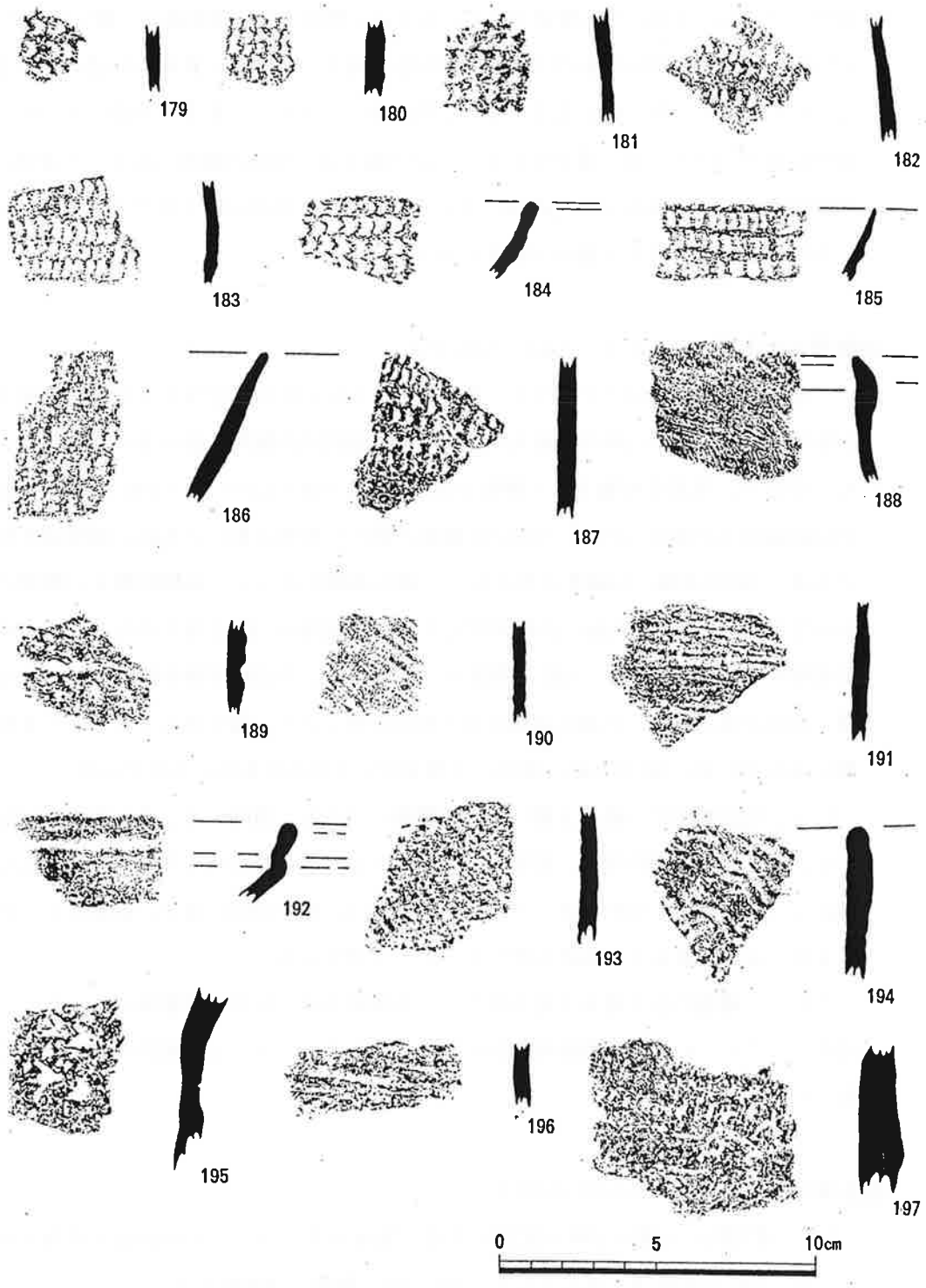
ここに図示したのは全て縄文式土器である。179～187はC字ないしD字の爪形文を施している。184～186は口縁部に相当する。規則的な配列を持つものと持たないものがあり、爪形文の施文にも疎密が見られる。188・190・191・193・196は外面に貝殻条痕文が認められる。189は器表面の荒れが非常に著しいため、調整は不明である。192は浅鉢の口縁部と思われる。他の遺物に比べて、比較的新しい時期のものであろう。194は外面に山形押型文を施した深鉢の一部と考えられる。胎土に石英粒を多く含んでいる。195は深鉢の一部である。外面に半裁竹管状工具による押し引きが見られる。色調は黄桃色系の明るい色である。胎土中にシャモットを多量に含んでいる。197は外面に帯状に3列平行して刻み目をめぐらせている。

以上、包含層出土の縄文土器について概観してみた。量的には、それ程多くはないが、時期的に縄文時代早、前期のものが占める割合が非常に大きい。この状況を単純にムラの盛衰に投影することが許されるなら、縄文時代には早、前期にムラが営まれ、中期以降はその機能が停止していたと考えられる。

ただし、遺物の出土量から見る限り、この場所が核となる母体集落であったことは考えにくい。むしろ移動採集活動を行っていく上でのキャンプ地的なものとして捉えた方が妥当と思われる。

**包含層出土土器－4**（第54図・図版28）

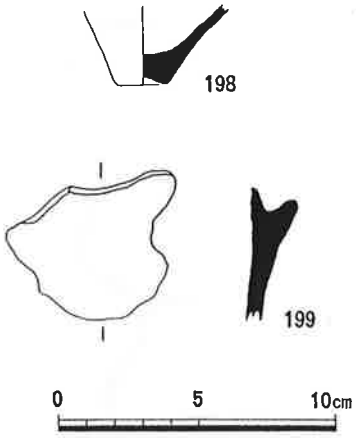
198は縄文時代早期の深鉢の底部である。器体を安定させるためか底部を窪ませている。199は深鉢の口縁部である。198と同一個体の可能性もある。




第53図　包含層出土土器－5

**Ⅴ区スクモ層内出土須恵器**（第55図・図版30）

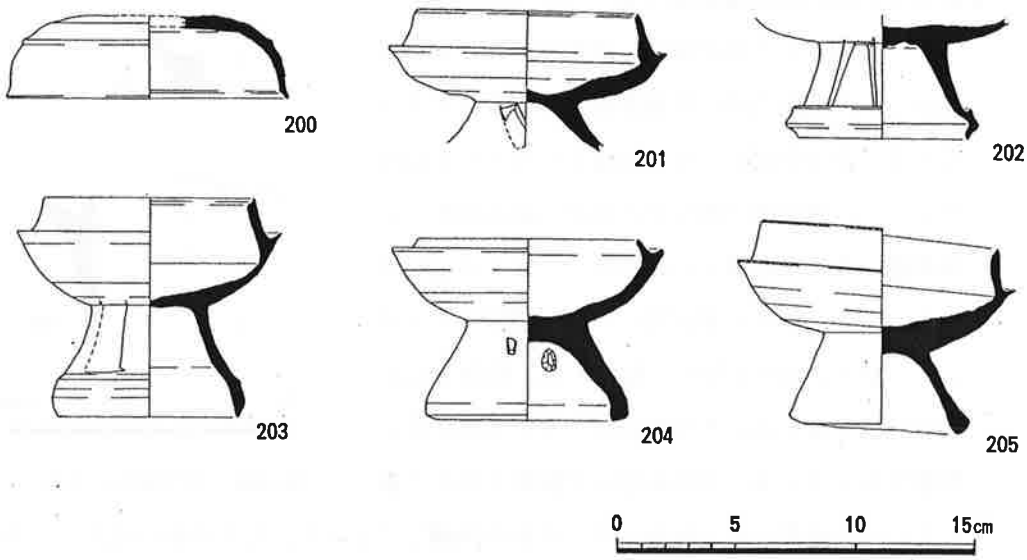
ここに図示した須恵器は、調査Ⅴ区内において検出した旧入江内湖の汀線部分から出土したものである。出土状況からみて投棄されたものとは考えにくく、意図的に置かれた状況が読み取れた。須恵器の大半が高坏で占められているのも注目される。以下、個々の須恵器について概観してみることにする。200は高坏の蓋である。器高3.5㎝、口径12㎝をはかる。天井部はほとんど水平に近い形態をなしている。201は高坏で脚部下半が欠損している。受部のたちあがりは、あまり内傾しておらず、たちあがり高もしっかりしている。脚部に長方形透しを持つ。202は坏部の大半を欠いた高坏で、脚部に長方形透しを持つ。脚部の端部は内側に屈曲させて強くナデている。203は深手の受部を持ち、たちあがり高も高いことから、やや古相の様相を呈している。204は203に比べて受部が浅く、器高も低い。脚部の透し孔の無い脚部と深手の受部からなる高坏である。



第54図　包含層出土土器

201～203と204・205の高坏では全体的なプロポーションがまるで違っているが、出土状況からみて一括性を帯びていると考えられ、時期的な差異は認めにくい。むしろ生産地もしくは工人の違いと捉えた方が妥当であろう。

これらの須恵器群は、出土した場所が水辺であったと思われるところから、水に関わる何らかの祭祀行為に使用された可能性が高い。

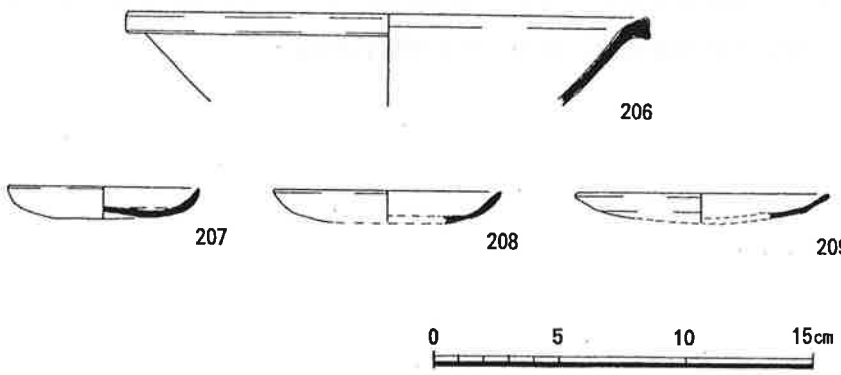



第55図　V区スクモ層内出土須恵器

**古墳時代以降の土器**（第56図・図版31）

206は陶器の広口壷である。全体に淡黄緑色の釉薬がかかっている。207～209は土師器の小皿で口径4～5㎝を呈する。色調は褐色系統である。

これらの遺物の所属時期は中世以降と思われる。




第56図　古墳時代以降の土器

**土錘**（第57図・図版31）

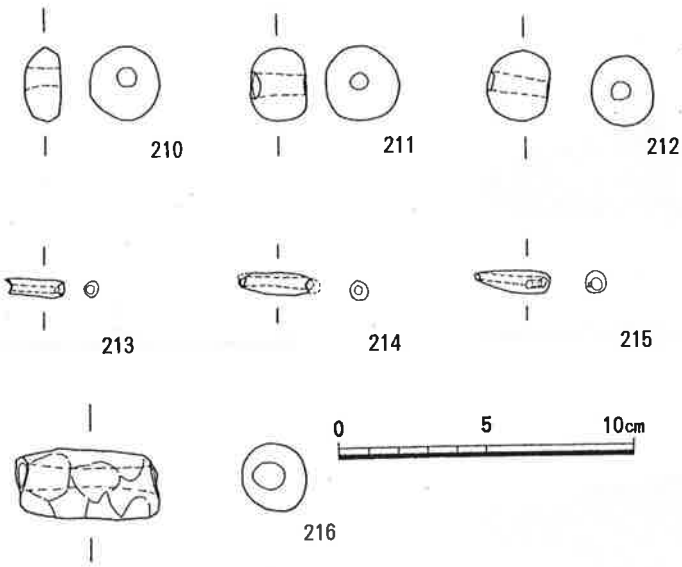
図示した遺物は包含層中から出土した土錘の一部である。

210～212が球状土錘、213～215が小型柱上土錘、216が管状土錘である。全体的にきめの細かい胎土を使用しているようである。焼成も極めて良好である。

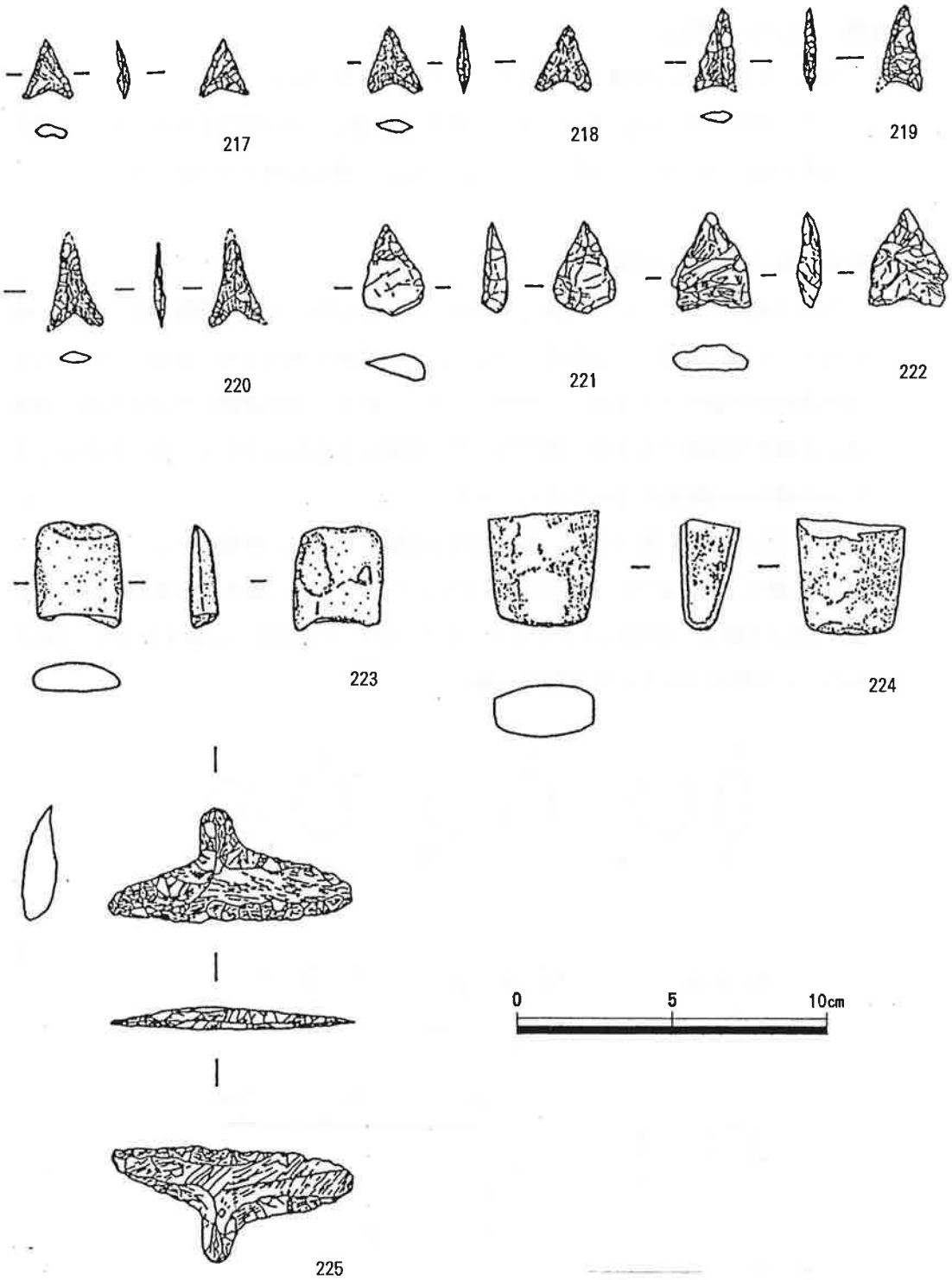
**石製品**（第58. 59図・図版32）

今回の調査で検出された石製品の内分けは打製石鏃・石匙・磨製石斧・磨石・砥石などである。数量的には非常に少なく、出土遺物全体の１％にも満たない。大部分が遺物包含層やスクモ層から単独で出土しており、共伴遺物に欠けるため、時期決定は極めて困難であるが、縄文時代早、前期の土器が出土していることから、それらの遺物と同時期のものと考えられる。

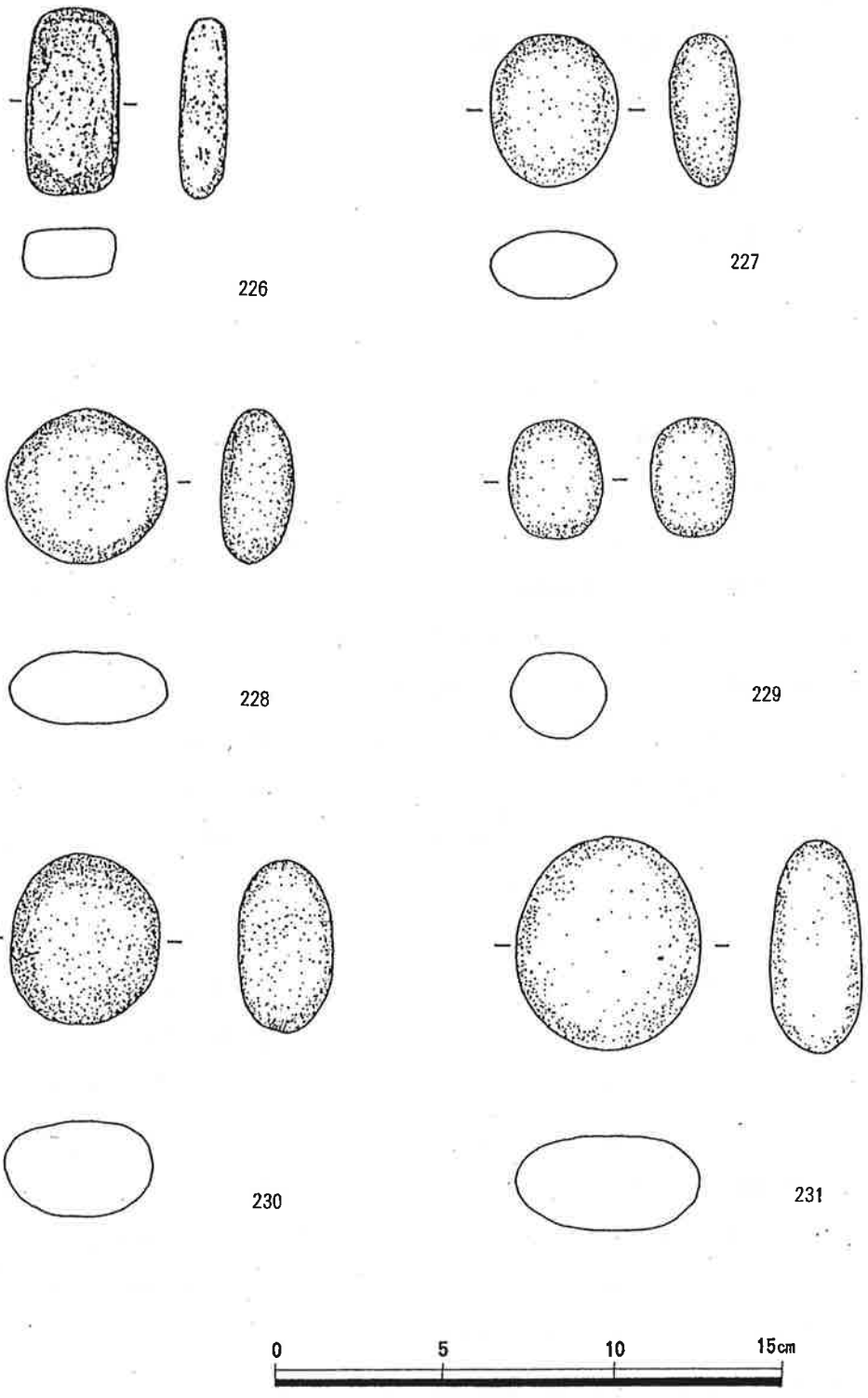
217～222は打製石鏃である。221・222は未製品である。材質はチャートである。223は石錘と考えられる。約半分程を欠失している。224は偏平片刃石斧の破片である。225は石匙で、材質はサヌカイトである。227～231は磨石の類であろう。226は砥石として使用されていた可能性が高い。




第57図　土　　錘




第58図　石製品－1




第59図　石製品－2

# 第４章　調査のまとめ

今回の発掘調査によって、入江内湖周辺の集落遺跡の在り方を、部分的ではあるが明らかに出来たようである。

既存の調査事例と照らし合わせながら、その特色を抽出してみることにする。

まず遺跡の立地であるが、入江内湖西野遺跡の場合、内湖の水辺りに面した若干の微高地上に立地していた状況が読み取れる。

その要因として考えられる事がいくつかある。

１つには入江内湖が人々にとって大切な生業の場であった為であろう。今でこそ広い平野部が拡がり、秋ともなると一面に黄金色の稲穂がゆれているといった風景が見られるが、その部分が湖であった時代はどうであったのだろうか。おそらく耕地に適していた土地が、ごく狭い範囲に限られていたと思われる。したがって本来、生業活動のメインである稲作だけでは、集落経営が困難であったのかもしれない。その結果、主に漁労活動としての入江内湖への積極的なアプローチがあったのではなかろうか。この点については以前の調査も含め、当遺跡からは農耕を予測させる出土遺物に欠ける点や、反対にたも網や土錘などの漁具が出土している事からも裏付けられる。

またもう１つの理由として、交通・交易上のメリットが考えられる。入江内湖は琵琶湖を介しての湖上交通との接続を、容易にしていたのであろう[①]。そのために内陸部ではなく内湖の湖岸辺りに集落を形成していたのではなかろうか。これは陸上交通の未発達な当時としては、ごく当り前の事だったのかもしれない。

出土遺物のなかにもごく少量ではあるが、古式土師器段階の外来系土器[②]（東海系・北陸系・吉備系）が出土しているが、この事実も少なからず前述した交通・交易上のメリットを暗示しているように見える。

次に内湖周辺の集落の特徴として、その住居形態が竪穴式住居ではなく全て掘立柱建物である事が指摘される[③]。もちろん当遺跡も同様である。今後の調査によって、この点は修正される可能性も残されているが、少なくとも既存の調査事例からは、掘立柱建物集落であったといわざるを得ない。

掘立柱建物を用いた要因は地理的環境に求められなくもない。じめじめとした低湿地の周辺に住居を築こうとした場合、竪穴式住居よりも平地式もしくは高床式の掘立

柱建物の方が快適であった可能性もある④。

またもう一つの要因として、掘立柱建物の採用の先進地域であった畿内と、いちはやく関係を持った結果とも考えられる。この事は、土器の面にも顕著な傾向として現れている。中でも古式土師器の段階では、在地系の土器よりも畿内系の土器が高い比率を示しているのである。

この事から当該地は、古墳時代に入ると、湖北地方の中でもいちはやく畿内の影響が現れる地域の一つといえよう。

当遺跡は縄文～古墳時代にかけての複合遺跡であるが、連綿と続くものではなく、一時的あるいは単発的なものであった。例えば、縄文時代では中期や後、晩期の土器が認められないし、古墳時代では後期の土器が認められない。

こうした現象は明らかに集落の移動（人間の移動）あるいは廃絶がもたらした結果である。集落の移動には幾つかのパターンが想定される。

A　以前に生活痕跡の全く無い場所に新たに集落を形成する場合。

B　既存の集落へ別の集落が新規参入する場合。

C　複数の集落が新たな土地に合村あるいは集村する場合。

D　以前に集落が廃絶してしまった同じ場所へ、時を隔てて集落が形成される場合。

大まかには以上の４種類のパターンが考えられよう⑤。

入江内湖西野遺跡がこれらのどれに該当するのか、周辺遺跡の消長とも併せて時代を追って推察してみたい。

**縄文時代**

当遺跡では中期以降が空白時期である。その穴埋めを周辺遺跡に求めてみると、磯山城遺跡が筆頭に掲げられよう。出土遺物量の豊富さ、一定量を占める外来系土器⑥、早期～晩期の遺物がコンスタントにそろっている点などから、縄文時代全般にわたる交流・交易の拠点的集落だったに違いない。

狩猟採集経済を基本とする縄文時代における集落の移動は、弥生・古墳時代のそれとは質的に異なっている面を持っていると思われる。中期以降の西野遺跡の断絶は、そういった意味で単純にパターン化されるものではないが、ここで考えられるのは、前期に比べて爆発的に中期の土器が多量に出土する磯山城遺跡へ集落が集約

されていったためではないだろうか。

### 弥生時代

弥生時代においては前期～後期までの遺物が出土しているが、その量的なものとなると微々たるものである。後出の古墳時代前期の遺物量に比べるとはるかに少ない。出土遺物を見る限りでは、拠点的集落というイメージは浮んでこない。母村と分村という村落形態をあてはめるとするなら、分村に該当すると思われる。

縄文時代中期以降断絶していた、当地における集落経営が、弥生時代に入って細々とではあるが再開された状況は、D類のパターンとして捉えることが出来よう。

### 古墳時代

古墳時代に入ると弥生時代に比較して、爆発的に遺物の出土量が増加する。特に古墳時代前期の遺物が圧倒的に多い。この現象を単なる人口の自然増加と考える事は早計であろう。単一集落内における既存の構成メンバーの増加と考えるには、弥生時代後期の遺物量との格差があまりにも著しい。無論それも一因ではあろうが、その他に当該期に汎全国的に起こった、広範囲な政治的・経済的結合に伴う人的移動あるいは物資の大量流入出の一側面の現れと理解することも出来る⑦。畿内系を始めとする東海系や北陸系などの、出土土器の一定量を占める外来系土器の存在にも、その事象が反映されているのではなかろうか。前述したパターンに当てはめるならB類に相当するものであろう。

古墳時代も中期に至ると遺物の量は減少傾向を示すようである。5世紀末～6世紀初頭に比定される須恵器も出土しているが、ごく少量である。原因は明確にし得ないが、この時期に入江内湖西野遺跡が廃絶した事⑧は、これ以降に生活痕跡が認められないことからも確実である。

以上大まかではあるが今回の調査で得られた知見をもとに、入江内湖西野遺跡についての素描と若干の評価を行ってみた。特に古墳時代については前回の発掘調査で指摘されていた、半農半漁的集落の可能性⑨を追認する結果となった。

調査結果を本書にどれだけ反映出来たかを考えると、まことに厚顔の至りである。

出土遺物に関しても整理期間の都合上、主だった遺物しか掲載出来ず反省しきり

である。

大量の古式土師器の分類・編年作業、外来系土器に対する評価、在地系土器との構成比率の分析等々残された課題は山積みしている。今後これらの課題について、機会があれば少しづつでも取り組んでゆきたい。

## 注

① 道路網が未発達であった当時、人やモノが移動する手段として水上交通がメインであったと考えられる。この事は少なからず、集落（特に拠点的集落と呼称すべきようなムラ）の占地に影響を与えていたのではないだろうか。

② このような外来系土器は時代を問わず流入している。しかしながら時代によって、土器の産地に傾向が見られる。これは、西野ムラの対外交流が決して単純なものでなかったことを示していると思われる。

③ こういった集落類型について、『弥生時代の掘立建物』埋蔵文化財研究会　1991年に詳細に述べられている。

④ 竪穴式住居が検出されないもう一つの要因として考えられるのが、集落廃絶以後の耕地化に伴う大規模開発であろう。

⑤ 視点を変えて見てゆけば、もっと細かくて多彩な類型化が加納であろう。

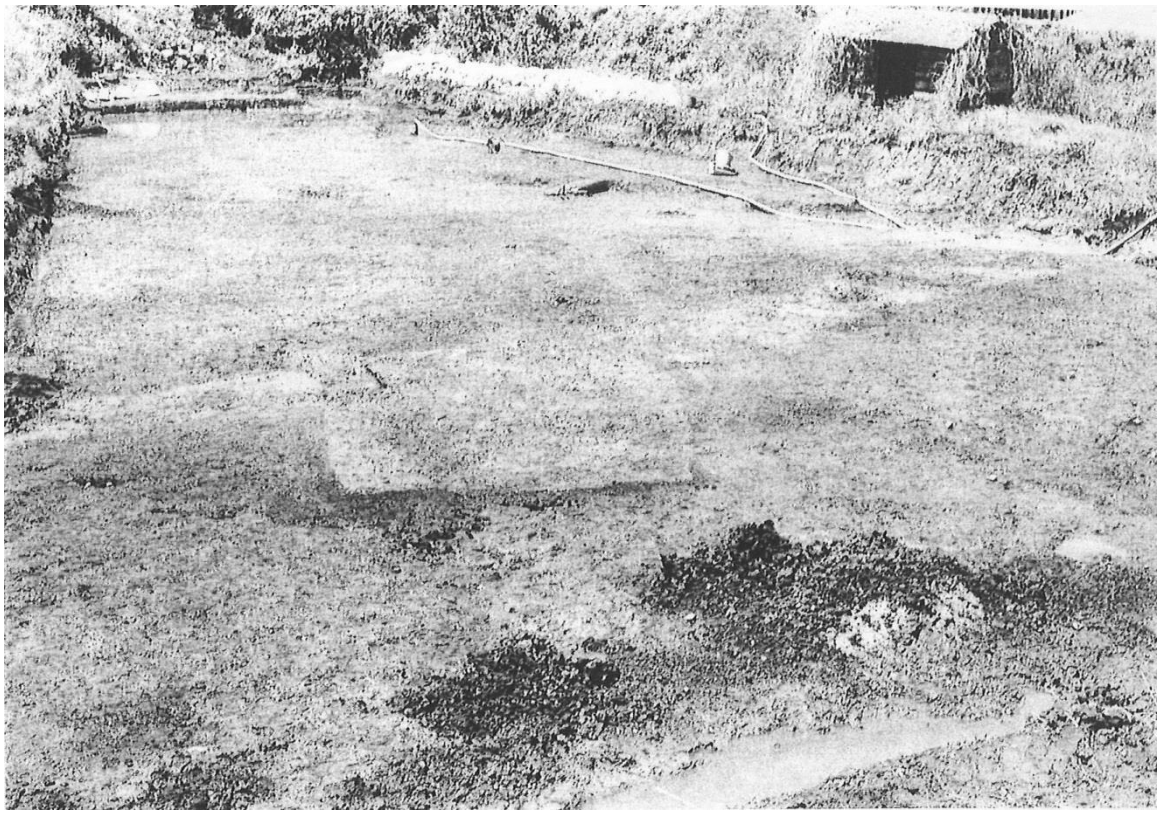
⑥ 早期から晩期に至る各時期に、関東・中部・東海・北陸・瀬戸内系の多種多様な土器が認められる。前期には北白川下層式、中期には船元式が主流を占めている。

⑦ この現象が顕著に現れているものとしてよく例にのぼるもの中に、奈良県桜井市に所在する?向遺跡があげられる。

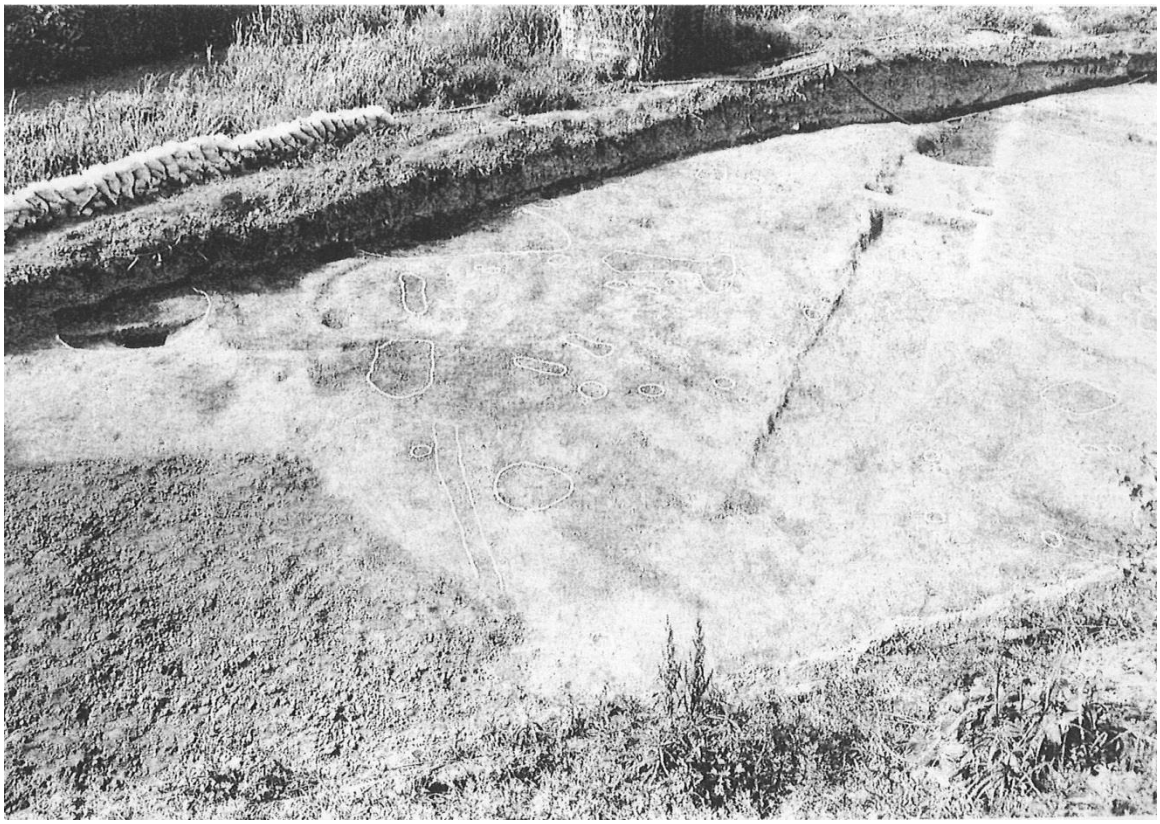
⑧ 集落が廃絶した理由としては、自然災害・火災・疫病の流行・他の場所への移動等、様々な要因が考えられる。

⑨ 半農半漁という用語を便宜的に使用しているが、あくまでも水稲耕作がメインであり、漁業活動の方は補助的な役割でしかなかったと考えられる。

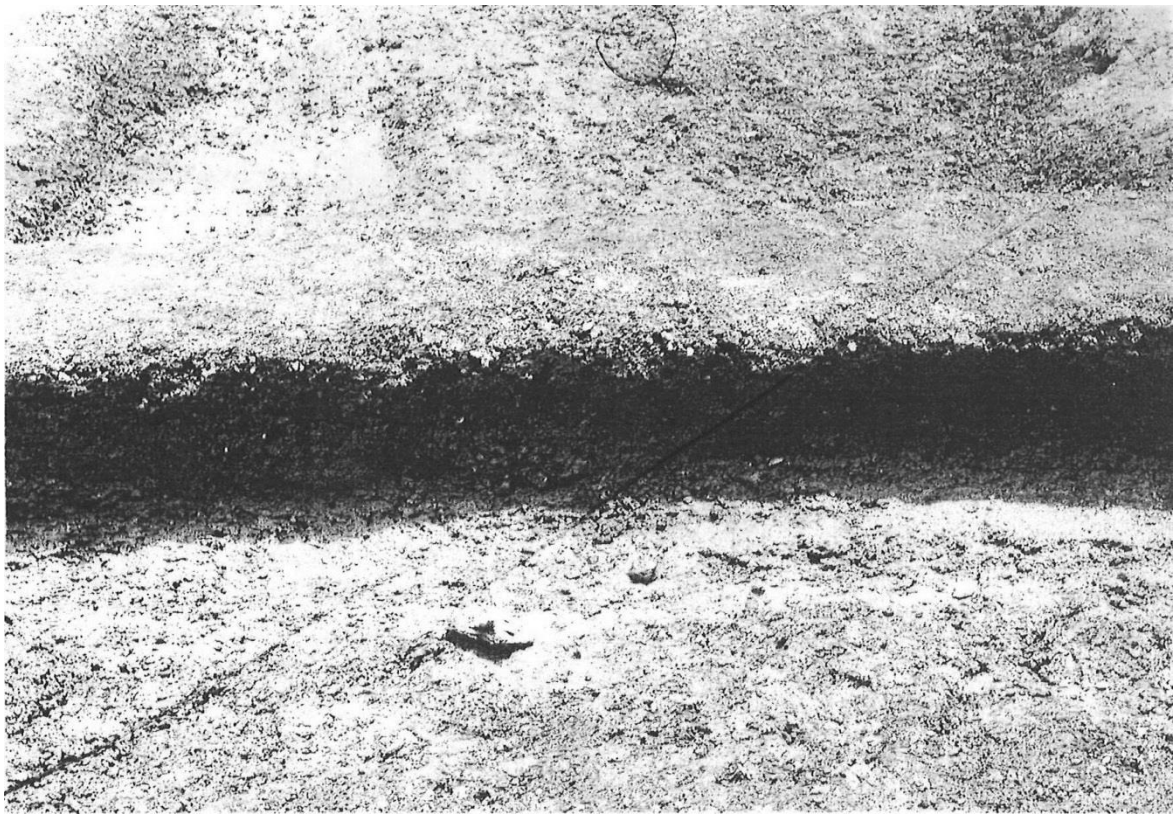
# 図　　版



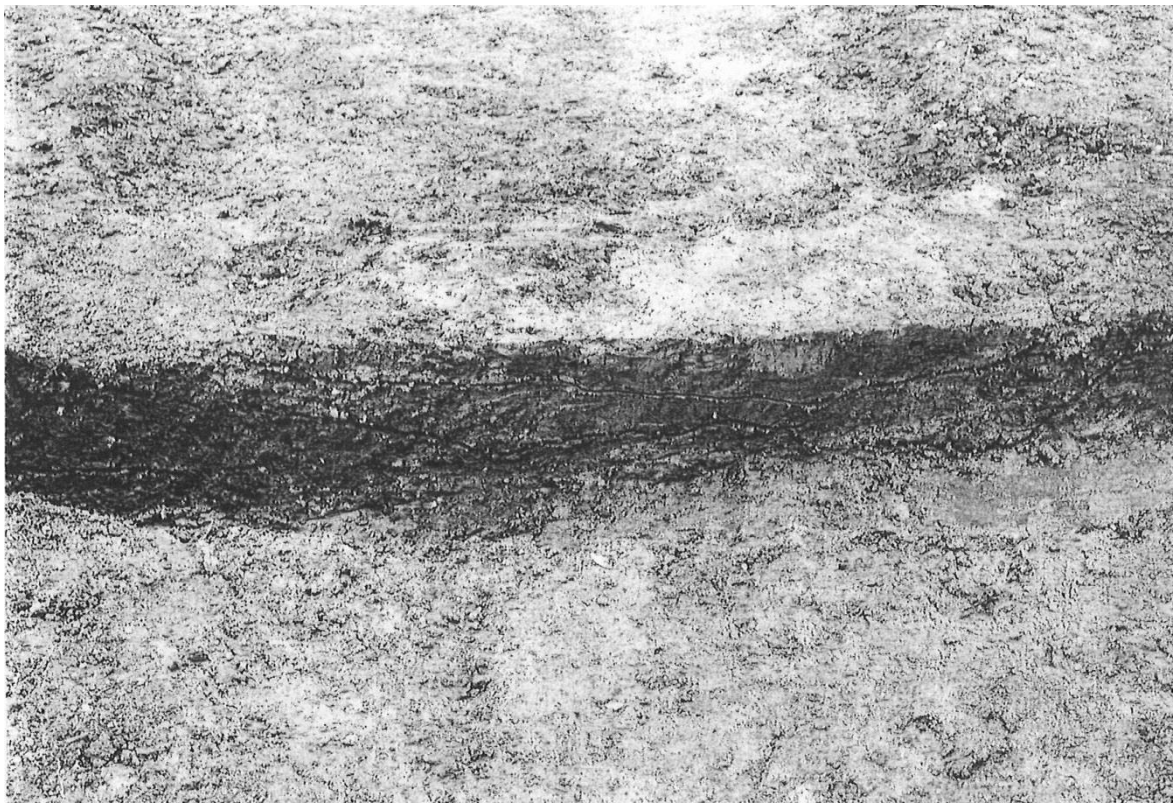
（１）SD01・02 検出状況



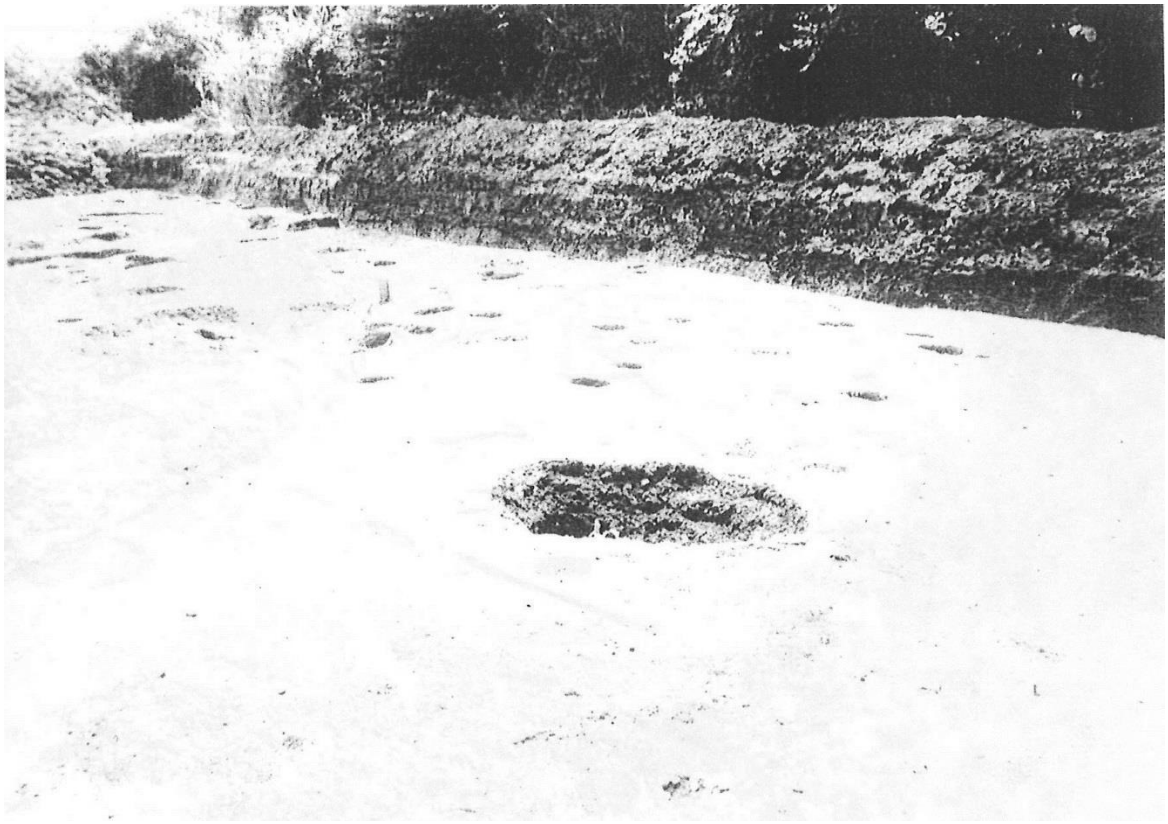
（２）SD01 完掘状況



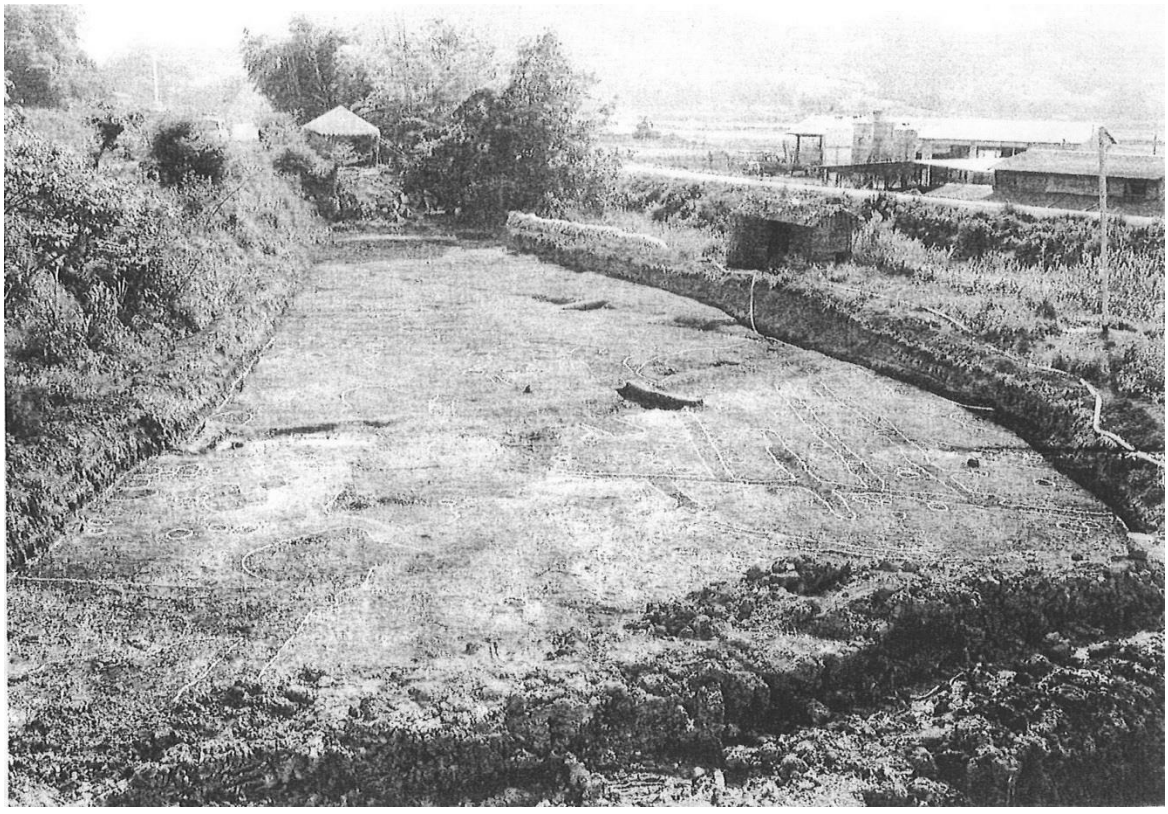
（１）SD01 土層断面



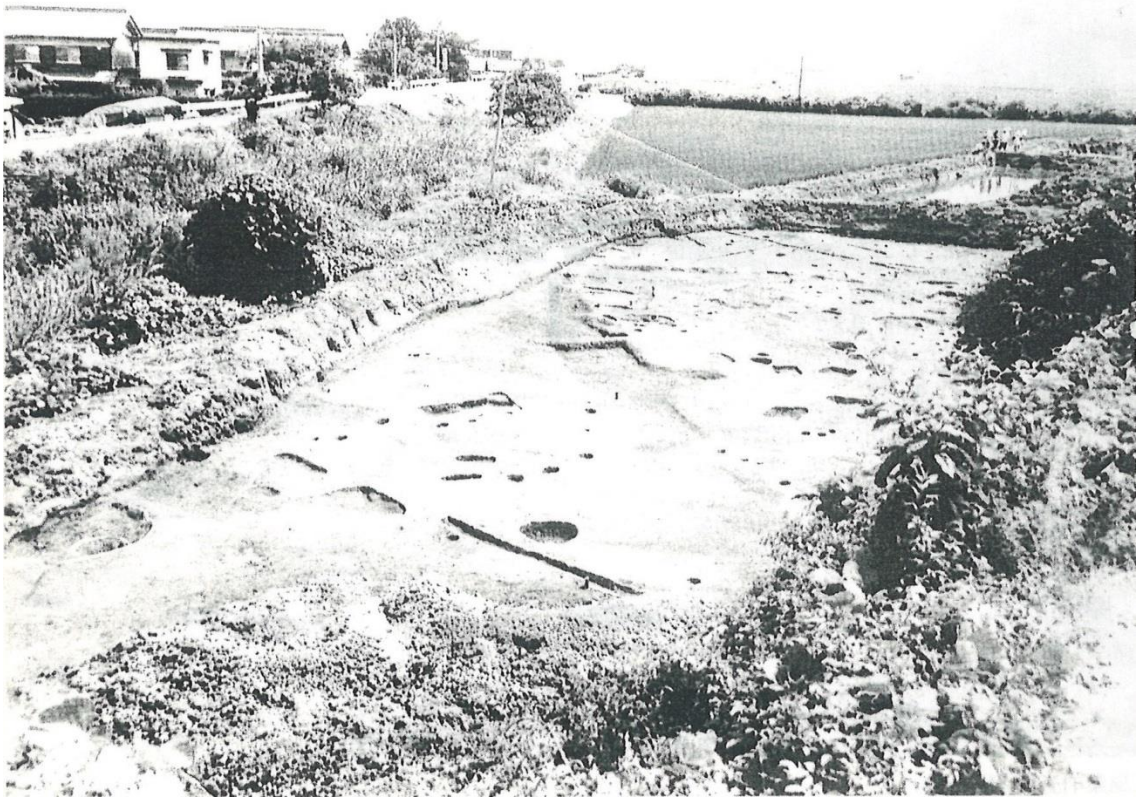
（２）SD02 土層断面



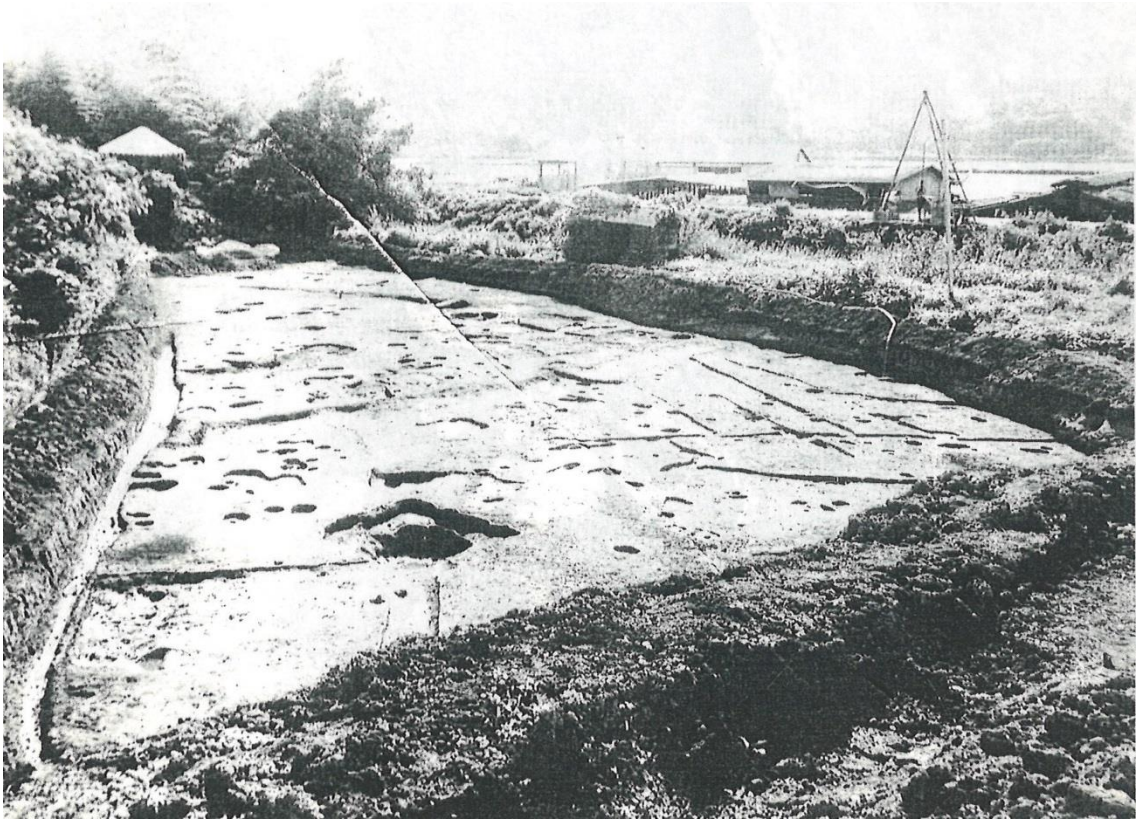
（1） I 区土層断面



（2） I 区遺構検出状況

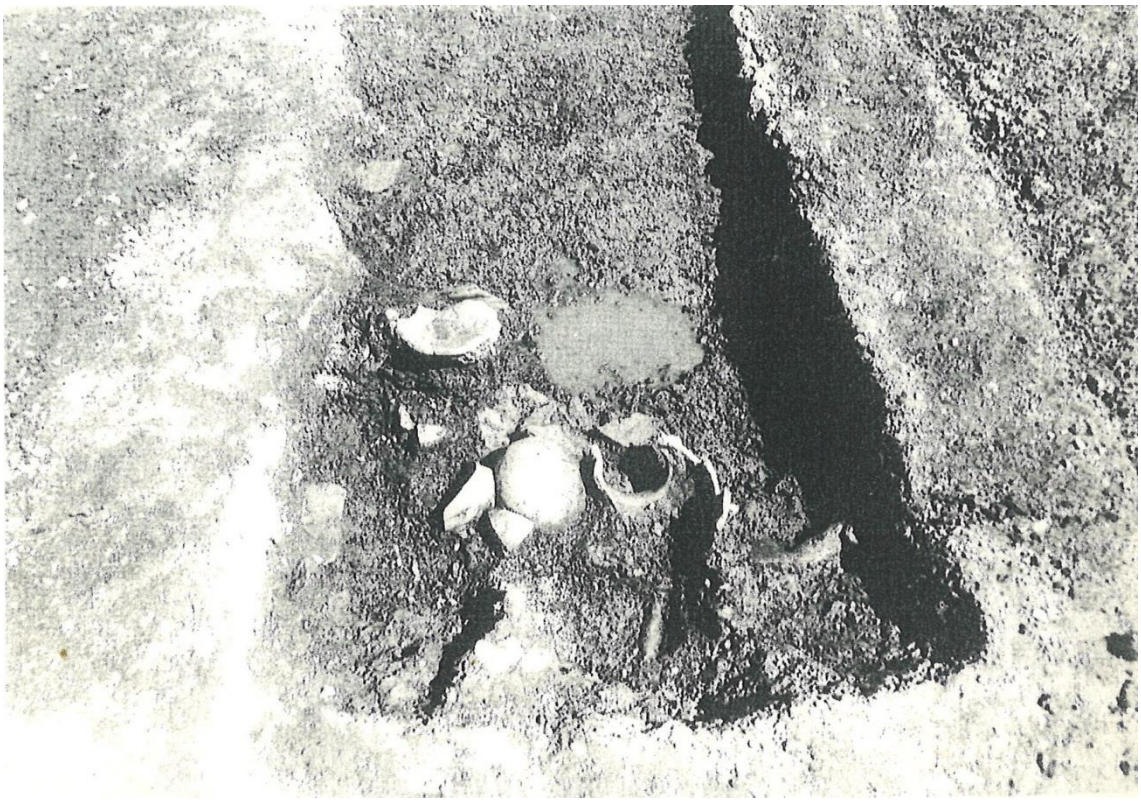


（１）Ｉ区遺構完掘状況（西より）



（２）Ｉ区遺構完掘状況（東より）

（１） Ｉ区調査作業風景

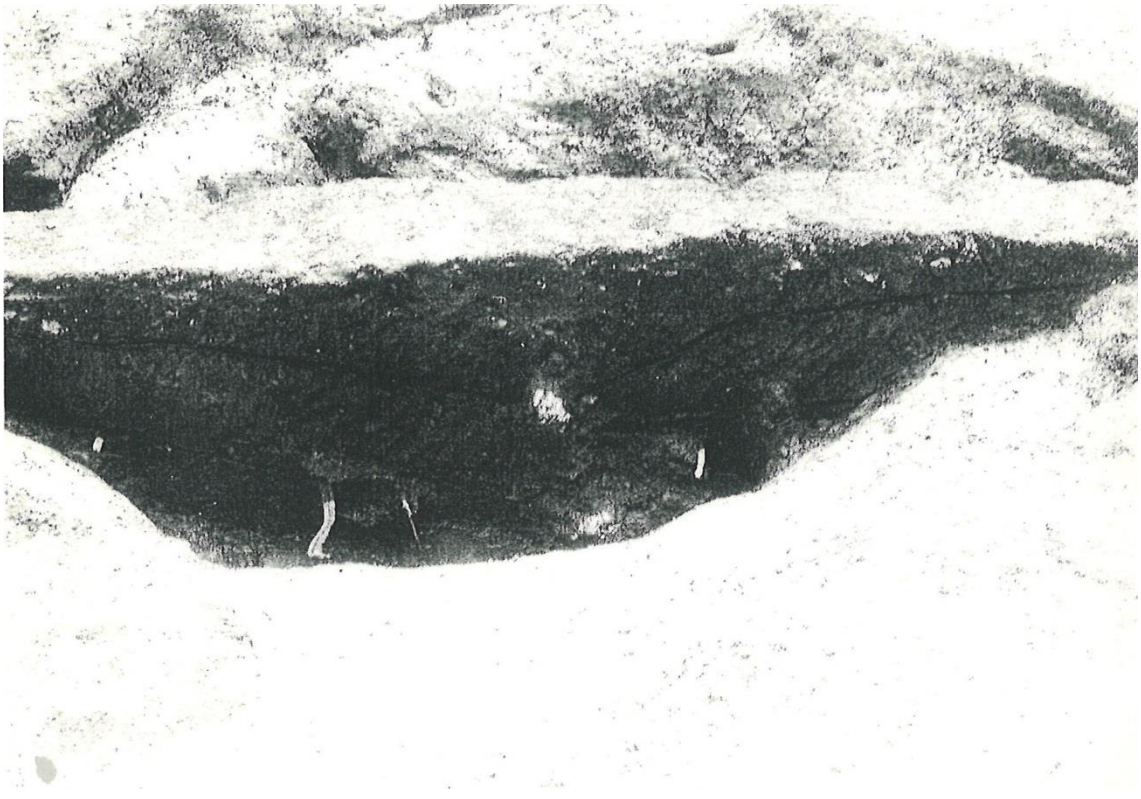


（２）SK06 遺物出土状況

（１）SA01、SB02、溝状遺構群

（２）SD05・06、SK10～13、SB03

（１）SB01、SD16・17、SK06



（２）SK13 土層断面

（１）SK13 遺物出土状況

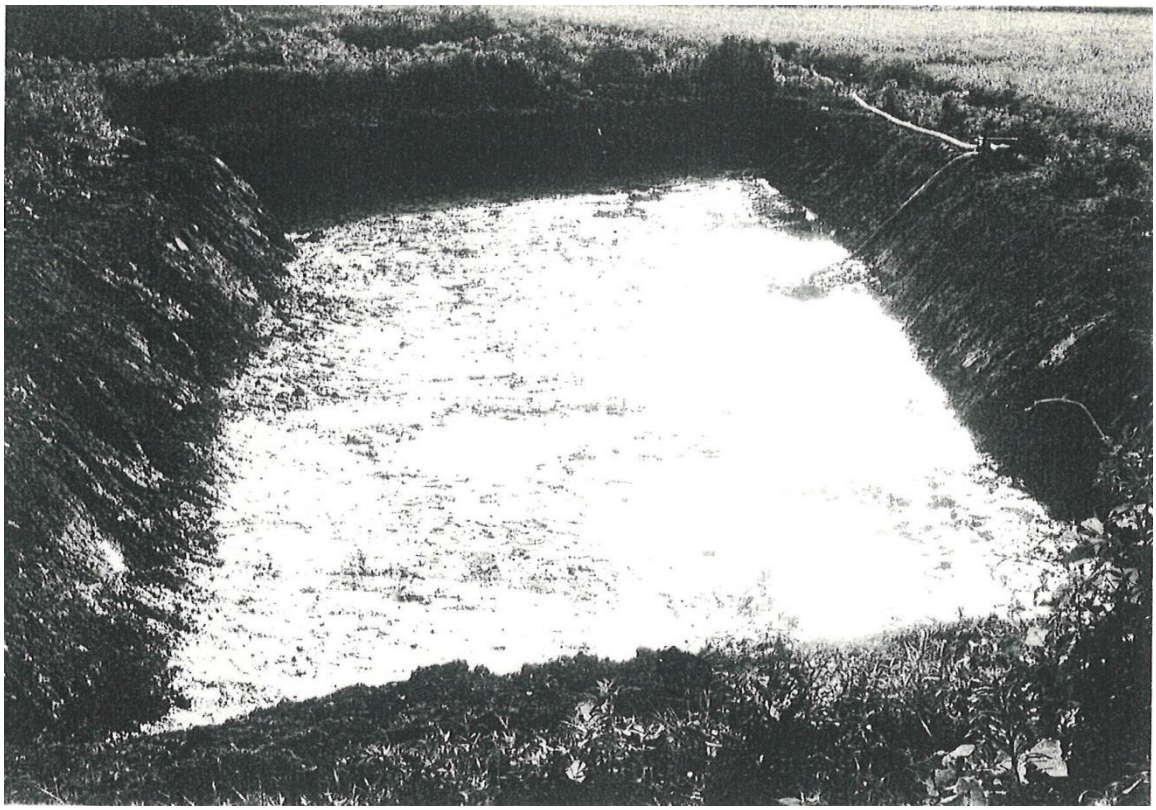
（２）SK13 自然木出土状況

（１）Ⅱ区遺構完掘状況（西より）

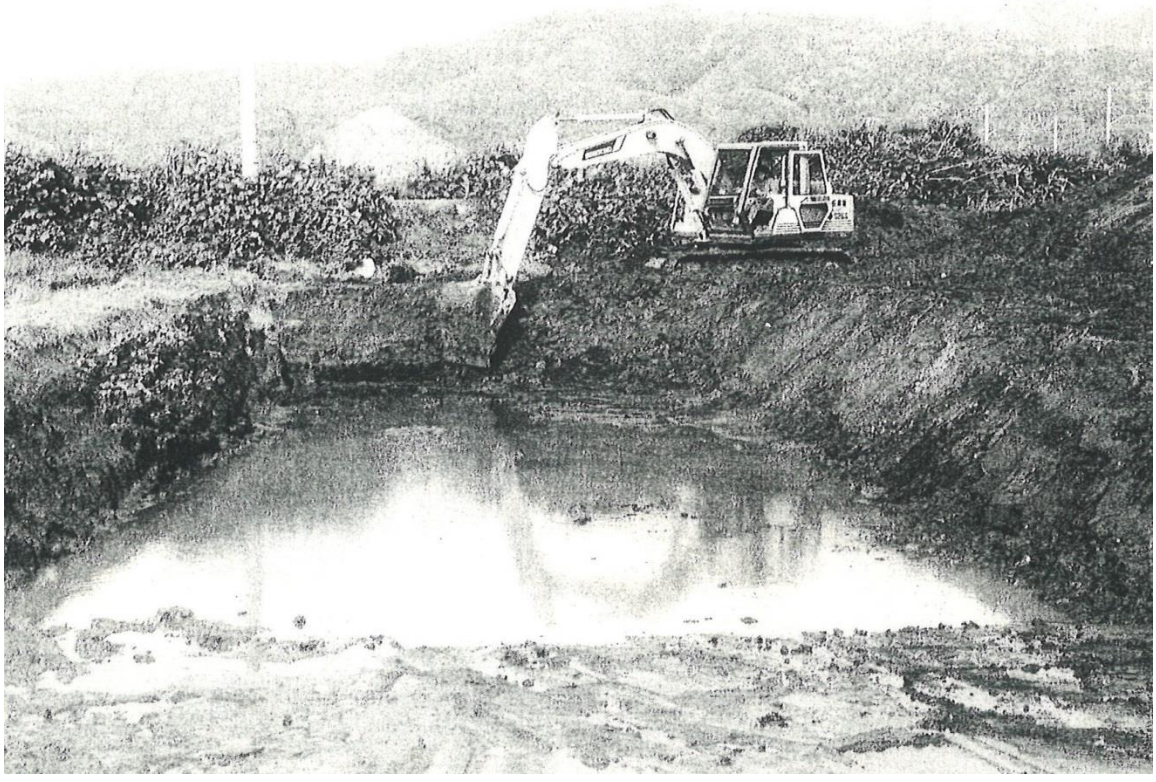
（２）Ⅱ区遺構完掘状況（南より）

（１）柱穴半截状況

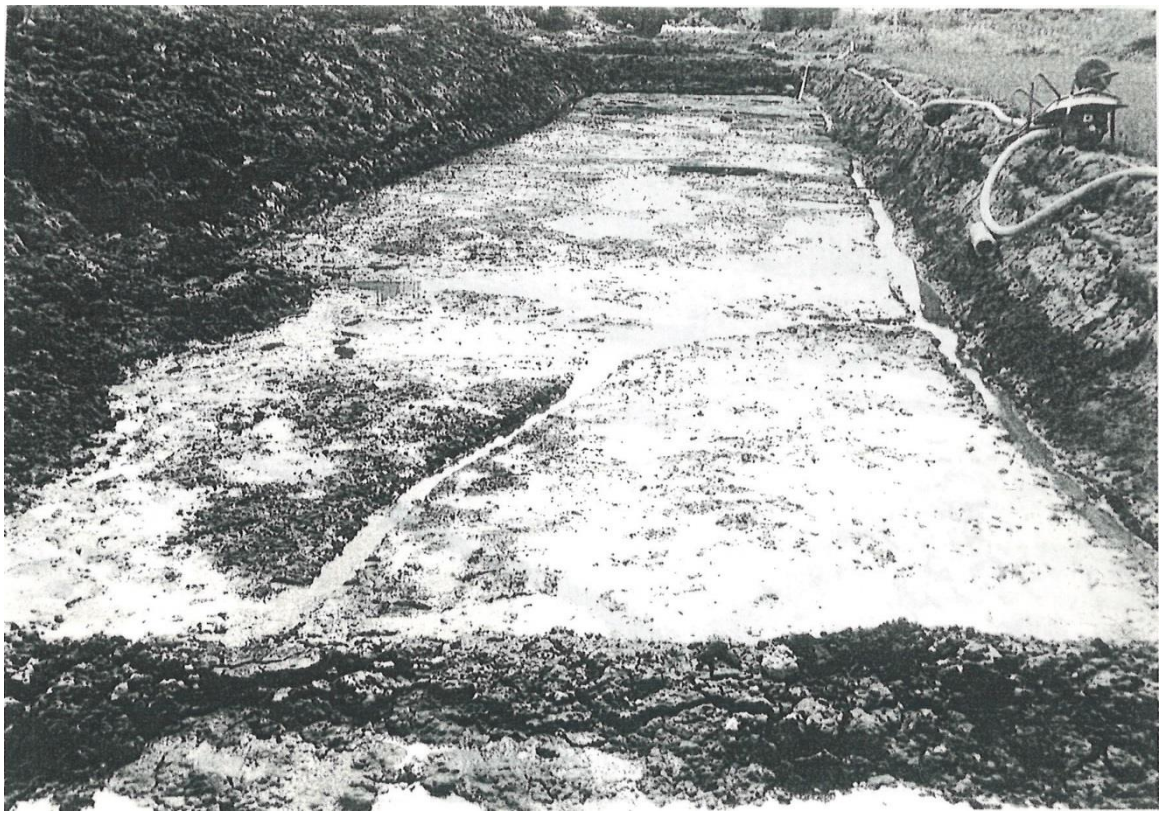
（２）柱穴半截状況



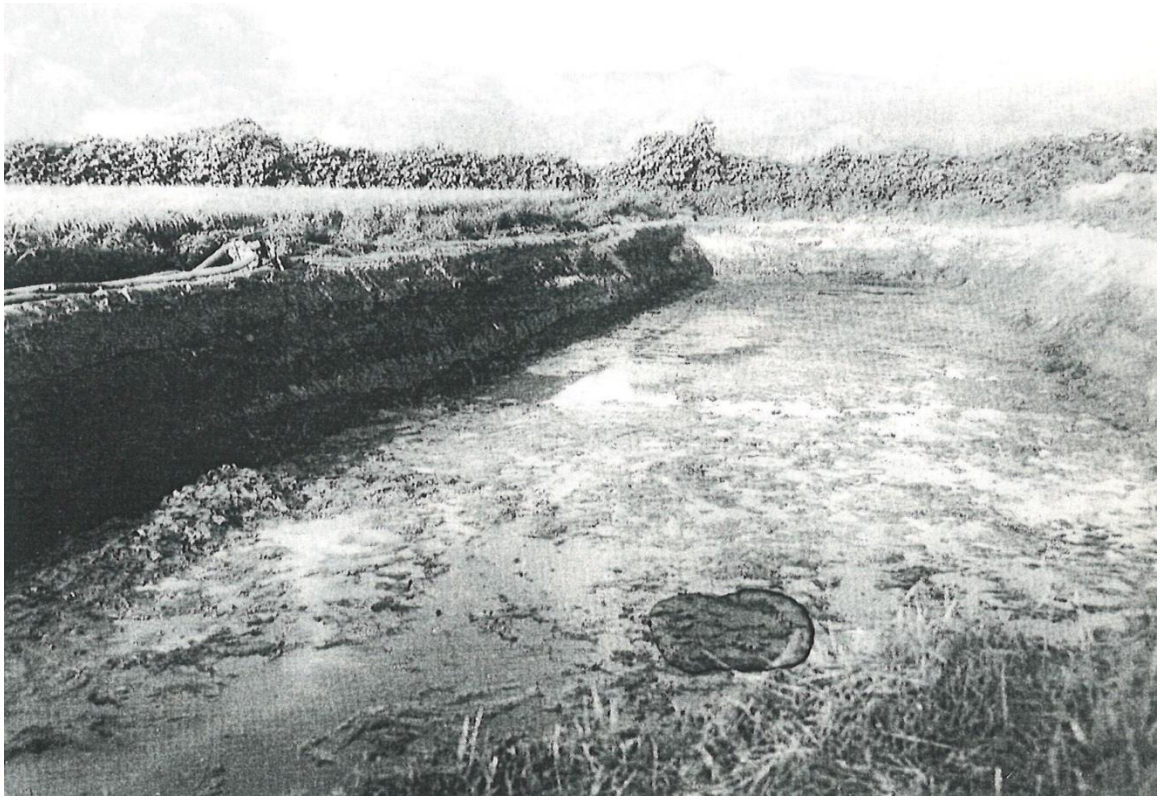
（１）Ⅲ区完掘状況（東より）



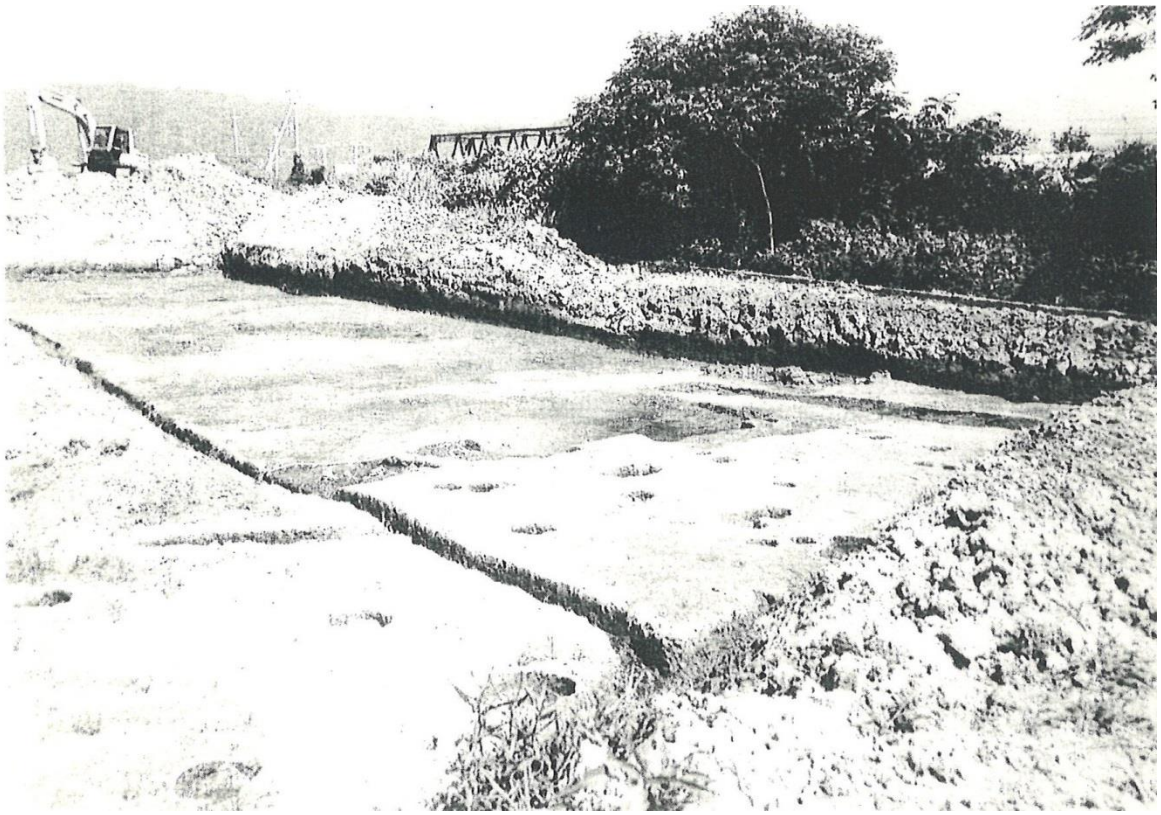
（２）Ⅳ区調査作業風景



（１）Ⅳ区完掘状況（東より）

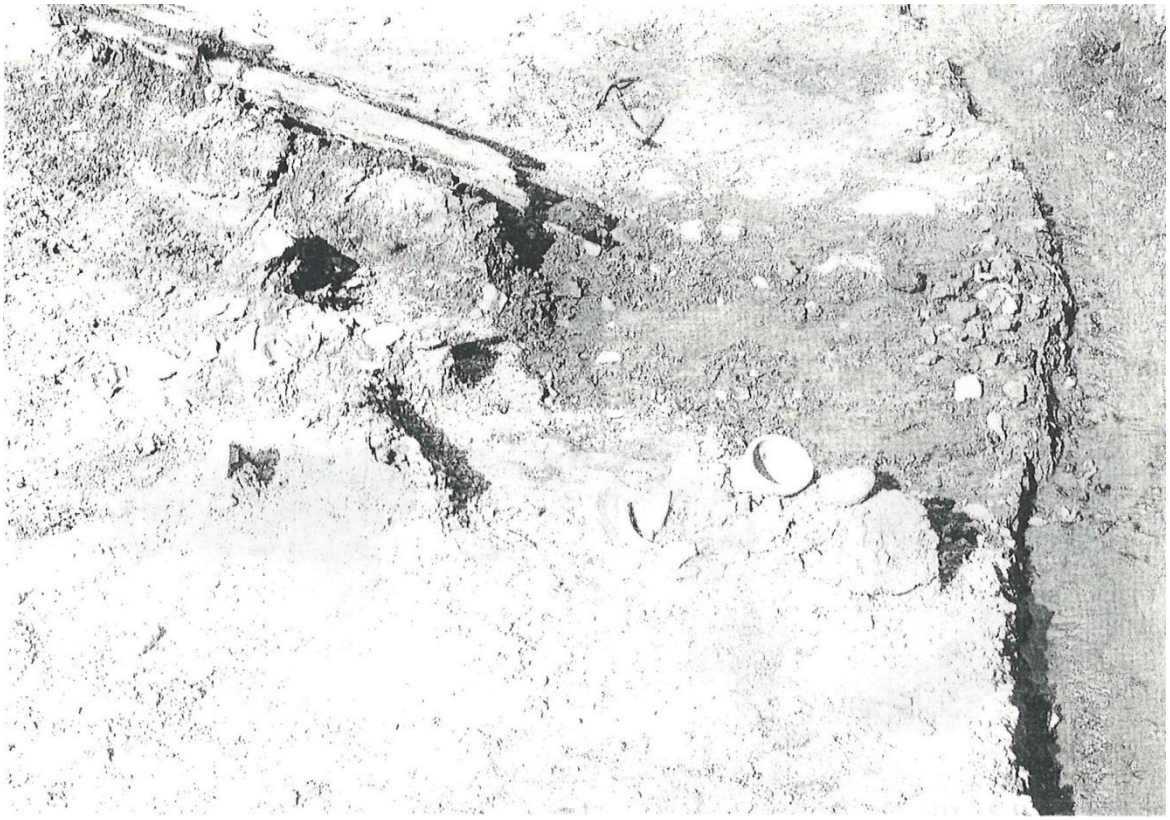


（２）Ⅳ区土層断面

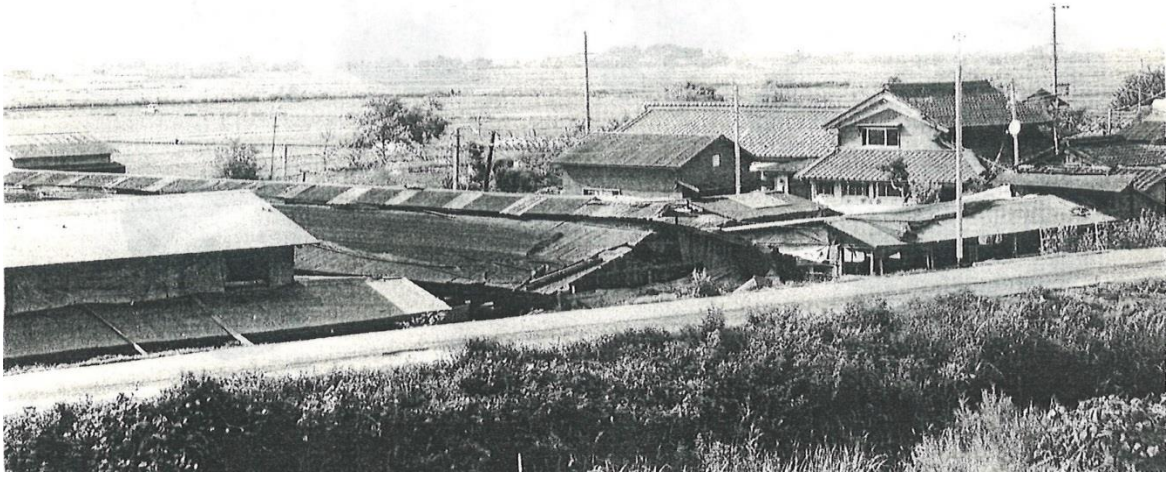


（１）Ｖ区遺構完掘状況（西より）

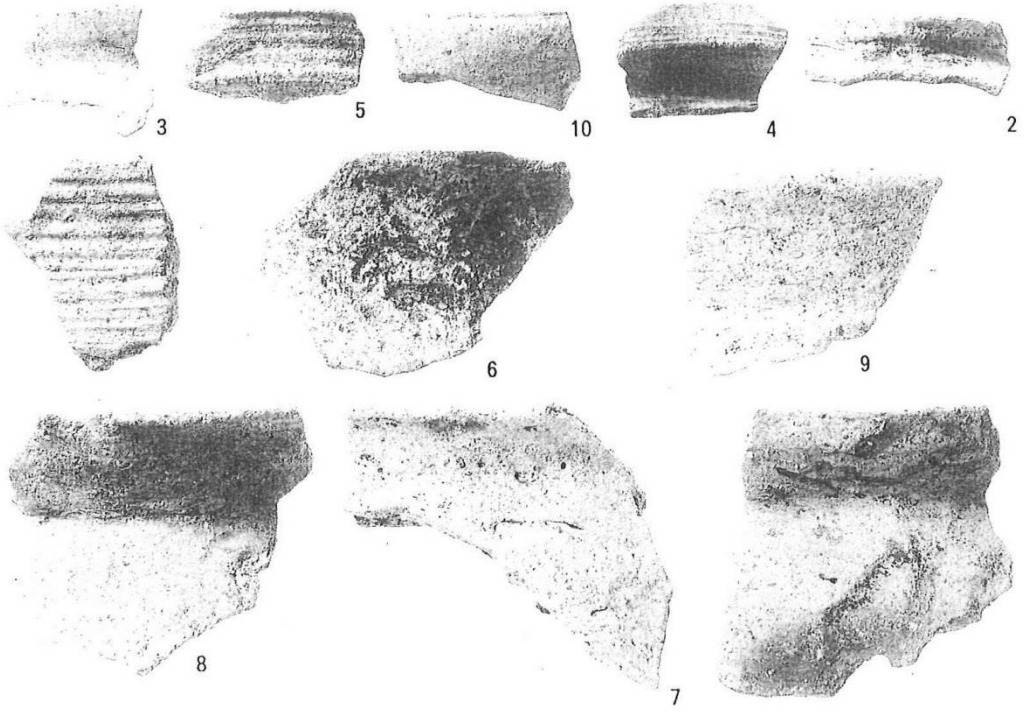
（２）Ｖ区遺構完掘状況（東より）



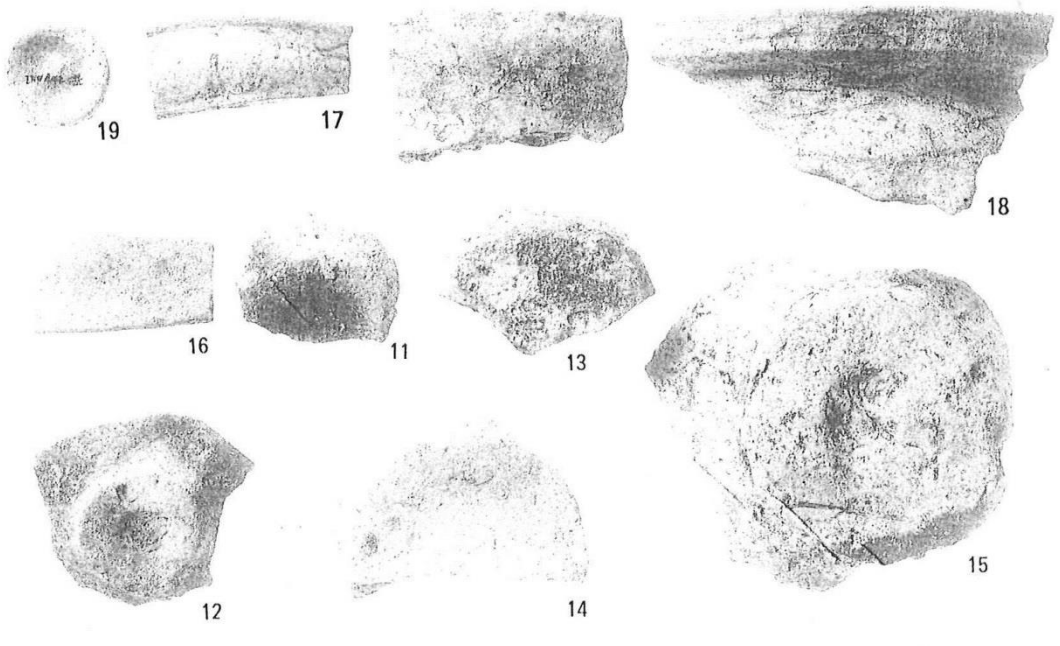
（1）Ｖ区スクモ層内須恵器出土状況



（2）調査地より入江干拓地を望む



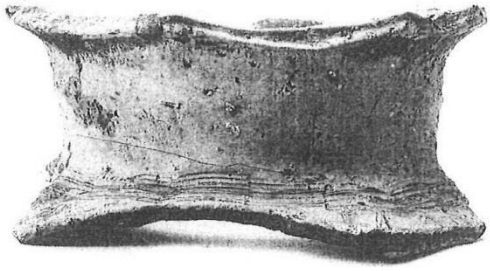

（1）SD01 出土土器



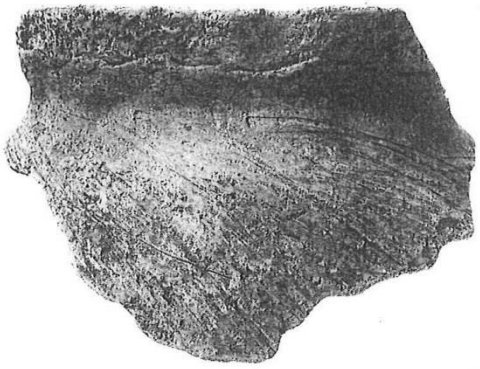

（2）SD02 出土土器

20

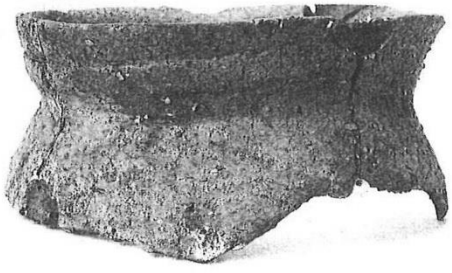
89



29



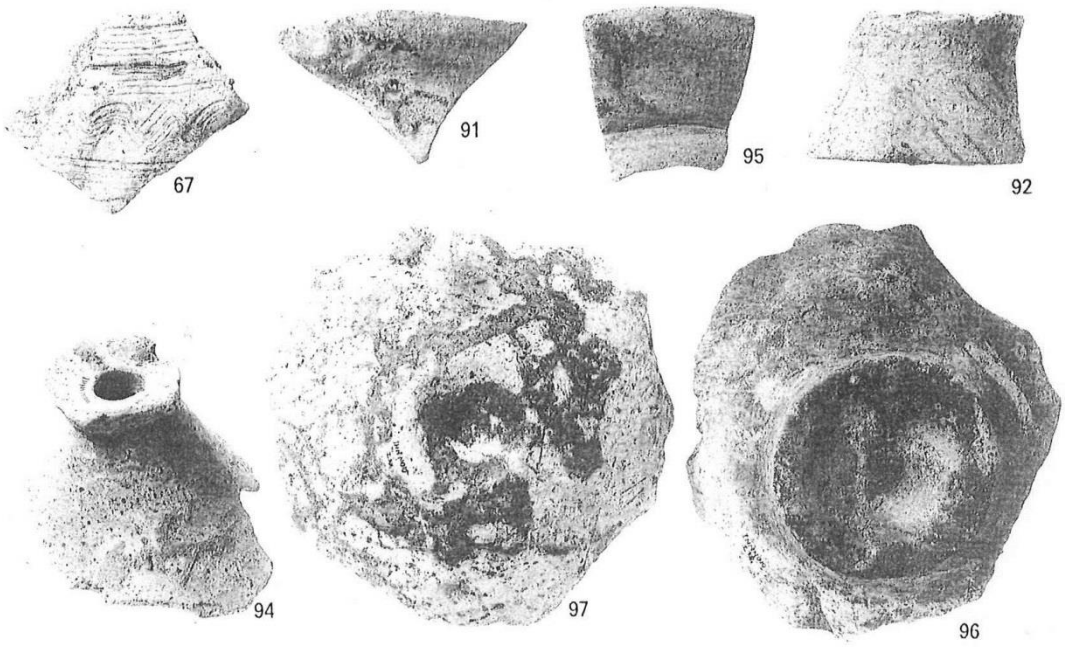
40



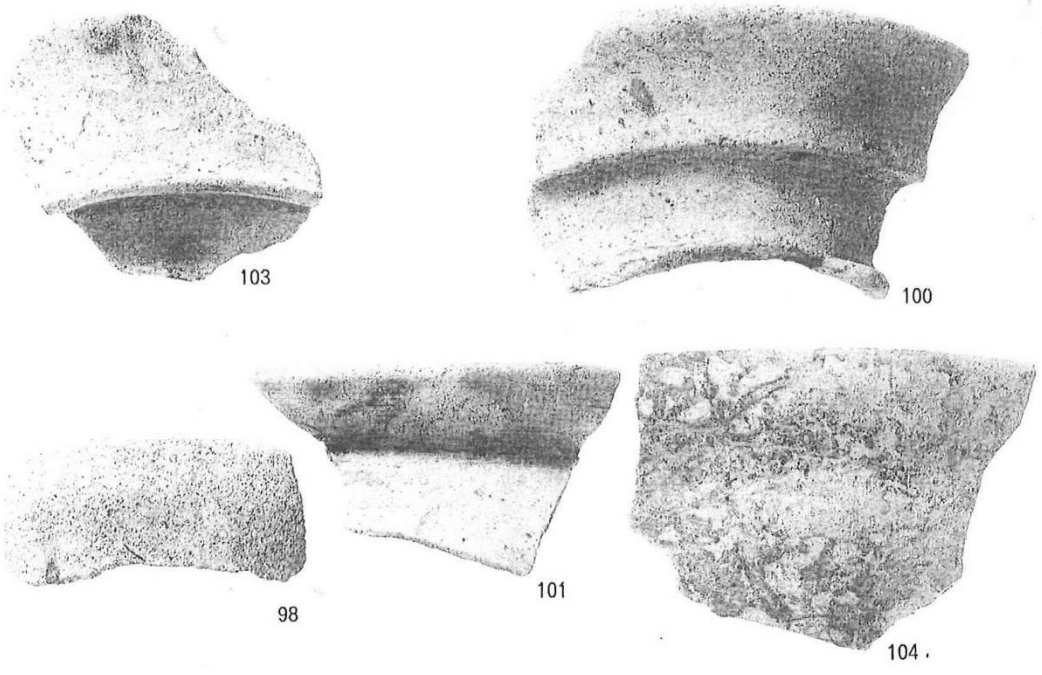
105

遺構出土土器

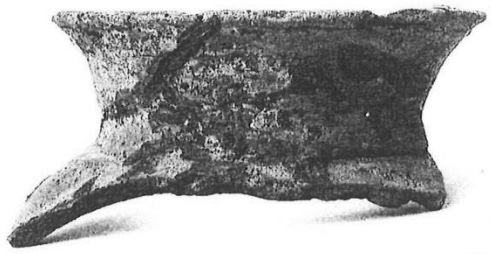
20：ＳＤ０２
29：ＳＤ０５
105：ＳＫ０７
89：ＳＫ１９
40：ＳＤ１９



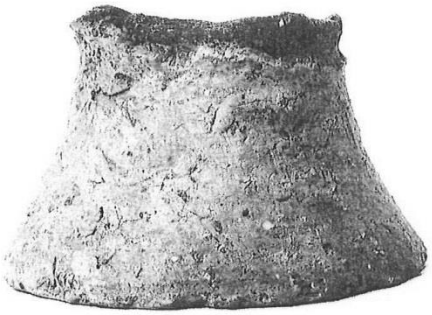

（1）SK06 出土土器



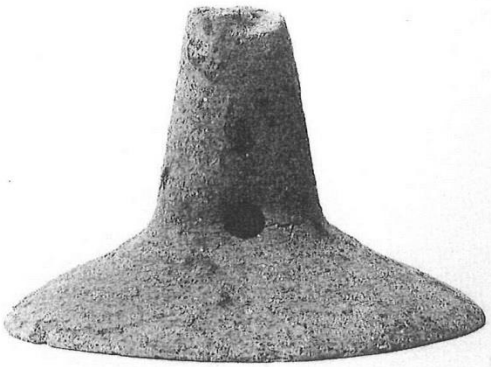

（2）SK06 出土土器



99

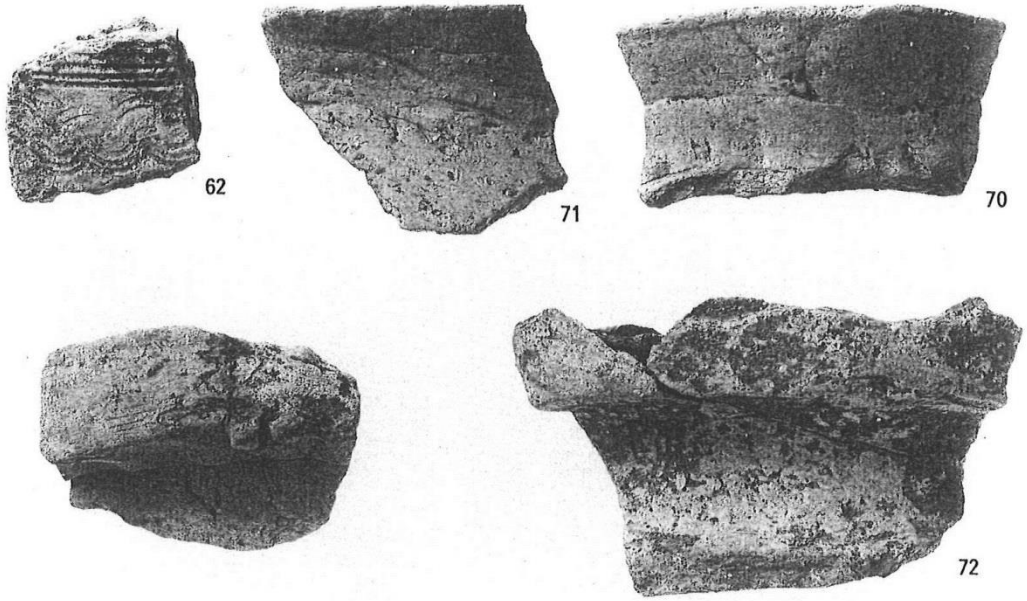


93

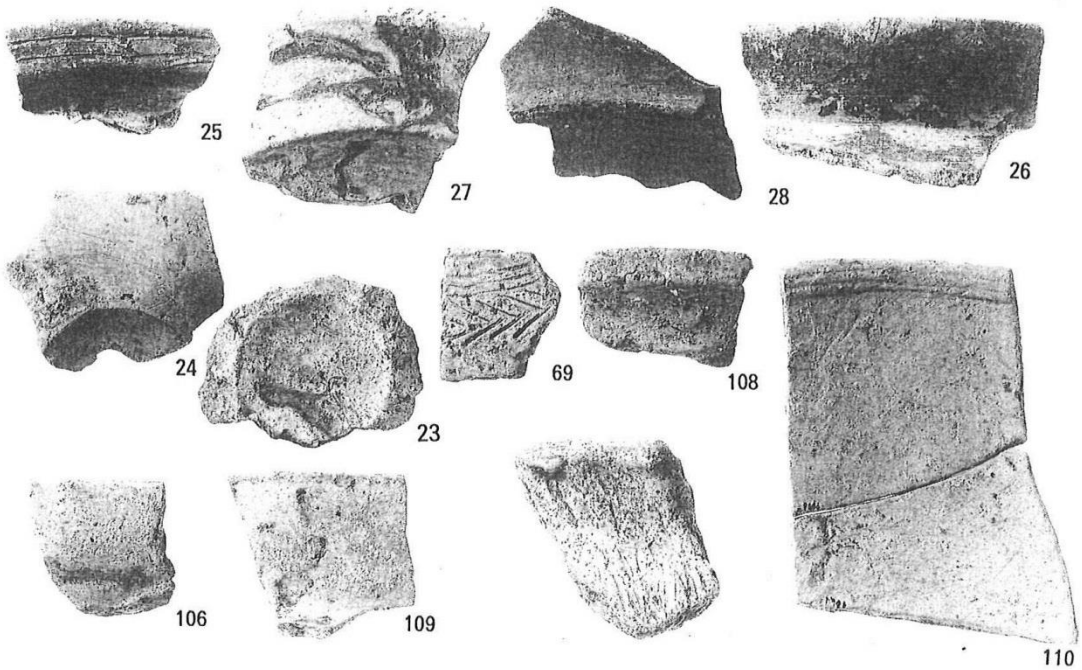


102

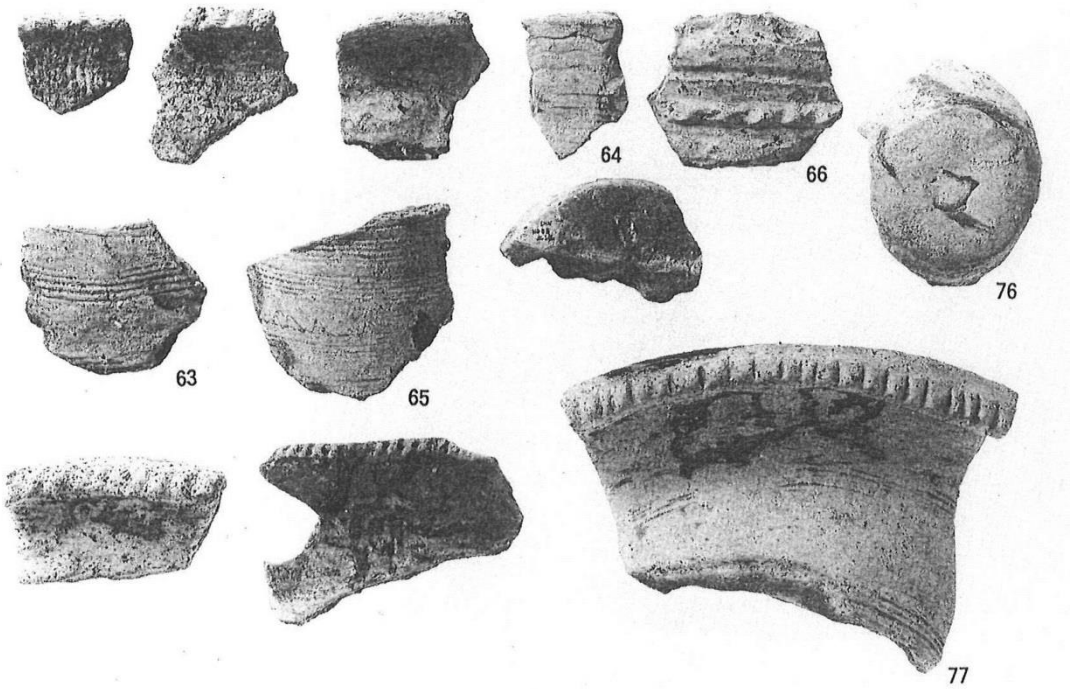
遺構および包含層出土土器
93・99・102：ＳＫ０６、その他：包含層



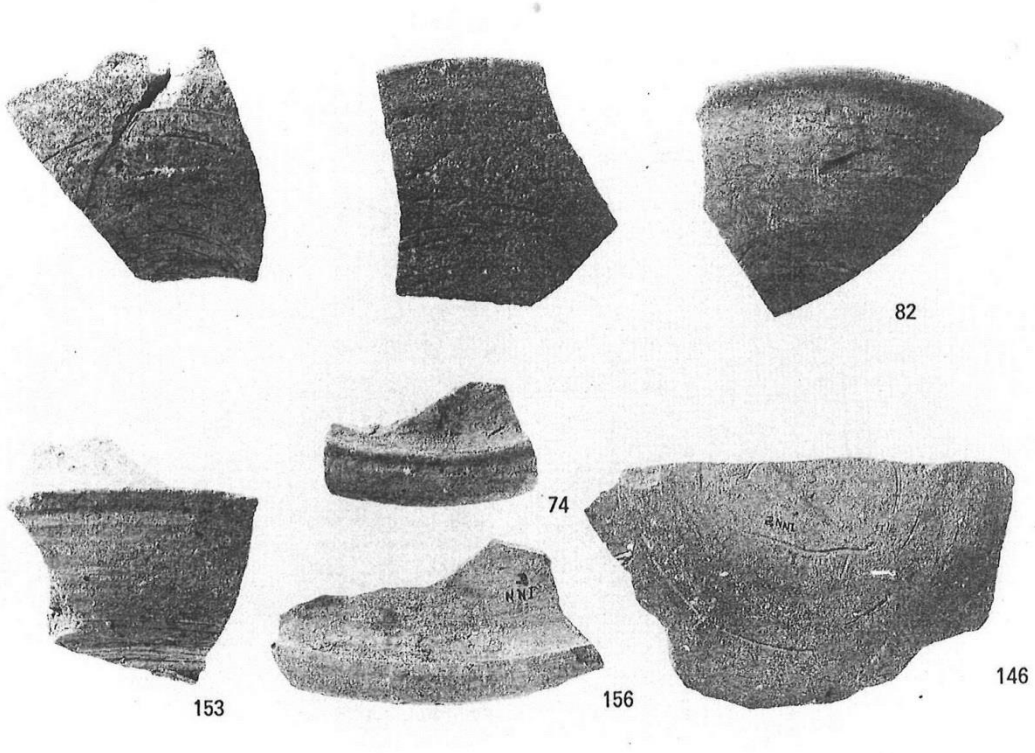

（１）SK01 出土土器



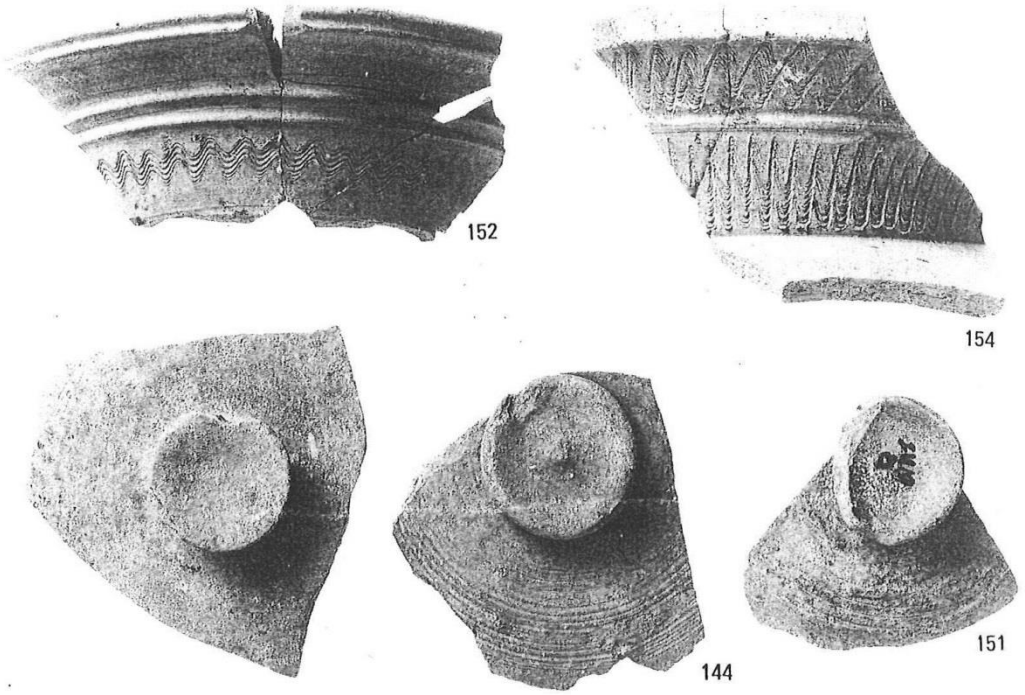

（２）23～28：SD05、69・106・108～110：SK07 出土土器



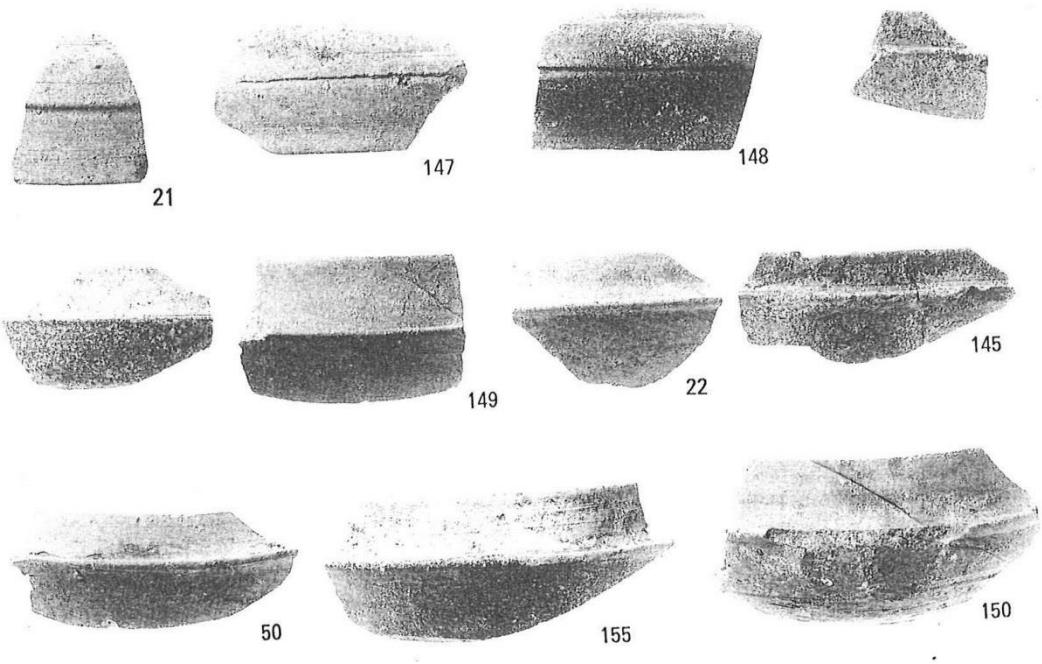

（１）SK10 出土土器



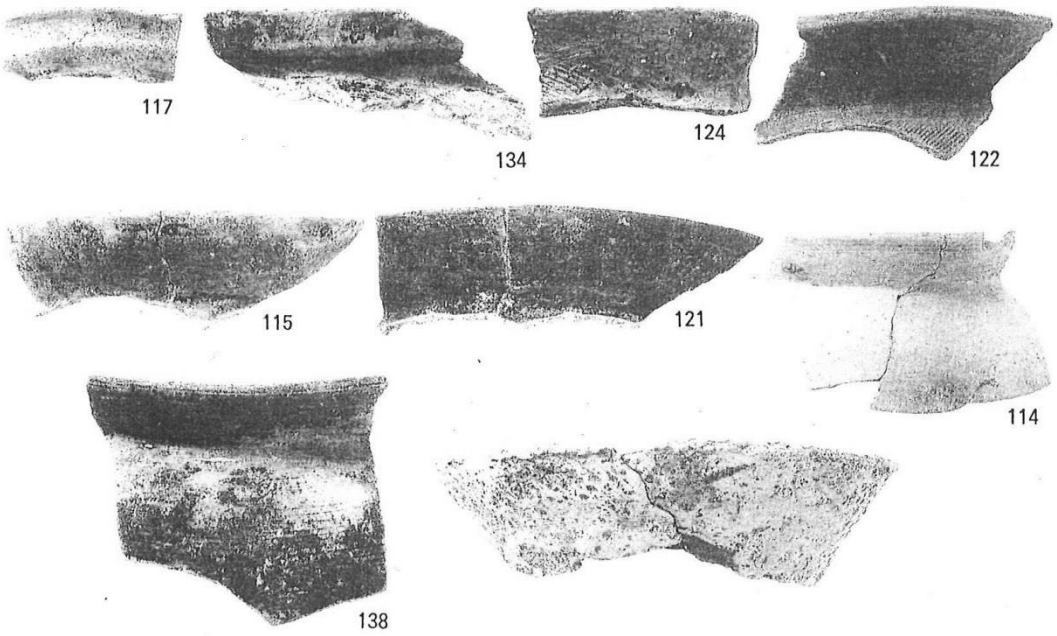

（２）74：SK07、82：SK16、146・153・156、その他：包含層出土須恵器



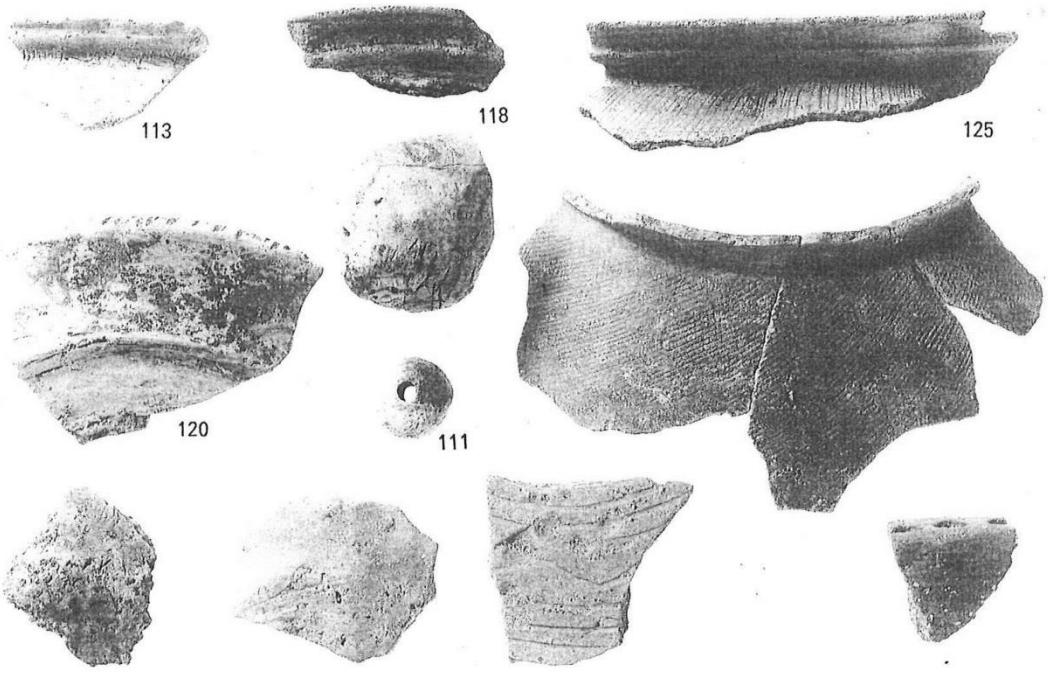

（1）包含層出土須恵器



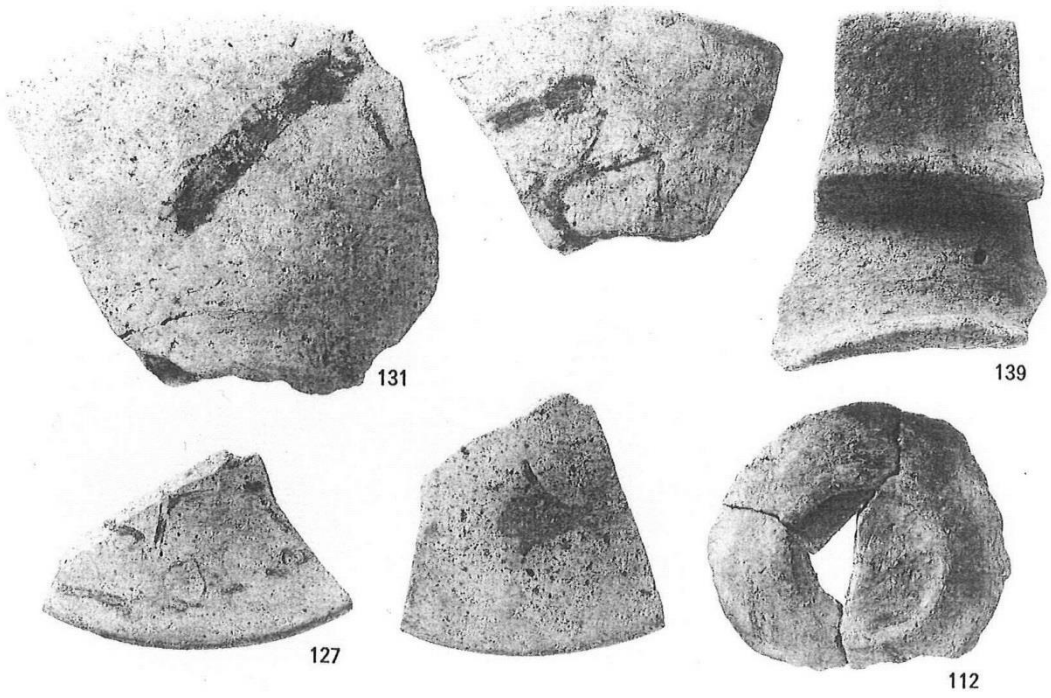

（2）21・22：SD02、50：IP5、その他：包含層出土須恵器



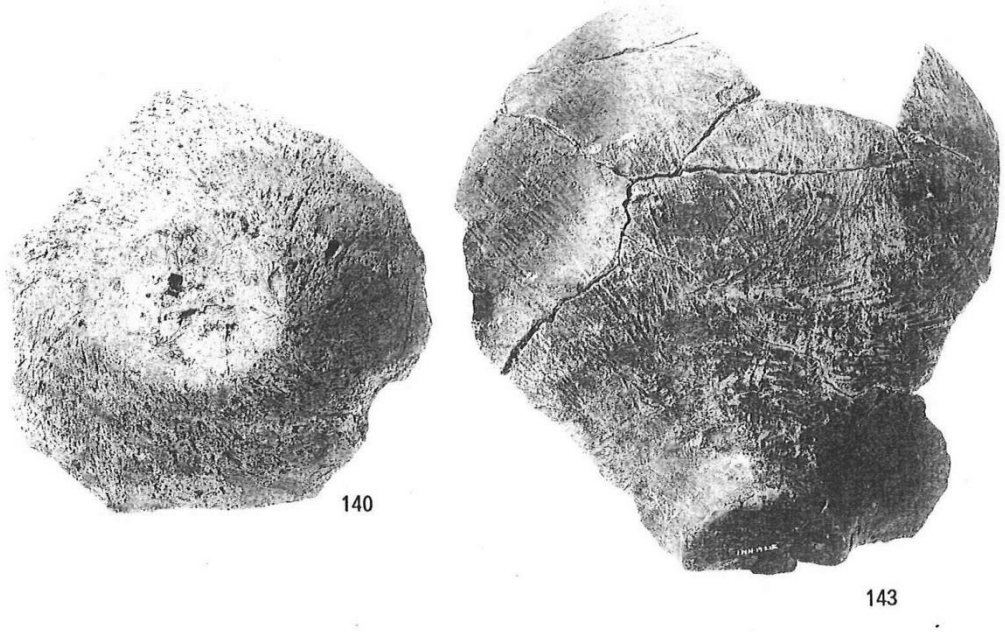

（1）SK13 出土土器



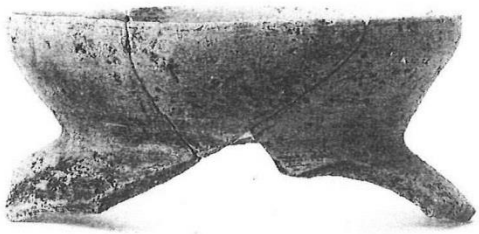

（2）SK13 出土土器・土錘



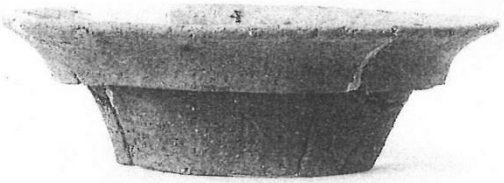

（1）SK13 出土土器

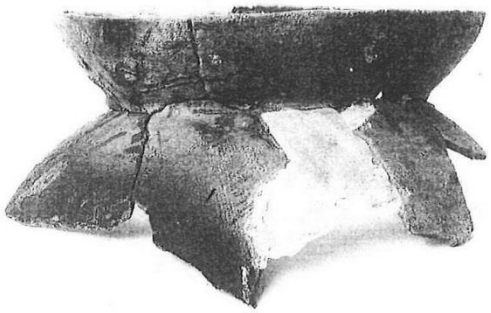


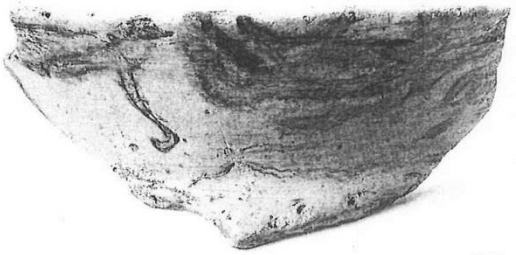

（2）SK13 出土土器



116





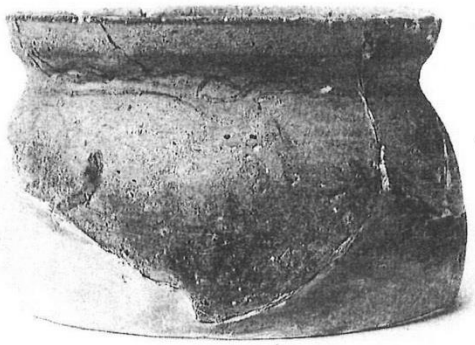


123

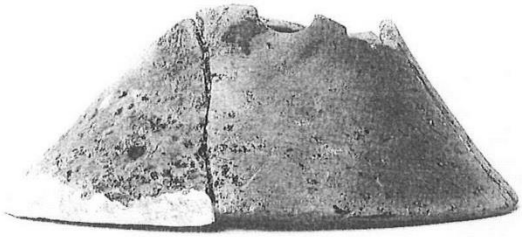
141

142

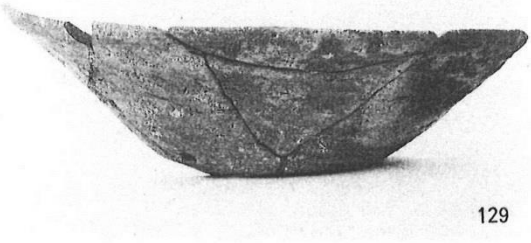
SK13出土土器



119

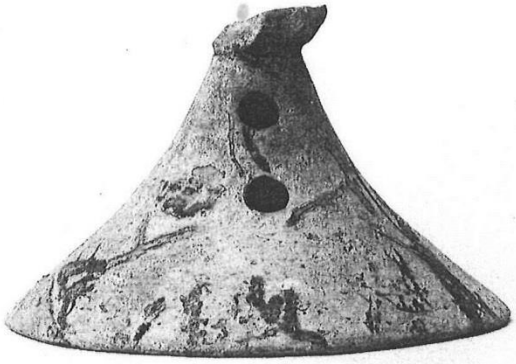


128

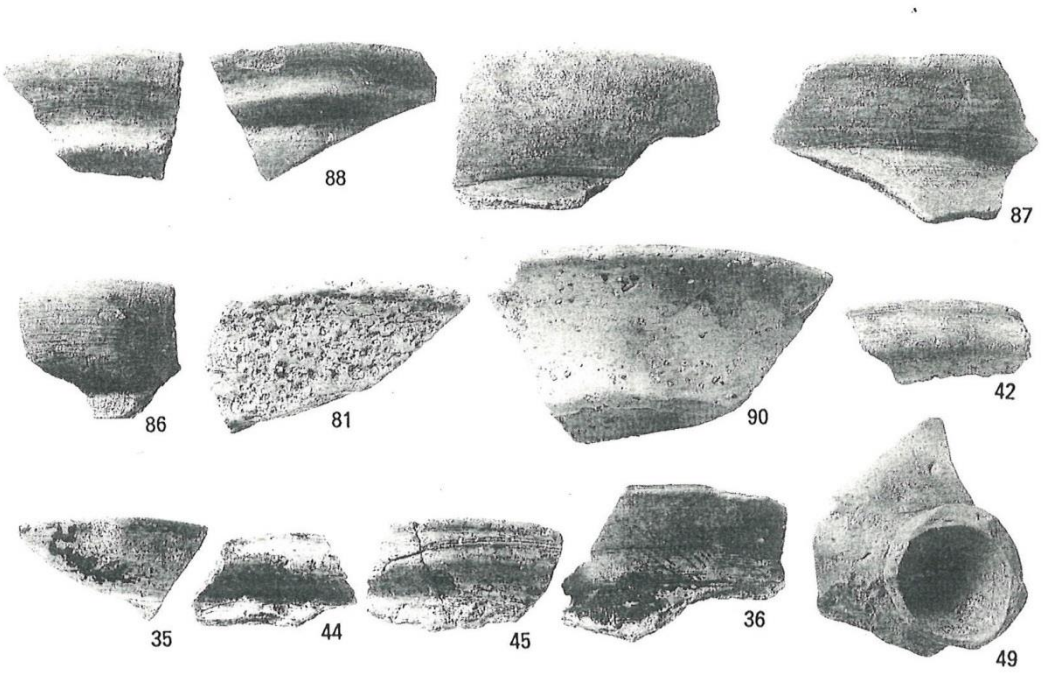


129

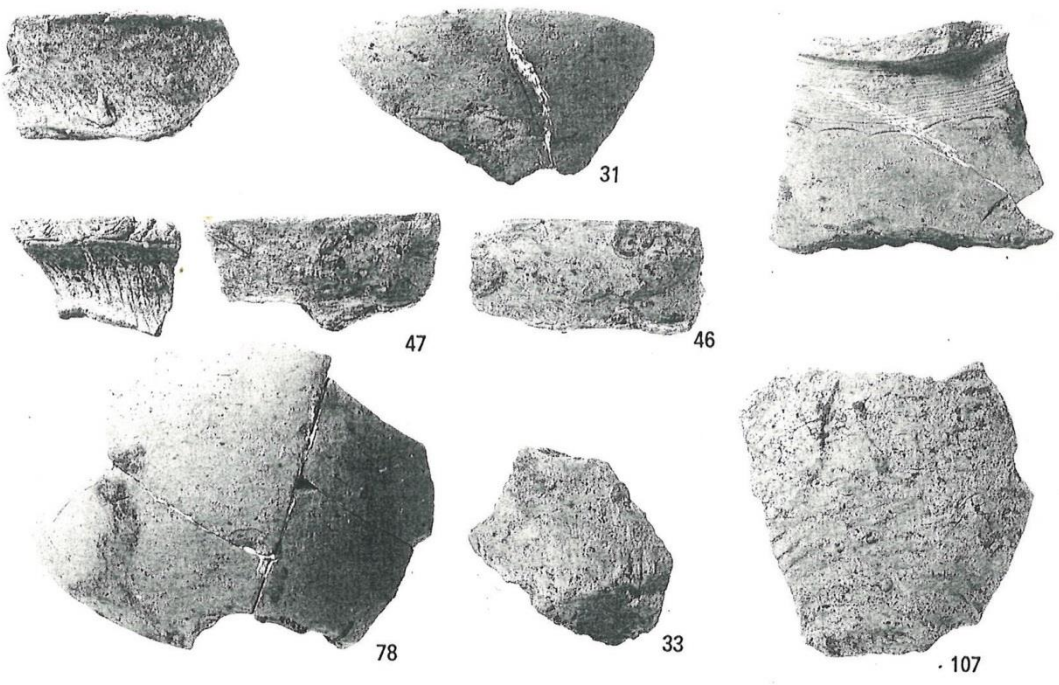
ＳＫ１３出土土器



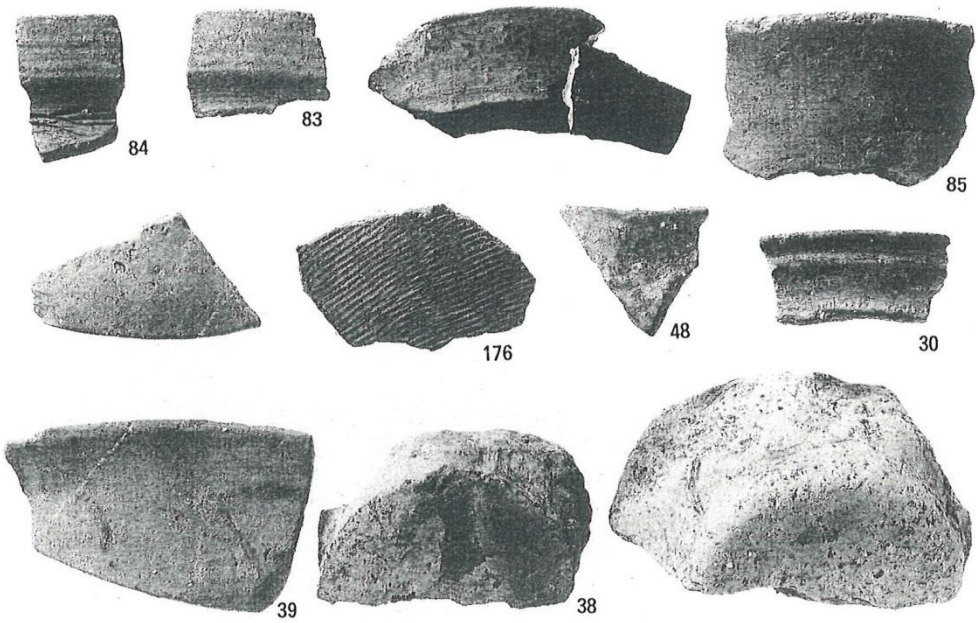
130



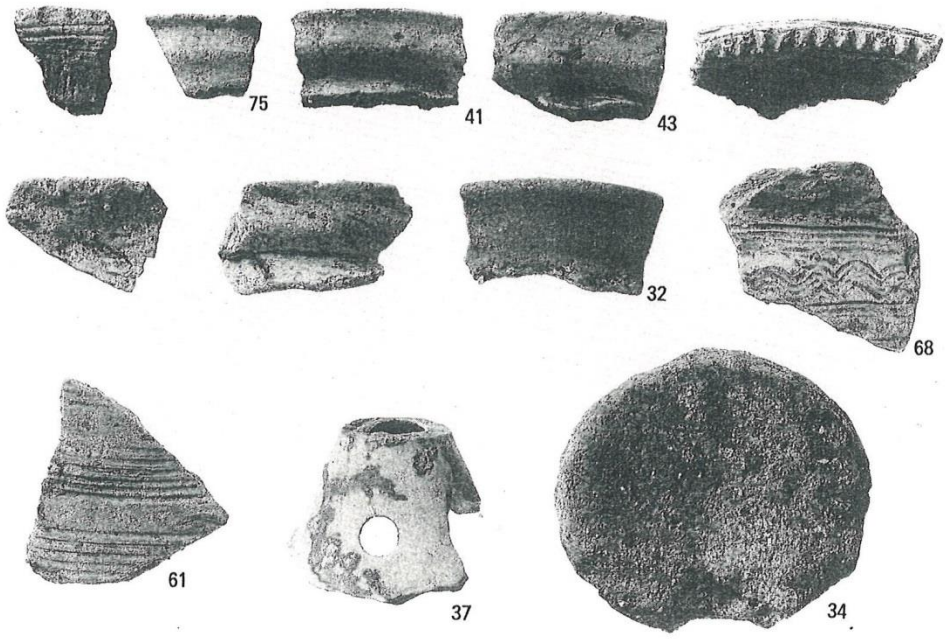

（1）遺構出土土器　35・36：SD17、42：VP11、44：IP63、45：VP8
49：VP18、81：SK16、86～88：SK18、90：SK19



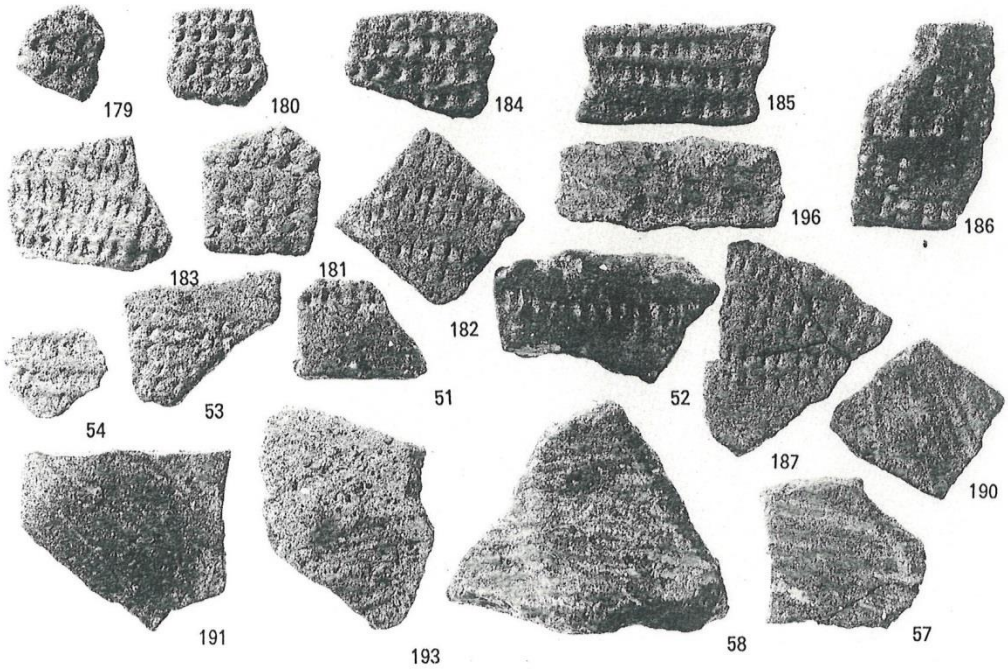

（2）遺構出土土器　31：SD15、33：SD17、46：VP14、47：IP19
78：SK11、107：SK07



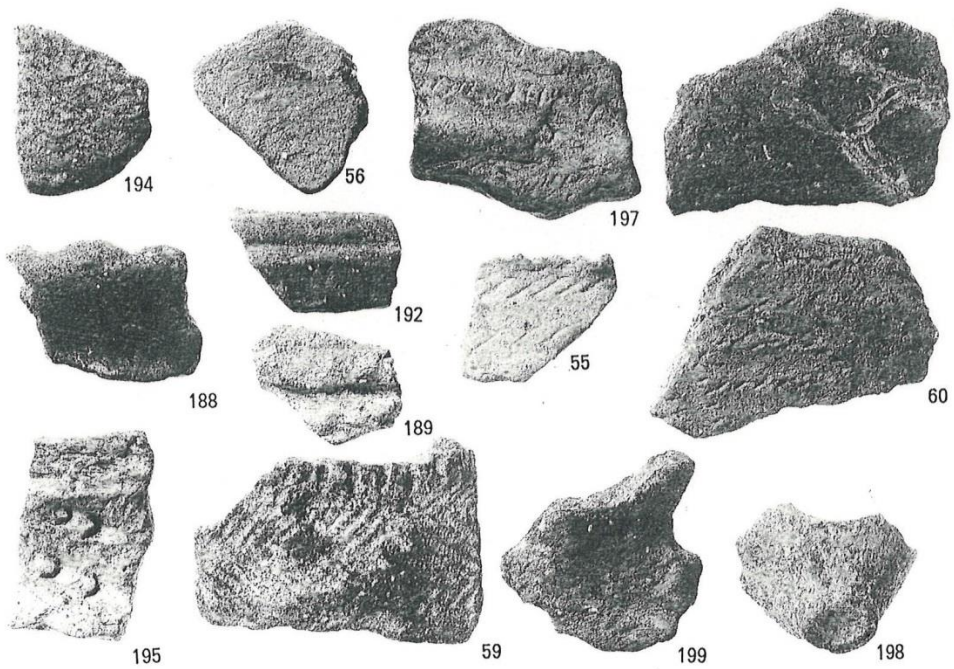

（1）遺構出土土器　30：SD07、38・39：SD10、48：IP43
83～85：SK07、176：包含層



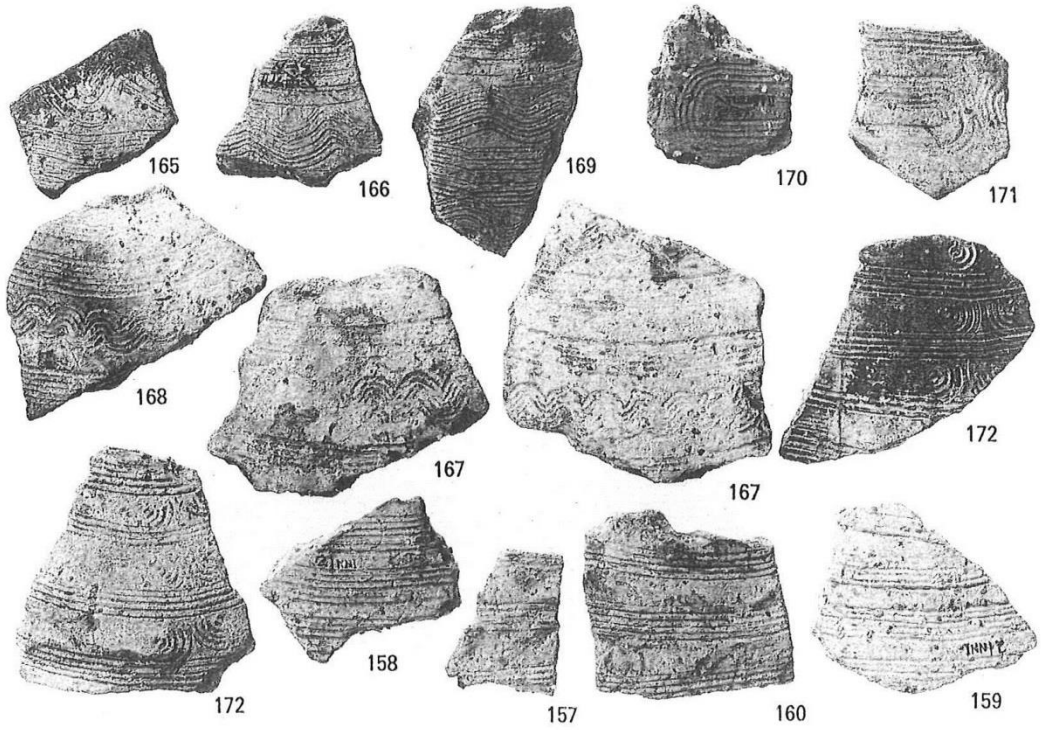

（2）遺構出土土器　32：SD15、34・37：SD13、41：IP39、43：IP53
61：IP62、68：SK07、75：SK08



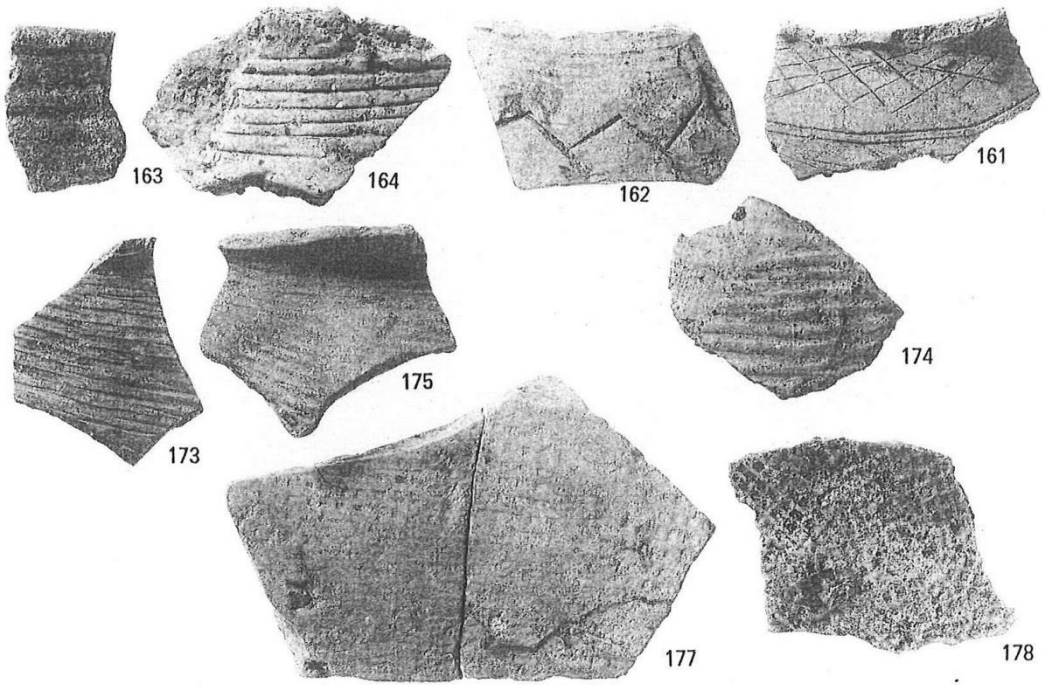

（1）縄文式土器　51：IP5、52：IP29、53：IP50、54：IP54
57：SD08、58：SD19、その他：包含層




（2）縄文式土器　55：SK07、56：SK16、59：SD01、60：SD02
その他：包含層

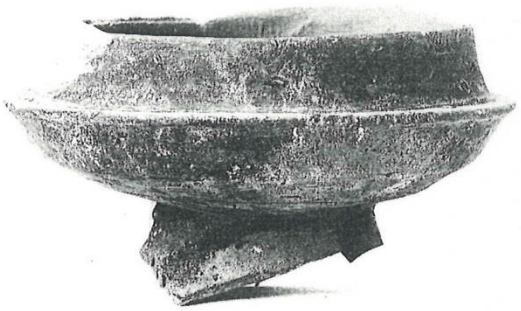



（1）包含層出土土器




（2）包含層出土土器

150



227

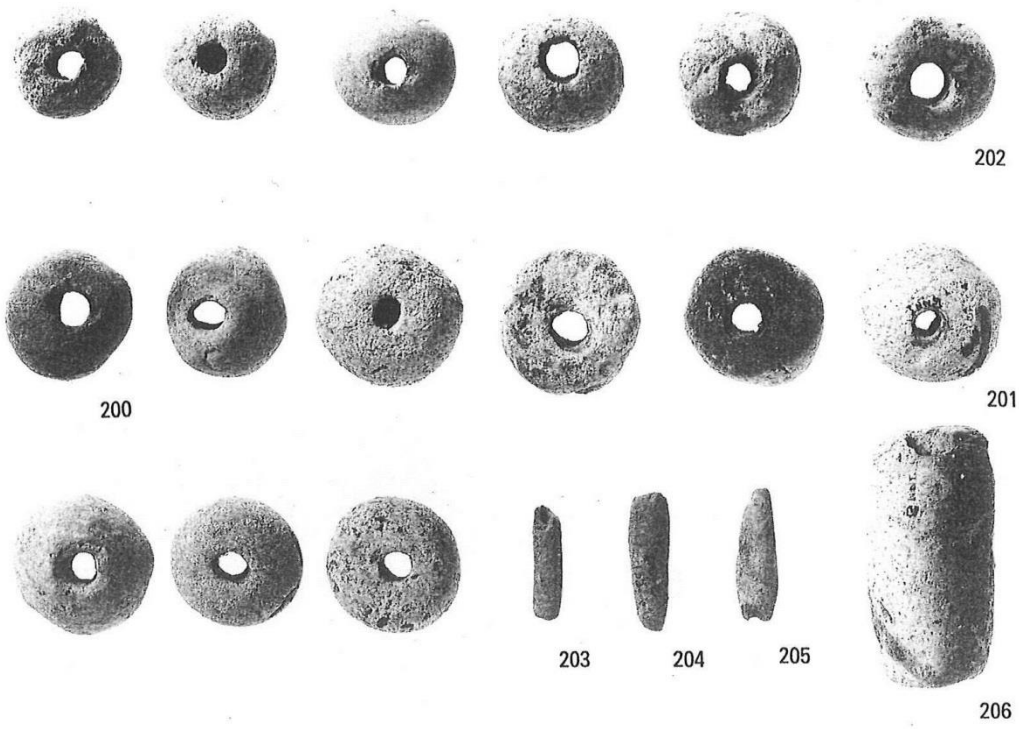
230

228

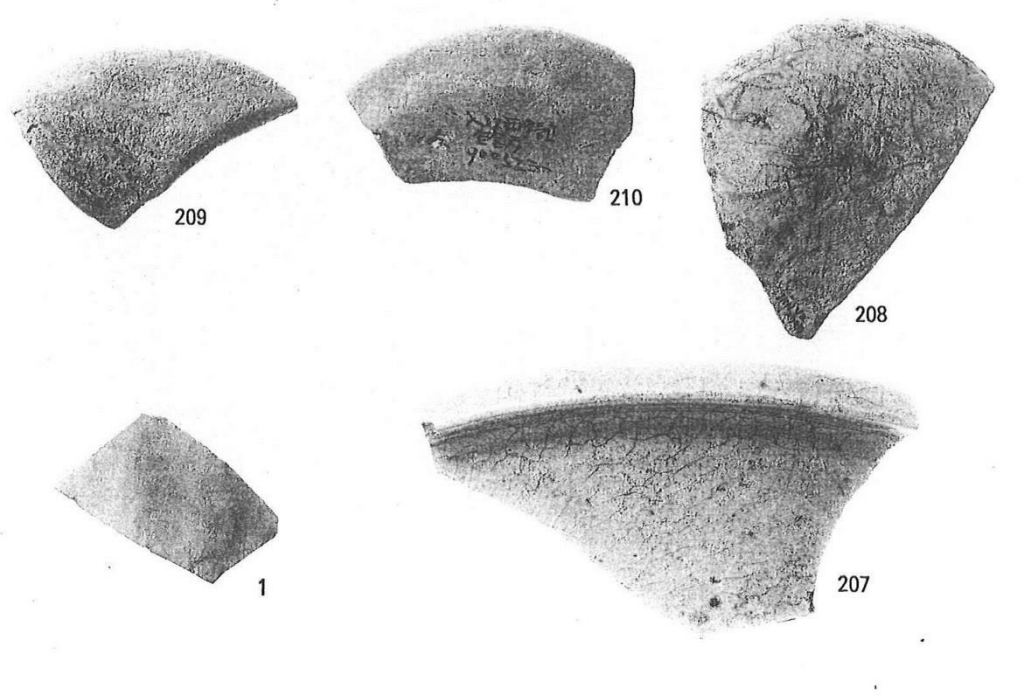
231

229

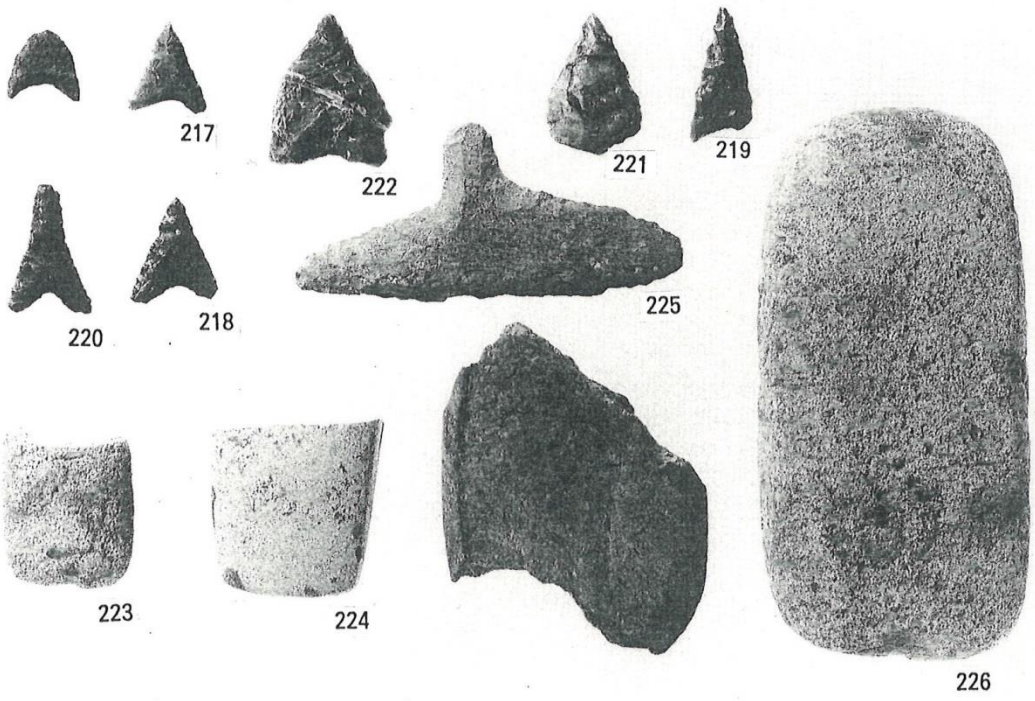
150：包含層出土須恵器
227～231：V区スクモ層内出土須恵器



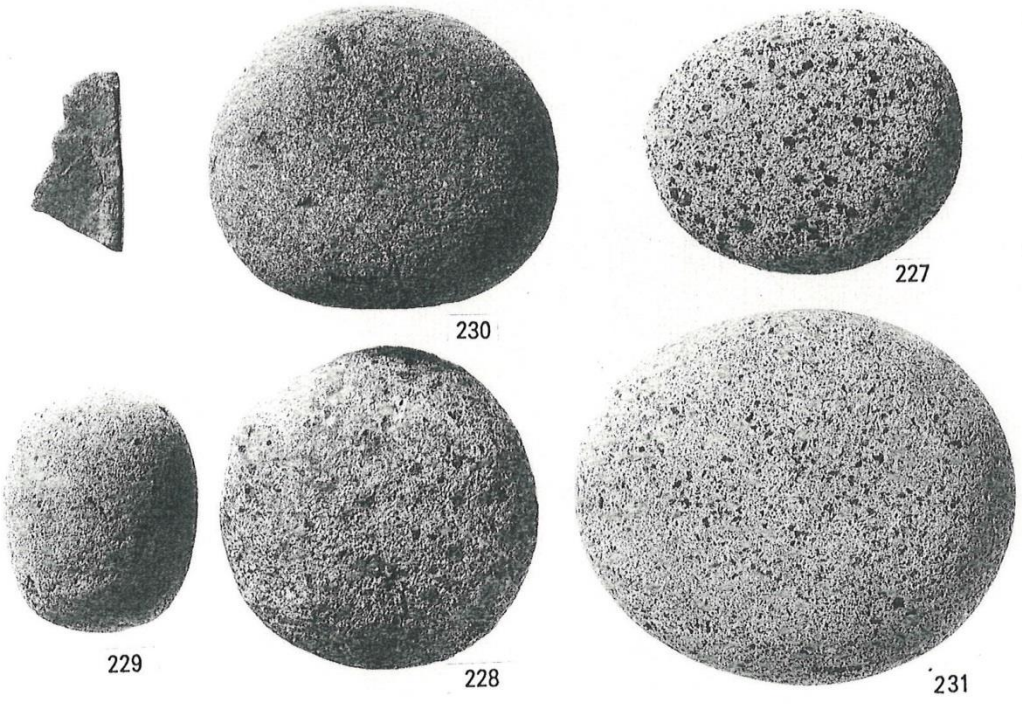

（1）土　錘




（2）古墳時代以降の土器

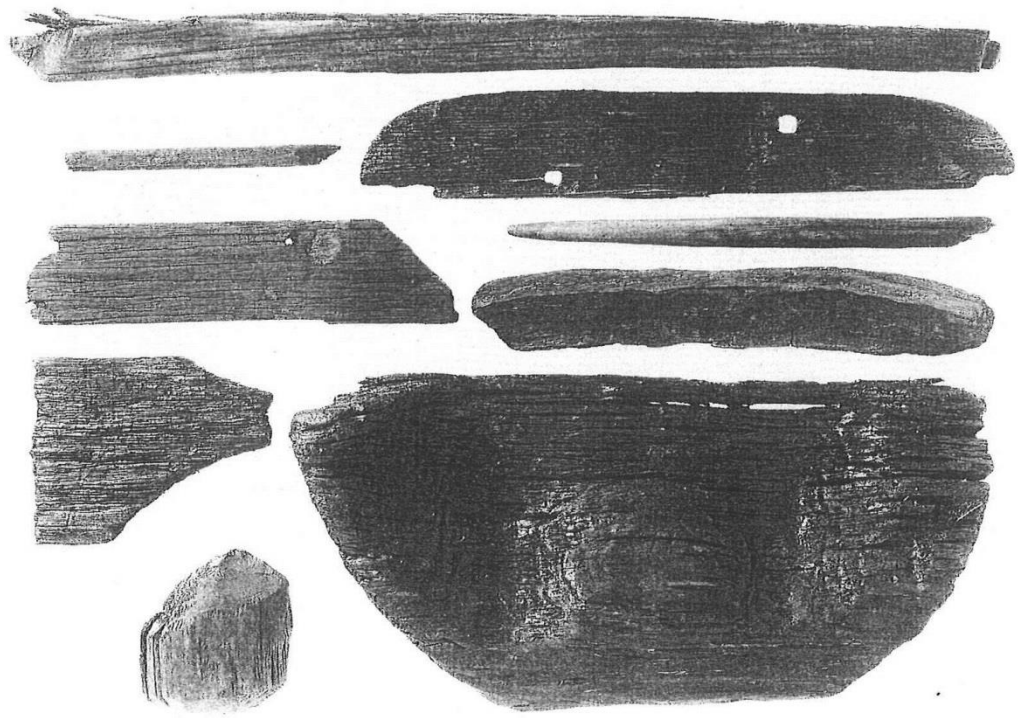



（1）石　製　品

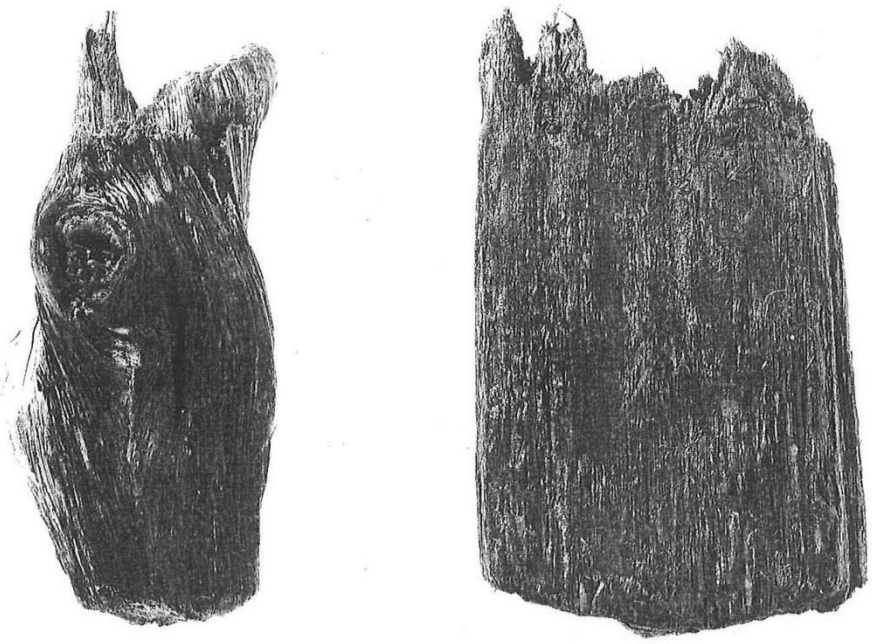



（2）石　製　品

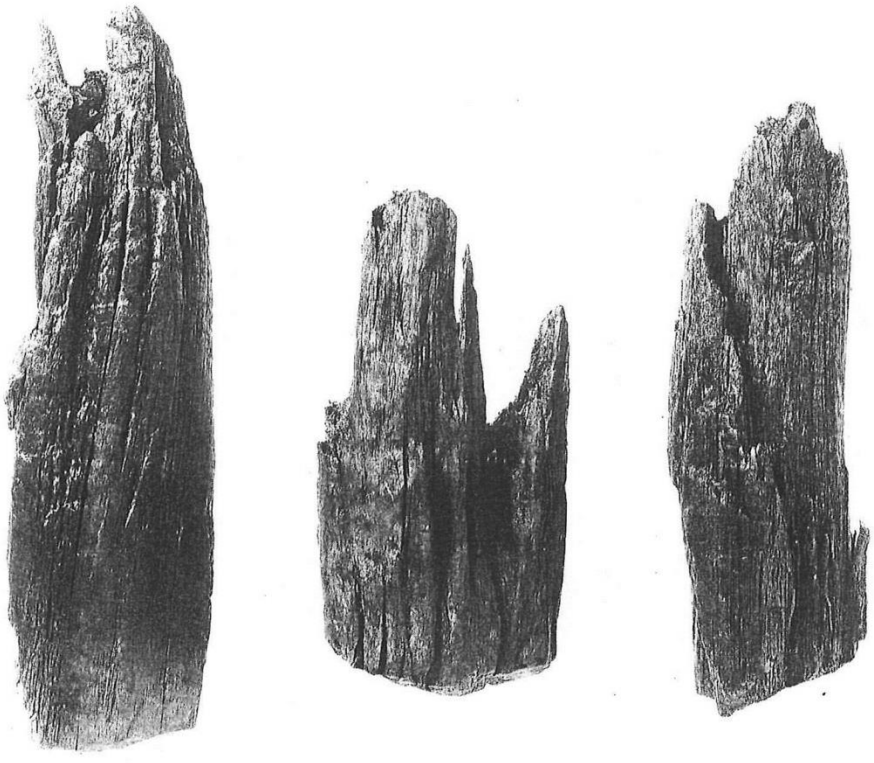
（1）植 物 種 子



（2）木 製 品



（1）残存柱材



（2）残存柱材

米原町埋蔵文化財調査報告書XIV

# 入江内湖西野遺跡発掘調査報告書

―町道彦根・米原線建設に伴う発掘調査―

平成３年３月 25 日印刷

平成３年３月 31 日発行

編集・発行　米原町教育委員会

滋賀県坂田郡米原町下多良３丁目３番地

印　　刷　立　木　印　刷

滋賀県坂田郡米原町醒井 478－１